『嗅覚の怪物　兎と蟹』

一．食らう

春は　早うから　川辺の葦(あし)に
カニが店出し　床屋でござる
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
小ガニぶつぶつ　石鹸(シャボン)をとかし
おやじ自慢で　はさみを鳴らす
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
そこへ兎(うさぎ)が　お客にござる
どうぞ急いで　髪刈っておくれ
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ

仕留めた兎は、まだ完全には死んでいなかった。
真っ白い体を赤い血に染めながら、ピクン、ピクンと全身を痙攣させている。大地を探すように必死に跳ねようとする両足が、虚しく空を切っている。
男達は、しばらくその様子を見ていた。
やがて、そのうちの一人が手にしていた猟銃の銃床の部分をその兎の頭めがけて降り下ろした。メキッという鈍い音とともに、一瞬で片が付いた。頭の骨を砕かれた兎は、断末魔の叫びすらあげられずに絶命した。
「美味そうだな。早いとこ、さばいちまおう」
「ああ、そうだな」
二人が、ニヤリと笑顔を交わした。
血抜きができる沢は、すぐそばにあった。
「よし。今日は、俺がやろう」
別の一人がそう言って、腰につけた鞘から中型の狩猟ナイフを抜いて見せた。
真新しいそれは、刃の部分はもとより、鹿の角でできている握りの部分まで輝いて見えた。
「おっ、新しいナイフだな。買ったのか？」
「まあ、そんなところだ。だから、試してみたいんだ」
そう言うと、男は兎の後ろ足を束ねてロープで縛った。
そうしてから、ロープの先端の方を近くの木の頑丈な枝にひっかけて、兎を逆さ吊りにした。そして、躊躇なく兎の腹のつけ根の部分にナイフを刺し込んだ。
問答無用で、グサッと刺し込む。そのまま、ナイフの刃は兎の腹を下に向かって裂いていく。真新しい刃は、まるでジッパーを降ろすように皮や体毛の抵抗を受けずに、スーッ

と喉の部分まで切り下ろしていく。
「ククッ、そのナイフは、本当にいい切れ味だな！」
その様子を見ていた男の一人が、異様に目を輝かせて言った。
「ああ、確かにな…」
ニヤニヤと笑って答えながら、男は兎の両足を引っ張って脱臼させた。
そして、裂いた腹の部分を大きく開いた。真っ赤な臓物が盛り上がるように詰まっている。男は何のためらいもなく、淡々と、手際よく腸や肝臓を切り取っていく。ドロドロと臓物の一部が滑り落ちる。それを取り出すと、腹部が空洞になった胴体を沢の水で入念に洗う。
血抜きと内臓の処理が終わると、もう一度木の枝に吊るして、何ヶ所かに切り込みを入れる。そうしておいてから、兎の皮を剥ぎ始めた。今度は、ナイフは使わない。手で皮を引っ張るだけだった。バリバリと剥がしていく。皮は驚くほど簡単に剥がれていった。男は慣れた手つきでどんどん剥いでいく。白い毛皮の膜の下の赤い筋肉の中身が徐々に姿を現し始める。
他の男達は、そばに停めてあった軽トラックから鍋や火器類を降ろして調理の準備に入っていた。ポリタンクの水を鍋に入れて沸かし始める。鍋が熱くなった頃には、兎の皮はすっかりと剥がされていた。もはや、それは元が何であったかがわからない肉だけの四つ足の「物体」であった。
毛皮を剥いだ男は、その肉の物体と化した兎を大柄な男に渡した。
大柄な男の方は、肉の物体をまな板の上に乗せると、持ってきた包丁で解体に入る。男も手慣れた様子で物体を切り分けていく。それは、あっという間に二十個程の小さな塊にされた。そこまでになってしまうと、その原型が何であったかすらわからなくなる。煮立った鍋の中に味噌が溶かされ、続いてネギが入れられる。そして、ぶつ切りにされたばかりの肉が放り込まれる。
男達の目は、その煮立った鍋に釘付けになった。ギラギラと光る八つの目だ。知能と道具とで食物連鎖を制した獣達の目だ。
「おい。そろそろ、いいんじゃねえか？」
しばらくして、鍋の様子を見ていた大柄な男が、そう言ってどんぶりと割箸を用意しだした。
皆は、どんぶりに盛られた肉にありついた。ガツガツと肉の塊を喰らう。そして、口々に感嘆の声をあげた。
「う、旨えっ！」
「やっぱり、兎の肉は旨えっ！」

二．異変

少女が、いつもの田んぼ道を歩いていた。
家が見えてくると、だんだん小走りになっていく。
「あれ、何だろう…？」

普段より早く帰宅した少女は、庭先にある納屋の横にいつもとは違う黒い大きな何かがあることに気づいた。
納屋の裏に隠すように停めてあったのは大きな黒い外車だった。
「お母さん、帰ってるの？」
玄関にランドセルを置くと、そのまま奥の部屋へ向かう。
部屋の奥から、すすり泣くような声が聞こえてきた。
少女には、それが母親の声だとすぐにわかった。少女は、知らず忍び足になって歩んでいた。部屋から洩れてくるそのすすり泣きの声に、普通ではない「何か」を感じ取ったからだ。
襖の隙間から部屋の中を覗いた少女は、思わず息をのんだ。
裸の男女が畳の上でもつれ合っていた。男の腰の下から伸びた真っ白い二本の足が、許しを請うように激しく宙を舞っていた。
組み伏せられている女の方は、やはり母だった。
顔をゆがませていた。見たこともないような、物凄いゆがみ方だった。
「お母さ…」
と、言いかけて、少女は言葉を飲み込んだ。
泣き声のようなものをあげている母親の様子が、泣いているそれとは少し違っていると感じたからだ。明らかに、哀しみのそれではなかった。従属している者のそれではなかった。
むしろ、相手を受け入れて、悦んでいる者のそれに思えた。

三．拝殿

その老婆は、農道を黙々と歩いていた。
背中は曲がっているが、その歩みはしっかりとしている。
手には巾着袋とレジ袋を持っている。袋の揺れ具合から、その中身はさほど重いものはないとわかる。老人が難なく持てる程度の重さだ。
やがて、農道の途中の小さな鳥居が立つ道に入っていく。
しばらくすると、車が数台置けるほどの広場になる。その先は長い石段になっている。
健康な成人でも、それを見上げれば、一瞬は躊躇する長さの石段である。だが、老婆は迷うことなくそのまま石段を上がっていく。石段は、二百段近くある。老婆は、それを踏みしめるように一歩、また一歩、上っていく。
文字通り、亀の歩みだ。
上りきったそこは、開けた境内になっていた。その先には拝殿がある。
老婆はレジ袋の中から取り出したものを拝殿の前に並べるように置いた。それは、三匹の沢蟹だった。すでに死んでいるが、売りものではない。どこかの沢で取ってきたものだろう。
それから、老婆が拝殿に向かって手を合わせた。
聞き取るには小さすぎる声で、だが、必死の形相で何かをつぶやいた。

つぶやき続けた。

四．呼び出し音

羽田空港、午後三時。
Ｃ滑走路隣地―。
鈴木翔英は、普段にも増して空の様子に神経を向けていた。
耳に付けた管制塔との連絡用無線にも同じように気を配る。予定通りなら、目的の機は間もなく東の空に現れるはずである。東京湾に沿って延々と続く広大な平地には、彼以外誰もいない。
「そろそろだ…」
腕時計を見た翔英は、手にしていた散弾銃を肩にかけると、代わりに双眼鏡を手にした。それで一帯の上空をゆっくりと三百六十度回転して見てみる。
普段は五分おきにする作業だが、今日は特別にそれよりも頻繁に行っていた。間もなく、特別な機が到着するからだ。その機の為に、迎える政府側は一番離発着の混雑の少ないこの時間帯を選んでいた。
羽田のように、大きな空港には必ず今の翔英と同じ作業をする職員が配置されている。離着陸するジェット機のルート上に鳥が飛来するのを散弾銃で防ぐ仕事だ。
ジェット機は、離着陸時には低い高度を通過しなければならない。その領域では鳥と衝突する危険が伴うのだ。いわゆる「バード・ストライク」である。飛来した鳥は、機体や、時には操縦席の窓に衝突することがある。だが、最も危険なのは、その鳥がエンジンのタービンの中に入ってしまった場合だ。そうなった場合、鳥は中に吸い込まれタービンを破壊する。当然、そのエンジンは機能を停止してしまう。そう言った事故は、実は想像以上の確率で発生している。
そこで、翔英のように事前に該当する上空を監視する仕事が不可欠なのだ。
つまり、域内に鳥が侵入した場合は、それを撃って撃退する、もしくは追い払うのである。鳥類は、小さすぎること、低空を飛ぶことなどの理由から、管制塔などのレーダーでは完全には捕捉しきれない。だから、最先端のテクノロジーを使う空港においても、いまだにこうやって、人間の目で管理しているのである。この職員はＢＩ（対鳥類撃退班）という名で呼ばれており、巨大なこの羽田空港では常に三名のＢＩ職員が滑走路の周囲に配置されている。
翔英は、このアルバイトを引き受けたことを少し後悔していた。
大学生でありながらクレー射撃の有力選手である彼は、その練習費用を稼ぐ為にこの仕事を気軽に引き受けてしまったのだ。その作業の特殊性、重要性から、時給は驚くほど高かった。その代わりに、常に神経を集中させていなければならないそれは、想像以上に過酷な仕事だった。特に、外国の要人を迎える今日のような日はなおさらであった。だが、このアルバイトの依頼を空港警察から受けて、自分を推薦してくれたのが恩人である三上恵造だったことから、断ることができなかったのである。
成人した翔英は、大学に通いながらＭＪ社で手伝いをさせてもらって生計を立てていた。

勿論、クレー射撃の練習もタダ同然でやらせてもらっていた。三上は、翻英のことを思って、時給が飛びぬけて高いこのアルバイトを自分に紹介してくれたのだ。勿論、その大前提には、翻英の人並外れた射撃の能力があったことは言うまでもない。

しかし、今日はひとつだけ救いがあった。

翻英が兄と慕う田代水丸もこの空港構内に来ているからだ。その特別機を迎える警備責任者である警察本部長の宗方に部下として同行してきているのだ。そして、今日の警備の任務が完了したら、田代に夕飯をごちそうしてもらえることになっているのだ。行く店も、もう決まっていた。羽田にほど近い環八沿いにあるステーキハウスだ。

どんな肉を食べようかと頭に思い浮かべている時だった。

耳につけたレシーバーの呼び出し音が、ピピッと鳴った。

「ＢＩ班、応答願います」

空港の管制塔からだった。

「これより三分後に、特別機が着陸態勢に入ります。各人の持ち場の状況に異常はありませんか？」

「こちら、ＢＩ-１。異常ありません」

「ＢＩ-２。異常ありません」

空港の西側と西南側を担当するＢＩの職員達が、順番に応答する。

「ＢＩ-３、異常ありません」

双眼鏡で辺りを見回しながら、三番目に翻英が答えた。

もう一周見回してから、翻英は東南の空に双眼鏡の照準を合わせた。十キロ先の上空に該当機の姿を確認できた。国賓として訪れるヒンドゥ国の大統領を乗せた特別機だ。それは、上空での大きな旋回行動を終えて、まっすぐに翻英のいるＣ滑走路へ向かって来ていた。

「ＢＩ班、最終確認をします」

二分後に、再度管制塔から確認が入った。

「一分後に、特別機が着陸態勢に入ります。各人の持ち場の状況に異常はありませんか？」

「ＢＩ-１、異常ありません」

「ＢＩ-２、異常ありません」

念入りに双眼鏡で辺りを見回しながら、三番目の翻英も同じように答えた。

「ＢＩ-３、異常ありません」

ほどなく、特別機はＣ滑走路に着陸した。

徐々にスピードを落としながら、滑走路上を走行する。走りながら、機首を少しずつ東側に向けていく。東貨物地区の横にある特別機専用のスポットへ向かうのだ。そのスポットにはボーディングブリッジはない。タラップを使って降りてもらう。そこで出迎え、歓迎する為である。そして、そこからすぐのところにあるＶＩＰ用の貴賓室にいったん移動する手はずだ。

その界隈には多くの人が集まっていた。

出迎えの政府関係者や経済団体の代表達だ。その後ろには自衛隊の楽団が整列して出番を待っている。タラップから敷く赤い絨毯を抱えた係員も控えている。それを取り巻くように警備のスタッフが配置されている。その中には、警備責任者の宗方や田代水丸も混じ

っているはずだ。
それを見届けた翔英は、双眼鏡から目を放しホッと胸をなでおろした。
自分の任務はこの時点で完了であった。あとは田代からの食事の誘いの連絡を待つだけであった。軽い歓迎行事を終え、リムジン車へ大統領一行を乗せてしまえば、それで田代の方もお役御免になる。そして、そのあとは翔英とステーキハウスへ直行するのだ。
そのはずであった。
だが、本来このタイミングで鳴るはずのない無線機の呼び出し音が鳴った。

五．万策尽きる

「ＢＩ－３、応答願います」
「は、はい。ＢＩ－３です」
翔英が、あわてて答えた。
「東北東上空に何かが見えます。そちらからの方がずっと近いので確認願います」
声の主は、管制塔の下のレーダー管制室からではなく、最上階にいる管制官からだった。最上階は四方全面がガラス張りになっており、目視による管制を行う職員が配置されている。そこで、空港から半径約９キロメートル、高度９００メートルの範囲にいる航空機の離着陸の指示や誘導を担当しているのだ。そのうちの一人からの呼びかけだった。
「了解。確認します！」
翔英が、あわてて双眼鏡を手にして、その方向を凝視した。
「あっ！」それを見た翔英が、思わず声をあげた。
確かに、何かが飛来していた。
いくつかの黒い粒が見える。２キロ程先だ。大きさから考えて、飛行機やヘリコプターの類ではない。形が判別できないほど小さいからだ。翔英は双眼鏡のピントを絞った。まだ、何かははっきりと判別できない。しかし、鳥でもなさそうだ。
「ＢＩ－３。どうですか。確認できましたか？」
管制官が、余裕のない様子で返答を催促してくる。
「まだ、はっきりとは…。でも、鳥にしては速度が少し遅いような気がします」
翔英は、双眼鏡のレンズに向かって、必死に目を凝らした。
独立した四つの何かが、編隊を組んで飛んでいる。みなどれも同じ形のものだ。大きさは鳥くらいだ。だが、やはり鳥ではない。こちらに向かって飛んで来ているので分かりづらいが、鳥の飛行速度よりは少し遅いのだけは経験上判断できるからだ。
「あっ、あれは！」
翔英が大声をあげながら、さらに目を凝らした。
「どうしました、ＢＩ－３。何かわかりましたか？」
「ドローンです。あれは、ドローンです！」
翔英が叫んだ。
「ドローン…。あの遠隔操作機の、ドローンですか？」
「そうです。その、ドローンです！」

「翔英君、ドローンに間違いないのか？」
そう聞き返してきた声の主は、田代水丸だった。
管制用無線に割り込んできたのだ。
「はい、まちがいありません」
翔英は、断言した。
「全部で何機だ？」
田代に訊かれた翔英は、双眼鏡のレンズがめり込むほどに目を当てて、その数を数えた。
「４…、全部で４機です！」
「本部長。４機のドローンが、こちらへ向かって来ます！」
田代の報告を横で聞いた宗方が、反射的に特別機の方を見た。
ちょうど地上走行が終わり、停止状態に入ったところだった。
「全員、周囲にドローンを操作している人間がいないかを捜索しろ。空港警察や警備員も総動員するんだ。それから、特別機に急いでタラップをかけろ。ただし、指示があるまで絶対に扉は開けるな！」
宗方が、大声で周囲の部下に指示を出した。
「狙撃班、聞こえるか？」
続けて、東貨物棟の屋根の上に配置しているＳＷＡＴの狙撃隊員を呼び出す。
「はい、本部長。聞いています」
「そこから、上空のドローンが確認できるか？」
隊員はあわてて、下方の通行経路に向けて固定していた架台からライフルを取り外して、上空に向けた。そして、急いでライフル上部のスコープの照準を合わせる。
「いました。１．５キロ程先に、４機のドローンを確認しました。真っすぐ、こちらへ向かって来ています！」
隊員が上ずった声で返答してきた。
「よし、そこから撃ち落とせるか？」
「まだ、距離が遠すぎます。それに…」
隊員が、声を詰まらせた。隣でそのやり取りを聞く田代には、その理由がわかっていた。
「本部長、あそこからでは、ライフルで撃ち落とすのは難しすぎます」
「どうしてだ。彼はオリンピック級の腕前だぞ？」
「基本的に無理なのです。もともとライフルは、止まっている標的が対象で、動いていてもせいぜい人の歩行のスピードまでです。しかも、元来は水平、もしくは下方方向に撃つものです。彼がどんなに優秀でも、上空にいる４機のドローンを時間以内に撃ち落とすことはできないでしょう。無論、ここにいるＳＰや警察官の拳銃ではまったく見込みがありません」
いつもながらに、非の打ちどころのない的確な田代の分析だが、今はそれがとても冷酷な宣告に聞こえた。
「海保の巡視艇からは、何とかなりませんか？」
ライフルでの撃退を諦めた宗方が、後方に控える海上保安庁の保安部長に訊いた。
「残念ですが…。今、沖合にいる巡視船や警備艇にはそこまでの装備は…」
海保の保安部長が申し訳なさそうに説明した。

巡視船には、射撃管制装置付きの機関砲が搭載されている。だが、それはあくまでも対海上船用のものであり、対空中のものではないのだ。
「そうですよね。わかりました。では、警備艇をできるだけかき集めて、この一帯の海上、沿岸の捜索を大至急始めてください。あのドローン群の操作は海上からの可能性もありますから」
「わ、わかりました」
保安部長が、あわてて隣の部下にそれを指示した。
「糞っ。こんなことなら、海上自衛隊も動員しておけばよかった」
宗方が、唇をかみしめた。
「確かに、海自の駆逐艦やフリゲート艦が持っている２０ミリクラスのバルカン砲や機銃なら撃ち落とせたかもしれませんね…」
東の空と自分の腕時計を何度も繰り返し交互に見ながら、呟くように田代が言った。
「だったら、田代君。どうしたらいい？」
宗方が、悲壮感すら感じさせる声で訊いた。
百戦錬磨の宗方も万策が尽きようとしていた。だが、東の空には、すでに向かって来るドローンの姿が目視でも確認できるまでになっていた。
「本部長。今、ざっとですが、ドローンのここへの到達時間を計算してみました」
「で…。あと、どのくらいで来るんだ？」
「あと３分強くらいでしょう」
迫りくる危機的状況がまるで他人事のように、田代が答えた。
「３分強か…。田代君。何か、打つ手はないのか？」
追いつめられた宗方が、すがるように訊いた。今回のヒンドゥ国の当主の訪日は、単なる表敬的なものではなかった。国家規模の巨大なビジネスの為であった。それは、ごく一部の警備関係者にしか知らされていなかった。
「ひとつだけ方法があります。…散弾銃を使うのです」
「散弾銃？」
「ええ。ライフルや拳銃ではだめでも、散弾銃なら可能です。ただし、相当の上級者でなければなりませんが…」
そう言って、田代が繋げたままの無線に向かって話しかけた。
「そういうことだが、どうだ、翔英君。いけそうか？」
「ええ、おそらく。あの飛行速度なら何とかなりそうです…。ただ、途中の弾の装填の時間を考えると、一人で全部は厳しいです」
通常、散弾式銃に一度に装填できる弾の数は二発だ。
中の二発を撃ち終わったら、一旦銃を開放して、次の新しい二発を装填しなければならないのだ。翔英が言っているのは、その時間のロスのことであった。加えて、散弾銃の射撃可能範囲は限られている。通常だと、撃ち手から４０メートルの地点で内外のプラス・マイナスで１０メートル程度だ。その範囲＝時間帯を逃したらもう次はない。つまり、チャンスはその一回きりなのだ。
「わかった。そのまま射撃の準備をして、待機していてくれ」
そう言うと、田代が空港の西側と西南側を担当する他の二名のＢＩ職員に声をかけた。

「ＢＩ－１。ＢＩ－２。大至急、ＢＩ－３のいるポイントへ向かってください」
「こちら、ＢＩ－１。お話のやり取りは聞いていましたので、今、車に乗り込んだところです。しかし、ここから３分以内に鈴木君の持ち場に着くのは無理だと思います！」
「ＢＩ－２は、どうですか？」
「同じく、向かっております。しかし、私の方からも時間以内には届かないと思います！」
二名のそれぞれの持ち場は、翔英のいる配置ポイントからは、それぞれ４～５キロは離れていた。車を猛スピードで飛ばしても、間に合わなかった。
「そうなると、間に合う位置にいるのは…」
そう呟くと、田代が再び翔英に訊ねた。
「翔英君、予備の散弾銃は手元にあるのか？」
「勿論、用意してあります」
ＢＩ班は、不測の事態を想定して、常に予備の銃をパトロール車に積んであった。
「本部長、どうやら僕が行くしかなさそうです」
田代からそう聞かされた時、宗方は、一瞬ハッとした。
混乱の中ですっかりそれを忘れていた彼は、今、目の前にいる男が日本を代表する散弾銃の名手であったことをやっと思い出した。
「そ、そうか。頼むぞ！」
近くに停めてあるＳＵＶ型の警察車両に飛び乗った田代を、宗方は戦場に部下を送り出す上官のような気持ちで見つめていた。
そして、この男を警察に引き入れてよかったと、改めて思った。

六．夢の実現

田代の運転するＳＵＶ車が、エンジンを唸らせて猛スピードで東へ向かう。
残り時間は、２分を切っていた。
「翔英君。今、そっちへ向かっている。着くのはギリギリだ。もう一挺の銃をすぐに撃てる状態にしておいてくれ！」
運転しながら、田代が頼んだ。
「了解。田代さんが来てくれるんですね？」
「そうだ、他の二人のＢＩが間に合いそうもないんでね」
「心強いです。百人力です！」
緊迫した状況を忘れたかのように、翔英が弾んだ声で返した。
実際、彼はそのことでかなり平常心を取り戻していた。
「安心するのは、まだ早いぞ。僕にはかなりのブランクがある。腕が鈍っていなければいいんだが…」
言いながら、田代はフロントガラス越しに、東の空を覗き込んだ。
ドローンの編隊は、すでにその形が判別できるまでに近づいて来ていた。４機のドローンは、見事に統率されて編隊を維持していた。そして、その距離は、もはや５００メートルを切っている。

滑走路わきの舗装帯を猛スピードで走り切った田代のＳＵＶ車の目前に、金網のフェンスが迫る。田代は頭を低くして、ためらわずにアクセルを更に強く踏み込んだ。大きな衝撃音と共に、突き破られた金網のパネルが後方に吹っ飛んだ。頭を戻した田代は、バックミラーでそれを確認しながら、この車が警察車両であることに感謝した。防弾仕様に強化されたフロントガラスは無傷だった。

そのＳＵＶ車は、細かく車体を上下にバウンドさせながら、滑走路の外の荒れた草地帯の上を進んだ。やがて、視界に翔英の姿が見えてきた。

大きく車体をバウンドさせたＳＵＶ車は、まるで体操の床運動の着地の時のようにその場に停車した。ほとんど同時に、田代が外に飛び出る。

「田代さん！」

銃を空に向かってかまえたままの姿勢で、翔英が出迎える。

田代が、その銃の先をたどる。上空から５０メートル、距離にして２００メートルのあたりに、４つの黒い軍団が迫っていた。明らかに、それらは下降を始めていた。

「僕の車のボンネットの上にあります！」

翔英に言われた方を見ると、パトロール車のボンネットの上に組み立てられた予備用の散弾銃と数発の弾が置かれていた。

「よし、翔英君。はじめよう！」

銃を手にした田代が、翔英の左隣に並んで立った。

ドローン群は、およそ１５０メートルの地点だ。

「君は、右側の２機を頼む。僕は、左側の２機を片付ける！」

「了解です。どのくらいの距離のタイミングで撃ちますか？」

ドローン群との距離は、残り１００メートルを切りかかっている。

「君の腕前なら、もう、いつでもいい。ここを、いつものＭＪの射撃台だと思って、自分の間合いで撃てばいい」

田代が、穏やかな笑顔で翔英に言った。

「わかりました」

それで、翔英は完全に平常心を取り戻していた。

「あなたと、こうして並んで射撃をするのがずっと夢でした」

「はは…、思わぬ状況で実現したわけだ。…さあ、翔英君。そろそろ集中の時間だ。あいつらを片付けてしまおう！」

「はい！」

翔英が笑顔で返した。

田代も、射撃の姿勢に入った。

正面から、高い鼻筋に沿って手で長髪を後ろへ掻き上げる。若い頃からのその仕草が、知らず彼の射撃に入る時のルーティーンになっていた。警察官になっても長髪を短くしなかったのはそのせいもあったのだろう。

そして田代は銃身の先を覗き込む。やがて、それは不動の形(かた)になる。

一方の翔英は、目を閉じて射撃のイメージを思い浮かべた。

三秒ほどだが、それで充分だった。目を開くと、一回肩で小さく息をする。そして、引き金を絞った。

七．遭遇

福島県いわき市。市民図書館―。

七十歳がらみのその男は、郷土資料コーナーの一角でいくつかの古い冊子を物色していた。男が選んだ冊子は、どれも背表紙が凧糸で縫われて装丁されているような古い物ばかりだ。

男はそれらを抱えるように持って、貸出受付のカウンターへ移動した。

「今回も、すまないね…」

「いいえ。いつものように、記帳だけはしていって下さいね」

顔見知りの受付嬢は、笑顔で言った。

それらは、本来は貸出しが禁止されている類の古い郷土史の資料だった。だが、男は内々でそれらの持ち出しを許可してもらっていた。以前、この町で刑事をしていたからだ。

簡単な記帳をすませると、男は館の外に出た。

自分の車に乗り込むや否や、タバコに火をつけた。館内では吸えなかったからだ。ふーっ、と深く煙を吐き出す。男は、老眼鏡をかけると、借りてきた郷土資料の冊子に軽く目を通した。それから、車を発進させた。

夕刻になっていた。市街を抜け、田畑の中を通る道路を走る。

そのうちに、田畑の切れ目に鬱蒼とした小山が現れる。道路の脇に、小さな鳥居が立っていた。鳥居の下の小さな参道は、そのまま一直線に小山の中へ向かっている。その先は山の勾配に沿って長い階段が続いていた。

男は、鳥居を通り過ぎた所で車を停めた。

参道から一台の車が出てきたからだ。その小型の車が、地元のものでないということだけはわかった。地元のナンバープレートの表記は、「いわき」と、ひらがなの三文字が使われている。だから、一般的な他の地域の漢字文字のものとの違いは遠目でも判別できるのだ。だが、バックミラー越しなので、さすがにどんな人間が運転しているのかまではわからなかった。その車は、男とは反対の方向へ走り去った。その先には、常磐自動車道のインターがある。

何故か、それが気にかかった男は、車を降りて参道へ向かった。

鳥居をくぐって奥へ進もうとすると、階段を下りてくる誰かが見えた。

かなり年配の女性のようだった。階段を、一段一段、ゆっくりと下りてくるその様でわかった。その老婆は、ずっと下を向いたままなので顔がわからない。

だが、階段を下りきって、こちらに向かって歩いて来るあたりから、男にはそれが誰だかがわかった。

「佐和江さん！」

男は、普段よりも大きな声で声をかけた。

だが、反応はない。うつむいたまま、真っすぐ男の方に近づいてくる。

「佐和江さんでしょ？」

更に、大きな声で訊く。

老婆は、すぐそばまで近づいてきている。だが、それでも反応はない。相変わらず、うつむいたままだ。何かを、ぶつぶつと呟いている。
「佐和江さん。僕ですよ。いわき南署の山崎ですよっ！」
山崎と名乗った男は、目の前まで近づいた老婆に必死に話しかけた。
腰をかがめて、顔を近づけて話しかけた。
だが、それでも老婆からは、何の反応も得られなかった。彼女は、相変わらずうつむき、何やらを呟きながらそのまま素通りして行った。
山崎と名乗った男は、呆然と老婆のその後ろ姿を見つめていた。

八．求人活動

東京、新橋界隈―。
新橋駅南口にほど近いビルの中に、宗方俊夫が行きつけのその和牛専門店があった。
彼は、祝い事があると好んでその店を利用していた。
今回の羽田の事件での活躍で、田代水丸と鈴木翔英は警視総監賞を授与された。その内輪の慰労会であった。
「宗方本部長、本当にごちそう様でした。こんなに美味しい高級和牛を食べたのは初めてです！」
翔英が、満面の笑みで宗方に礼を言った。
「ははは…、どういたしまして。羽田では、君の大活躍で我々警察も何とか面目を保つことができましたからね。これはそのお礼ですよ」
宗方は、感謝の気持ちを込めて返した。
「翔英君、君は本当に幸運だぞ。あの日、何も事件が起きなくて、僕と二人だけで行っていたら、こんなに高級な肉は食べられなかったわけだからね」
「確かに、そうでしたね。田代さんだと、アメリカンステーキどまりでしたからね。ははは…」
「ははは…、はっきりと言ってくれるね」
そう言って笑い合う田代も、心からくつろいでいた。
「でも、あれだけ緊迫した事件の割には、あっけない終わり方でしたね」
と、翔英が指摘したように、件のヒンドゥ国の大統領襲撃事件は、翌日にあっけなく幕を閉じていた。
ドローンを操縦していた男が羽田署に自首してきたのである。
操縦用のリモコンとノートパソコンを持参した男は、その場で威力業務妨害の疑いで逮捕されたのだった。田代達によって撃ち落とされ、回収された各ドローンには、プラスチック製の容器が積載されていた。中に入っていたのは、人体には影響のない程度の微量のセシウム反応がある福島の砂だった。
「そうでしたね。その男は、単純に反原発を訴える宣伝活動の為だけにやったようです。だから、ああやって、マスコミやネット上で大きく取り上げられれば、それで彼の目的は果たしたということです。背後にテロ組織などの存在はなく、単独犯のようです」

宗方は、二十歳そこそこの翔英に、敬意を表すように敬語で丁寧に説明した。
「確かに、宣伝効果ということを考えれば、今回の羽田は格好の場だったわけですね」
田代が嘆いた。
「うん。そういうことだ。それと、公式には発表されていない話なんだが、ヒンドゥ国は、近々日本と原発建設の契約を交わそうとしていたらしい」
「なるほど、それも今回が選ばれた理由だったのかもしれませんね…。より、メッセージ性が強くなりますからね」
「おそらく、そういうことだろう。今回は、運よく君達があの場に居てくれたおかげで事なきを得られたが、今後はこの一件を教訓にして、いろいろと警備の方法を見直して行かなければならないだろうね。誰もが手に入れられるドローンとノートパソコンを相手にしながら、我々警察側は手も足も出せなかったわけだからね…」
宗方はそれを思い出し、苦虫をつぶしたような顔で言った。
警備責任者の宗方にとって、今回の騒動は、今後の要人警備のあり方に大きな一石を投じられたことになったのだ。
「ドローンそのもの規制も視野に入れた対策を考える必要があるだろうな。今回の羽田の件は、今後のいい教訓になったよ」
「確かに、早急に考えた方がよいかと思います」
「うん。実は、すでに、その対策チームの立ち上げを指示してあるんだ」
「さすがですね。どういう陣容になるんですか？」
「チームは大きく二つの班に分けて検討させる。ひとつは、妨害電波のようなものによって対象のドローンを操縦不能にさせる方法を研究する班だ。もうひとつは、対ドローン用の撃退兵器の開発を担当する班だ。兵器開発の方には、ＭＪ社の三上さんにもアドバイザーとして参加していただこうと思っている」
そう言うと、宗方が翔英の顔を改めて見据えた。
「それにしても、翔英君。今回の君の活躍には、とても感謝していますよ」
「ははは…。そんなに、何度も褒めてくれなくても。それに、僕一人ではなく、田代さんだって…」
翔英が、照れくさそうに返した。
「ええ。勿論、その通りです。もし、羽田のあの場面に、田代君が居なければ、大変なことになっていたでしょう。しかし、田代君は別格です。それに、本業ですからね…。まだ若い素人の君が、あの凄まじい緊迫した場面で、あれほど冷静に対処できたことは驚きであり、称賛に値します。実に、得難い戦力です」
「ははは…。そこまで言っていただくと、本当に、照れくさいですよ」
「ははは…、そうですか。でも、決してオーバーではないのですよ…。ところで、確か、君は大学の三年生ですよね？」
「はい、そうです」
「就職の方は、もうどこかに決まっているのですか？」
「いいえ、まだどこにも決まっていませんが…」
「でしたら、是非うちの会社に来ませんか？」
宗方が、ニコッっと笑った。

九．理想の女性

東京、新宿・歌舞伎町―。

その日の村井和滋は、不快な思いをすることなく、目的の店の前までスムーズに歩いてこれた。

二年前に施行された新宿区の「客引き行為禁止条例」が、定着してきたおかげで、強引なキャッチ行為を受けることがなくこの界隈を歩けるようになったからだ。

村井は、通い慣れたそのビルの地下へ下りると「園（その）」という名の店へ入った。

そこは、歌舞伎町界隈を闊歩する若者達が、入るのに二の足を踏むような高級感のあるクラブだった。広い店内は、ほどほどの客で埋まっており、待機しているホステスもいなかった。

顔なじみの黒服に先導されて席に着くなり、村井は向かいのボックス席で接客しているそのホステスの容姿に釘付けになった。十年近い常連客である彼が、始めて見る女性だった。そして、まちがいなく、今までで一番魅力的な女性であった。

素晴らしい肢体の持ち主であることは服の上からも容易に想像できた。

だが、それをことさら強調しているわけでもなかった。品が感じられた。そして、何よりも肌が白かった。透き通るように白かった。それも、村井の好みだった。好みと言うよりは、それが女性を選ぶ時の絶対的な条件であった。

あまりにも長く見続けたせいだろうか、その彼女の方も村井の視線に気づいたようだった。こちらに向って、軽く会釈を返してくれた。少しはにかんだようなその笑顔がまた、たまらなく魅力的だった。

「ママ、あの娘(こ)は…？」

おしぼりを運んできたママに、さっそく訊く。

「まあ、村井さん。もう、目を付けたのね…。新しく入った娘よ。…こちらのボックスに呼びましょうか？」

「うん。是非、頼む！」

ママは、上客である村井の意を汲んで、すぐに、向かいの席へ黒服を向かわせた。

黒服に耳打ちをされた彼女は、村井の方を見て会釈すると、いったん化粧直しの為に店の奥に消えた。

ほどなくして、そのホステスが村井の元へやってきた。

「はじめまして、琴音と申します」

白く美しい顔に笑みをたたえて、彼女が挨拶をしてきた。

外見通り、その立ち振る舞いにも品が感じられた。村井は、いっぺんで彼女が気に入った。理想的な女性だった。

「きれいな肌ですね」

「うふふ…、ありがとうございます」

「真っ白だ。まるで…」

「まるで…。まるで、何ですか？」

「まるで、白い兎のようだ…」
「まあ、兎…。可愛らしいたとえで嬉しいわ。うふふ…」
酔うほどに、村井は知らず琴音にアタックし始めた。
「琴音さん。お互い独身同士なんだし、近いうちに、食事でもどうですか？」
これほど、女性に積極的になったのは初めてだった。
「まあ、初対面なのに、もう、そんなお誘いをしていただけるのですか？」
「ははは…、やっぱりだめかな。琴音さんは、垢抜けた都会のお嬢さんって感じだからな。とても、田舎者の年寄りの俺なんかでは相手不足かな…」
「いいえ、とんでもありません。その正反対ですよ。私は、若い男性は苦手ですから…。それに、私は埼玉出身ですよ」
「へぇー、埼玉ですか…」
「はい。生まれも育ちも埼玉の山奥です。都会育ちでなくて、がっかりさせてしまいましたか？」
「とんでもない。そんなことは、これっぽっちも…。かえって、ホッとしました」
「うふふ…。それを聞いて、安心しました…。では、お誘い、喜んでお受けしますわ。是非、ご一緒させてください」
琴音は、真っ白い絹のような手で自分のグラスを持つと、村井のグラスに軽く当てて笑顔を見せた。

十．トップ会談

江東区お台場。東京ゲートブリッジ付近―。
東京ゲートブリッジの南側埋め立て地は、大勢の報道関係者と警察関係者とでごった返していた。
警視庁による対ドローン用撃退兵器のマスコミ公開の日であった。
一年前の羽田空港でのドローン騒動を皮切りに、国内の各地でドローンにかかわるトラブルや事件が多発していた。そこで、警視庁とＭＪ社が手を結んで対ローン用の兵器を共同開発したのだ。
ドローン関連の事件は世間の注目度も高いことから、主だった新聞社、テレビ局はすべて参加していた。そして、そのお披露目会の司会進行をするのは、警視庁広報室室長の田代水丸であった。趣旨説明をする彼の周りには、おびただしい数のカメラとマイクが向けられていた。当初、田代はその役回りを固辞していた。だが、結局各方面から押し切られる形で渋々引き受けることになってしまった。
以前の羽田空港の騒動で、今や警視庁の田代水丸の名前と顔は、全国的にすっかり有名になっていた。万策が尽きかけた絶体絶命の中、ドローン機を見事に撃ち落とし、ヒンドゥ国の大統領を救ったヒーローとしてマスコミ中で話題になっていたのだ。
元クレー射撃のチャンピオンという華やかな経歴と、警察官のイメージとはおよそかけ離れた長髪でハンサムな容姿とが、その話題性に更に拍車をかけていた。
前半の説明会を滞りなく終えて、いよいよ公開実演の運びとなった。

対ドローン用の兵器は、二種類開発されていた。ひとつ目は、飛来するドローンを撃退・破壊する為に造られた散弾銃と専用の弾(たま)だった。その撃ち手に指名されたのは、鈴木翔英だった。このプロジェクトの最高責任者である宗方俊夫の鶴の一声だった。二十歳そこそこの若者ではあるが、周囲のプレッシャーに左右されない図太さと冷静さを持っているからであった。それは、羽田空港の騒動の時に実証済みであった。

はたして、翔英は見事にその期待に応えて見せた。

警察職員が空に飛ばした標的用のドローンは、翔英の放った特別弾によって、完璧に空中で破壊された。その瞬間、その場にいた百名を超す関係者から感嘆の声が上がったことは言うまでもない。

会場内が落ち着きを取り戻すと、田代が次のもうひとつの兵器の説明に入った。もうひとつは、飛来するドローンを捕獲する為の散弾銃と専用の弾(たま)だった。

再び、標的用のドローンが青空に放たれた。

もうひとつの銃を手にした翔英が狙いを定める。数秒後に、通常よりも銃身が太い散弾銃から弾が発射された。それは、飛行するドローンの手前で蜘蛛の巣のように広がって、ドローンを包み込んだ。がんじがらめにされたドローンは飛行を停止し、そのまま落下して行った。

あがった歓声は、前の時よりも大きかった。関係者の間で拍手が沸き起こり、公開実演会は、大成功のうちに終了した。鈴木翔英は、難なくその大役を全うした。

並び立つ警察本部長の宗方俊夫とＭＪ社社主の三上恵造が、満面の笑みをたたえながら固い握手を交わした。

「三上さん、ご苦労様でした。これで、ドローン対策も万全です」

「ありがとうございます。私もこれで、ひと安心です。肩の荷が下りましたよ」

「しかし、これだけ素晴らしい銃や弾を造っていただいても、それを操る撃ち手がいなければ宝の持ち腐れ、ということになってしまいます」

「確かに、おっしゃる通りですね。あの銃を操るには、それなりのレベルのスキルが必要になります」

「ええ…。ですから、三上さんには引き続き、ＳＷＡＴ隊をはじめとして、担当警察官への撃ち方の指導の方もお願いします」

「はい。その旨は、田代君からも聞いています。皆さんがあの銃を使いこなせるように、ご指導の方もやらせていただくつもりです」

「助かります…。ところで、その育成訓練には、どのくらいの期間がかかるでしょうか？」

「そうですね。なんだかんだで、ざっと、一年はかかると思いますよ」

「やはり、そうでしょうね…。そうなりますと、三上さんには、もうひとつお願いすることできてしまうのですが…」

「はい、何でしょうか…？」

三上は首をひねった。もうひとつの方の話は、田代から事前に聞いてはいなかったからだ。

「ドローンがらみの犯罪は、この先いつ起こるかもわかりません。それは、明日かもしれません…。犯罪者は、その一年間を待ってはくれないのです」

穏やかだった宗方の表情が、真剣な顔つきに変わっていた。

「ま、まあ…。確かに、そうですね…」
「ですから、今すぐにでも、あの銃を扱える人間を警察内に配置しておきたいのです」
「ごもっともですが…。それで、もうひとつのお願いとは…？」
「ズバリ言います。翔英君に、明日からでもうちにいただきたいのです」
「うちに、って…。警視庁に、ですか？」
「はい。当面は、臨時職員としてお借りしたいのです」
「翔英君を…」
そう、絶句してから、
「ははは…。なるほど、そう来ましたか…」
思わず、三上は笑ってしまった。
「宗方さん、お忘れではないでしょうね。あなたは、以前もそうやって私から田代君を奪っていってしまったのですよ。ＭＪ社にとっては、どれだけの損失だったか…」
「ははは…、三上さん。奪ったなんて、人聞きが悪い…」
「それなのに、今度は翔英君までですか？」
「もう、いじめないでください。これは、あくまでも市民の平和と安全の為に考え抜いたことなのです」
詭弁じみた表現を使った宗方は、ばつが悪そうに笑った。
「ははは…。では、これくらいにしておいてあげましょう」
宗方が私利私欲で申し入れているのでないことは、長い付合いの中でその人柄をよく知る三上にもわかっていた。
「宗方さん。前回の田代君の時にも、同じことを申し上げたと思いますが、最終的には、翔英君本人の気持ち次第ですよ。彼が、ＭＪを出て警視庁に行きたいと思えば、それで済むことです。問題は、その一点だけですよ。私には、それにとやかく言う権利はありませんから」
「そうですか、ありがとうございます。それを聞いて、安心しました。どうやら、彼は内心、田代君の元で働きたいと思っているようなんです。しかし、あなたへの恩義があることから、どうしてもそのことを切り出せないでいるようなんです。彼にとって、あなたは父親のようなものですから」
「そうだったんですか。それならば、なおさら議論の余地がありませんね。これで、問題は解決です…」
三上は、嬉しさと寂しさとが入り混じった複雑な顔つきでそう答えた。
そんなトップ会談が行われているとは露も知らず、当の鈴木翔英と田代水丸の二人は、少し離れたところで大勢の報道陣に囲まれてインタビューを受け続けていた。

十一．深夜の狩猟

世田谷区、中町。深夜―。
その区立小学校の裏手は、寝静まった住宅街だった。
バックパックを背負ったその男は、辺りに人影がないのを確認すると、軍手をはめた。

内側に滑り止め用のゴムの加工がされたものだ。それから、パーカーの頭巾をかぶった。
もう一度辺りを確認してから、裏門の鉄柵に両手をかけ、足をかける。
ジャンプ一番、軽々と乗り越えたその男は、校舎には向かわず、そのまま校庭の隅にある飼育小屋へ向かった。
飼育小屋は、ふたつあった。ひとつはニワトリが飼われ、もうひとつは兎だった。
男は、兎小屋の前に立った。中には、兎が二羽いた。
男は、小さな南京錠がかかった扉の鍵の部分をバックパックの中から取り出したハンマーでたたき壊した。
小屋の中に入ると、慣れた手つきで兎をつかんだ。真っ白い兎だ。そして、その兎の頭を持ち上げると、まるでぞうきんを絞るかのように躊躇なく首をひねった。男には、何のためらいもなかった。コキッと、喉の関節が破壊される音がした。それで、すべてが終わった。
兎は、両足をダランとさせた。中身の詰め物のないぬいぐるみのようになった。
間を入れずに、もう一羽に対しても同じ行為を行った。
男は、手際よくそれらを持ってきた真新しい大型のゴミ袋に入れてグルグルと巻いて包むと、バックパックに入れた。それから、裏門を乗り越えて、もと来た道を何事もなかったように歩き去った。
男は通常の倍以上の時間をかけて、遠回りをして自分のアパートへ戻った。辺りは店舗のない住宅街ではあるが、防犯カメラや目撃者を意識して念の為にそうしていた。
部屋に入った男は、見るからに楽しそうだった。
鼻歌交じりで台所へ行くと、まな板を準備した。
そして、バックパックから、例のグルグル巻きのゴミ袋の包みを取り出す。まだ体温がある兎を取り出して、まな板の上に乗せる。
「ククッ…」
男は、噛み殺したように笑いながら、しばらくそれを眺めていた。
それから、奥の部屋へ行くと、着ていた服を脱いで上半身裸になった。贅肉のない、鍛えられた上半身だった。その姿のまま台所に戻った男は、包丁を手にした。調理の時の持ち方とは違う。包丁の刃は下向きになっている。下に向かって刺す時の持ち方だ。
男は片方の手で兎の頭を押さえつけると、躊躇なく包丁を振り下ろした。兎の喉元にグサッと差し込み、そのまま腹を裂いていく。切れ目が肛門まで達すると、男は包丁を置いて、両手で裂け目を力いっぱい大きく開いた。中に詰まっていた臓物がツルんと滑って、隣のシンクに流れ落ちた。
「ヒャッ。ヒャ、ヒャ、ヒャッ！」
それを見た男が、堰を切ったように笑った。
薄気味悪い声で、笑い続けた。
やがて、男は血まみれの手で引き出しを開けた。楽しそうに鼻歌を復活させる。
中からハサミを取り出した。焼き肉を切る時に使うような大型のハサミだった。男の軽快な鼻歌は、知らず、はっきりとした歌になっていた。
メロディはない。歌詞だけだ。
チョッキン、チョッキンナ…、

男は、そう繰り返し口ずさんでいた。
口ずさみながら、手にしたその大型のハサミをチョキン、チョキンと何度も開閉させていた。

十二. 送られてきたもの

世田谷区、祖師谷界隈―。
仕事から帰宅した村井和滋は、今夜も愛妻の熱い接吻で出迎えてもらった。
子供もおらず、夫婦二人だけしかいないこの家の中では、誰にもはばかる必要はなかった。
満足げに食卓に腰かけた村井は、用意してある肴の小鉢に箸をつけた。
「あなた…。今夜は、上にしますか、下にしますか…？」
傍らで、ビールをグラスに注ぎながら、妻の琴音が夫婦の秘密の合言葉を使って、それとなく訊いた。
「そうだな…。今夜は、少々疲れ気味だから、上に行ってなさい」
「はい。では、お先に…」
用事を済ませると、琴音は二階へあがっていった。
村井は、幸せそうにグラスのビールを呷った。結婚して良かったと、つくづく思うひと時だった。
ふと、卓の上に置いてある小包が目に入った。
まだ開封していない冷凍宅配便の包みだった。貼ってあるシールの宛名を見ると、自分宛のものだった。
「いわき市水産物協会…？」
その送り主の名前に覚えはなかった。
だが、いわき市であれば、妻宛ではなく、まちがいなく自分宛のものだろう。
内容の項目の欄には、「蟹」と記されていた。
袋から取り出すと、透明の粘着テープでしっかりと固定された小型の発砲スチロールの箱が入っていた。蓋を開けると、中には厚いビニールにパックされた何かの白いものが入っている。手にしてみると、意外と柔らかかった。どう見ても、蟹ではなかった。何かの生き物のようだった。ふさふさとした毛でおおわれているからだ。そして、その端部には、何かで切り落とされたような血に染まった肉の断面が見えていた。
「わあああっ！」
村井が思わず、上ずったような叫び声をあげた。
普通の人なら、それが何であるかがわかるのにもっと時間がかかるだろう。だが、村井にはひと目でそれが何であるかがわかった。
耳だった。切り取られた兎の耳だった。
村井は、二階にいる琴音を呼ぼうとした。だが、思い直した。思い直して、考え始めた。
自分に送られてきた「これ」が、何を意味しているのかを考える必要があった。自分の第六感は、そうするべきだと言っていた。

しばらく、切り取られた兎の耳をじっと見ていた。落ち着きを取り戻すと、携帯を取り出して、送り主の欄に記されている電話番号にかけてみた。０２４６から始まる市外局番は、確かに自分の故郷である福島県いわき市のものに違いなかった。しかし、何度かけなおしても、使われていない旨の電話会社の録音テープしか流れてこなかった。今度は、携帯のネットで、その水産物協会を検索してみた。だが、そういう名称の協会は存在しなかった。

村井は考え込んだ。考え込んでいくうちに、ハッとして目を見開いた。

「ま、まさか…！」

そう呟いてから、ブルブルと震えだした。

震える手でグラスを掴んで、残りのビールを一気に飲み干した。それから、どこかへ電話をかけた。今度は、相手が出なかった。

二、三分してから、その相手から電話が入った。

「お、俺だ…。ああ…、勿論、そのことは…わかっている。だが…、どうしてもおまえに確認したいことができたんだ…」

村井の震えは、その後も治まらなかった。

十三．祝杯

千葉県市原市。京葉射撃場―。

決勝戦は、今回も接戦だった。

そして、今回も決勝の相手は同じ二人の若者だった。

最後の射撃に入った鈴木翔英は、静かに目を閉じた。

試合の勝ち負けがかかったこの日最も重圧がかかるショットだった。だが、今の彼には気負いもプレッシャーもなかった。翔英は、一瞬の暗闇の静寂の中で、自分の射撃のイメージを思い浮かべた。三秒ほどだが、それで充分だった。目を開くと、一回肩で小さく息をする。そして、放たれたクレーに向かって引き金を絞った。

前方左斜め４５度方向の空に向かって打ち出されたクレーは、翔英が放った散弾によって綺麗に粉砕され、空中に広がった。さながら、それは彼の優勝を祝福する花火のごとく美しく見えた。

静寂を保っていた観客席が、堰を切ったように湧いた。

「おめでとう、鈴木君。素晴らしい集中力だったよ」

「ありがとう、緒方君。君も素晴らしかったよ」

戦いを終えた二人の若者は、固い握手を交わして互いの健闘を称えあった。

それは、決して、儀礼的なものではなかった。二人共、相手がいるからこそ、自分がいるということを充分に理解しているからだ。二人は、文字通りの好敵手の関係だった。切磋琢磨の間柄であった。この二年余り、国内の主だった試合の決勝戦は、常にこの若い二人で競われていた。二人は、共に母子家庭で育っていたという境遇であることも手伝って、心を許しあう友人関係になっていた。

表彰台に上がった翔英の上着の胸と背中の部分には「警視庁」という文字が刺繍されて

いた。彼は、警視庁所属のクレー射撃の選手であった。平日は本庁の広報室で働きながら射撃の練習をし、週末は今回の様に試合に出場していた。
表彰の式次第が終わるや否や、翔英は一目散に関係者席に座っているその男の元へ向かった。
「田代室長！」
翔英は、この日一番の笑顔でその男に挨拶をした。
「ご苦労さん。よくやった、翔英君！」
警視庁広報室室長の田代水丸が笑顔で迎えた。
この大会の元優勝経験者である田代にとって、同じ職場の自分の可愛い部下の優勝は二重の喜びであった。
「翔英君、宗方本部長からの伝言だ。明日の夜、新橋で待っている、とのことだ」
新橋とは、三人が使う隠語で、新橋にある和牛専門店のことだった。
公務員である警察官は、こういった大会の賞金を個人が受け取ることはできない。そこで、宗方は、翔英が大きな競技大会で優勝した時には、新橋の店で高級和牛をごちそうしてねぎらうのが常だったのだ。それは、翔英のリクエストでもあった。
「了解です！」
翔英が、また満面の笑みで敬礼をして返した。
田代は学生の頃、その並外れた才能に惚れ込んだ宗方に引っ張られて入庁したという経緯があった。そして、翔英は、クレー射撃界のヒーローだった憧れの田代のそばで働きたいという理由で入庁してきていた。
「鈴木君、おめでとう」
観客席からやって来た一人の女性が、翔英に声をかけてきた。
同じ広報室の同僚の五十嵐麻美だった。
「ありがとうございます。来てくれていたんですね」
「お二人は、これから祝杯でしょ？　だから、田代室長から帰りの運転手を頼まれたのよ。ここは、交通の便が悪いですからね」
「ははは…、それは、わざわざすみません。でも、僕が優勝できなかったら、無駄になっていましたね」
「ほほほ…、どうせ、勝てなくても、やっぱりお二人は、残念会という名目で飲むんでしょ？」
「確かに、そうなっていたと思います」
麻美にそれを言い当てられ、田代と翔英が顔を見合わせて笑い合った。二人は、実の兄弟のように仲が良かった。
「それに、田代室長は、今日の大会は接戦になったとしても、最後は必ずあなたが優勝すると言っていたのよ」
「そうなんですか。まあ、室長のそういう嗅覚は、必ず当たりますからね」
「そうかもしれないな。ははは…」
田代は、それを否定しなかった。
父親方の田代家は、代々鉄砲鍛冶を生業としてきた。母親方の血筋は、神事を司る巫女や霊媒師であった。

そういう血統の田代水丸には、若い時から特別な力が備わっていた。銃を使った犯罪に対して、常人にはない卓越した分析力を持っているのだ。人々は、それを「犯罪嗅覚」と称していた。そして、田代がまだ大学生だった頃、その能力がいかんなく発揮された事案を目の当たりにした警視庁の宗方は、彼を警察の道へスカウトしたのだった。
しばらくして、三人を乗せた車は市原市を出ると、都内のレストランへ向かった。

十四．広域技能指導者

一週間後、桜田門。警視庁、広報室―。
午前九時を過ぎた頃、室長室にいる田代水丸の元へ一本の外線が入った。
電話の相手は、成城署の刑事部長、石塚であった。
「石塚さん、お久しぶりです…」
石塚とは、彼が神奈川県警時代からの旧知の間柄であった。
「…ほう…。…そういうことなら、行かなくてはなりませんね。お力になれるかどうかは別にして、とにかく拝見します。はい…。何とかできます。これから、すぐに伺います」
石塚から聞いたその住所をタブレット端末にメモると、田代は、卓上のパソコンの予定表を書き換えた。
「五十嵐君、予定を変えて成城署へ行くことになった。車の鍵を頼む」
「石塚警部殿のところですね？」
「うん、そうだ。緊急の用向きらしい」
「わかりました、行ってらっしゃい！」
田代は彼女から車の鍵を受け取るなり、あわただしく部屋をあとにした。
世田谷区祖師谷の大きな公園沿いに目指す住居はあった。
コンクリートを存分に使った立派な建築物であった。そこはすでに、たくさんの警察車両と立ち入り禁止の黄色いテープとで、周囲からは完全に隔離されていた。
玄関先で、石塚茂文が待っていてくれた。
「石塚さん！」
「田代室長。さっそくご足労いただいて、ありがとうございます！」
石塚が嬉しそうに出迎えた。
スポーツ刈りの頭に頑丈そうな体躯は、いかにも典型的な強面の刑事然としている。それに対して、長髪でスマートな出で立ちの田代は、とても警察関係の人間には見えない。外見上は、見事に対照的な二人ではあるが、過去の難事件の捜査を通して固い友情で結ばれていた。当時の石塚は、神奈川県警の所属であったが、今は世田谷の成城署の勤務になっていた。
本来、どんなに仲がいいとは言っても、本庁の広報を業務とする田代が、所管の事案に参加するということはできない。通常では許されないことであった。だが、今回のこの件に限っては、例外的に田代が参加できる事案だった。死亡理由が、散弾銃によるものだからである。
田代は、警視庁指定の「広域技能指導者」であった。

広域技能指導者は、主に鑑識関係に多くいる。特にその分野で突出した技能を持つ者においては、活動範囲を広くさせて多くの事案で活躍できるようにしているのだ。彼は、銃部門でのそれであった。

田代は、大学を卒業してすぐに警視庁に就職すると、クレー射撃の選手として活躍し、最終的には二年連続して日本チャンピオンになった。その実績を買われて、広報室へ引き抜かれた。その後、たまたま散弾銃のエキスパートということで、散弾銃がらみの難解な事案の意見を求められ、結果的にそれを見事に解決して見せた。それがきっかけで、散弾銃における犯罪の「捜査マニュアル」を監修することになった。それは、全国の警察に配布され、使用されることになった。年齢よりもずっと早く今の室長の地位に特進できたのは、そういった功績のおかげであった。

以来、散弾銃に関する事案については、出先や他県からの応援要請であっても、管轄を超えて引き受けることができるようになったのだ。

「石塚さんの頼みとあらば、来ないわけにはいきませんよ」

「ははは…、光栄です。しかし…」

言いかけて、いったん石塚は言葉を詰まらせた。

「どうかされましたか？」

「…実は、少々やっかいな事案になるかもしれません」

石塚の笑みが少し引きつっていた。

「やっかいというと？」

「まあ、ここでとやかく説明するよりも、現場を見ていただければひと目でわかります。さあ、どうぞ」

十五．地下室

石塚が案内したのは、建物の地下に造られた部屋だった。

階段を降りきると、扉があった。

普通の扉ではなかった。録音スタジオにあるのと同じような分厚くて頑丈な鋼鉄の扉だった。ドアのノブも一般的な丸い握りのものではなく、がっしりとしたレバー式だった。それを開けて内部を見渡して、その扉の理由がわかった。二十畳以上はある部屋の内部はコンクリートに覆われ、全面に防音用の壁材が隙間なく貼られていた。つまり、完全防音の部屋だったのだ。

向う正面には大小のさまざまなスピーカーが置かれ、中央には各種のアンプや再生装置類が鎮座していた。部屋の構造にそれだけの処置を施すのにふさわしい高級なオーディオの機器がそろっていた。真空管のパワーアンプは、最高級のザイカ社製のものだ。左側面には大きな木製の飾り棚が据えてあった。上部は観音開きのガラス製で、その中には二挺の散弾銃が立てかけてあった。

そして、部屋の中心部に置かれたこれもひと目で高級品とわかる革張りのリクライニング・シートにその持ち主が座っていた。

正確に表現すると、まだ座らされたままだった。

石塚の指示で、田代が到着するまでの間、動かされずに発見されたままの状態にされていたのだ。三人の鑑識員が、そこ以外の場所で作業を続けていた。
「やっかいとは、これのことですね？」
その死体の状況を見た田代が、開口一番、そう訊いた。
「ええ、これのことです…」
石塚が、ゆっくりと頷いた。
その死体は、散弾銃を抱えたままリクライニング・シートの上で絶命していた。
そして、その死体には両耳がなかった。
もともと耳がなかったわけではない。両方の耳があった部分からは、大量の出血痕があるからだ。死体の足元に大型のハサミが落ちていた。焼き肉を切る時に使うような頑丈な調理用のハサミだ。刃の部分には、血がべっとりとついている。おそらく、それで切り落とされたのだ。
しかし、肝心の切られた耳は付近に見当たらなかった。
「切られた耳は、どこにあるんですか？」
「それが…、どこにも見当たらないんです…」
そう答える石塚の表情が、強張っていた。
「何ですって？」
それには、さすがに田代も耳を疑った。
「この部屋の中はもとより、この家中を探してもどこにも見当たらないのです」
「でも、この耳の辺りの血痕の状況からすると、切ってからさほど時間は経過していませんよね？」
「ええ、そうなんです。このお宅はペットも飼っていませんから、犬が咥えて行ったということもありませんし…。まして、この部屋は、窓ひとつない、それこそ絵にかいたような完全な密室ですから…。勿論、この部屋に入る前に切ったという可能性もあるにはありますから、とりあえず、今、庭などの家の周囲を確認させています。場合によっては、隣の公園にまで手を広げなければなりません。それでも、見つからないとなると…」
苦悩の表情を浮かべて、石塚が続けた。
「…本人自身がこの部屋の外で切ったのではなく、誰かに切られたという可能性がより強くなってしまいます。つまり、切られた耳は、その誰かが持ち帰ったということです。そうなれば、一転してこれは自殺ではなく、他殺という線が濃厚になってしまいます。実にやっかいな、猟奇殺人の類になってしまうのです」
説明し終わった石塚の表情は、完全に苦虫をつぶしたようになってしまっていた。
「確かに、やっかいだ…」
田代も、そう返すのがやっとだった。
「とにかく、今、わかっていることだけでも説明しておきます」
石塚は気を取り直して、後ろに控えている部下に声をかけた。
「加藤…。田代室長に概要の説明を頼む」
そう指示されて、若い刑事が緊張と嬉しさがない混ぜになった表情で一歩前に出た。
くっきりとした眉の座った三十前くらいの歳の男だ。
「はじめまして、田代室長殿。成城署の加藤です。お目にかかれて、大変光栄です！」

加藤から大変光栄と言われた意味を、田代も自分なりに承知していた。
羽田空港のドローン騒動以来、マスコミに頻繁に引っ張り出され、警視庁の田代水丸の名前と顔は、すっかり有名人として定着していたからだ。
「はじめまして、よろしくお願いします」
加藤幸博が、手帳を開いて説明を始めた。
「亡くなったこの方は、村井和滋さんといいます。年齢は五十八歳。都内で工務店を経営されている方です」
「工務店の社長さんですか。それで、こんなに本格的なリスニングルームを…」
「ええ。そのようです。ご自分で建てられた住宅だということです。住宅に詳しいうちの鑑識員の話ですと、一般の住宅ではめったに見られないようなコンクリートを贅沢に使った造りだそうです」
「なるほど。ここでなら、どんな大音量でも気兼ねなく聴くことができるでしょうね」
「まったくです。そして、皮肉なことに、それは散弾銃の大きな発射音すら遮断していたというわけです」
加藤が、苦笑いをしながら説明を続けた。
「死亡推定時間ですが、鑑識の見立てによると、六時間前から八時間前のあたりだそうです。あとでご紹介しますが、発見者である村井氏の奥さんの話によると、昨夜の夕食の後からこの部屋に籠ったきりだったそうです。そして、朝食の為に呼びに来た時には、この状態だったそうです。つまり、昨夜の七時から、今朝の七時の間ということになります」
リクライニング・シートの上で散弾銃を抱えた村井和滋は、大きく口を開けたまま絶命していた。
口腔部から後頭部にかけて発砲による穴が開いている。リクライニング・シートを中心にして、スピーカーなどが並ぶ部屋の前方半分は綺麗なままだ。しかし、入り口側である後方半分は、打ち出された散弾によって飛散した血痕や肉片が所々にこびり付いていた。よく見ると、壁や扉には散弾が当たってできた小さな粒状のへこみが見て取れる。
「完璧なこの部屋の防音効果で、上階にいた奥さんには発射時の音が聞こえなかったというわけですね…」
「ええ、そのようです」
そう加藤が答えた時には、田代はすでに死亡した村井の頭部の観察に入っていた。
持ってきたカバンの中から取り出したペンライトで、村井の口の中を照らしながら内部を探りはじめている。それが終わると、今度は綿棒を取り出して、顔の下の辺りを何か所か擦って採取した。
死体の状況を念入りに見終わると、今度はリクライニング・シートから距離を置いて、色々な角度からシートや壁を眺め始めた。
それから、入口側の壁面を観察し始めた。カバンの中からアイスピックのような器具を取り出すと、防音壁の小さな粒状のへこみをほじくり始めた。壁にめり込んだ散弾の粒を取り出す為だ。そうやって、六粒の散弾が、証拠保全用の二つの小さなビニール袋に半分ずつ分けて入れられ、ジッパーが閉じられた。
田代は真剣な面持ちで、じっとそのビニール袋に見入った。
その様子を見ていた加藤は、湧き上がる緊張感を禁じ得なかった。

「田代室長。やはり、今回のこのケースは…?」
そう訊きかけた時、石塚に止められた。
石塚は左の手の平で加藤を制止させながら、右手の人差し指を立てて自分の口に当てて見せた。そして、無言でゆっくりと顔を横に振った。厳しい表情だった。それで、加藤は言葉を呑み込んだ。
石塚にはわかっていた。まだ、それを訊くべきタイミングではないということを。
石塚は以前、今の田代のその表情や雰囲気を身を持って経験したことがあった。
それは、始めて田代と出会った大磯の事件現場でのことだった。誰もが、自殺であると考えていた死体を検分していた時のことだ。検分を終えた田代は、その場でそれが自殺ではなく他殺であると言いきったのだ。その時の表情や雰囲気と同じだった。
その姿こそ、いわゆる「嗅覚の怪物」であった。
その状態になってしまった時の田代水丸は、別人のような独特のオーラをまとう。百戦錬磨の石塚でさえ体をこわばらせてしまうほどの、えも言われぬ緊張感を辺りに漂わせるのだ。何人たりとも、今の彼に立ち入ってはいけないのだ。
田代は、黙々と作業を続けた。入口側の壁から離れると、今度は、左側面にある大きな木製の飾り棚の中を調べ始める。
まずは、上段の両開きのガラスの扉を開けて、中に立て掛けられた二挺の散弾銃を確認する。写真を撮ってから、棚の下の引き出しを順番に開ける。一段目の左側の引き出しには、ナイフが並べられていた。全部で、大小合わせて五本ある。おそらく、狩猟用のハンティング・ナイフだろう。すでに、五本とも鑑識が指紋や血液反応を調べ終えた跡が残っている。
右側の引き出しには、書類関係が入れられていた。すべて、銃の所持に関するものばかりだ。一通りそれらの書類に目を通してから、田代はその中から薄くて細長い濃紺色の手帳のようなものを取り出した。寸法的にはちょうどパスポートに近かった。表には金文字で「猟銃等銃器所持許可証」と印字されている。いわゆる銃の所持の為の免許証である。
開くと、最初のページには本人を示す個人情報と顔写真があり、その下には警視庁公安委員会の大きな四角い朱印が押してある。次のページには、登録された三挺の散弾式銃の仕様や寸法の詳細が書かれている。
田代はそのページを開いたまま、再び、木製の棚の上段に保管された二挺の銃を確認した。免許証に記載された二挺との照合を確認する作業であった。記載されたものと実際のものとの照合性が確認できると、最後に、村井が抱えたままの一挺の銃の照合作業を行う。この作業によって、三挺とも警察に届けてある村井本人の銃であることが確認された。
田代は、その次のページをめくって見る。
そこからは、購入した実包＝弾(たま)の記録を記載する欄が続く。
日本では、弾を売る側も買う側も免許が必要である。そして、買う場合は、必ず、いつ、誰から、どれだけ買ったかをこの欄に記載する規則になっている。この制度は絶対的な義務であり、それがきちんと記載されると、最後に弾を売った販売店がその欄に確認の証しとして店のゴム印を押すのだ。村井の免許証にはどれにも同じ販売店のゴム印が押されてあった。
「島田さんの所か…」

それを読んだ田代が、そう呟いた。
「石塚さん。この免許証は、コピーをとるまで私が預かりますが…」
「どうぞ、そうして下さい」
最初からずっと離れずに田代の後ろについていた石塚が、快諾した。
田代は、その免許証を自分のカバンに入れると、飾り棚の検分に戻った。
残った下の段の大きな引き出しの中には、紙製の箱に詰められた散弾銃の弾(たま)が入っていた。８センチ×１５センチ程の大きさのそれらの箱の中身をすべて開けてみる。田代は、その作業に時間をかけた。きれいに並んで詰め込まれている弾の一つ一つを入念に確認する。それから、写真を撮る。
その作業が終わると、田代は再びリクライニング・シートのそばへ戻った。
「石塚さん、この銃をいったん動かしますが、よろしいですか？」
「はい、どうぞ。写真の方は充分に撮ってありますから」
田代が、硬直した村井和滋の手から散弾銃を引き離した。
その銃を持った田代は、そのまま部屋の入口側に置いてある一人用の椅子へ移動した。椅子に座ると、散弾銃の中央上部にある小さなレバーを動かした。そうすると、銃は中心部分からへの字のように折れ曲がり、機関部の内部が解放された。中には、弾が一発入ったままだった。「役目」を終えた空の薬きょうだ。田代は、それを銃の中から取り出した。銃本体は椅子の脇の小机の上に置いた。
田代は、その弾(たま)の薬きょうを凝視した。
手袋をした親指と人差し指だけで、直径２センチ、長さ８センチほどの円筒形をした薬きょうの端をつまむようにして、じっと、見つめる。
「加藤さん。お使い立てして済みませんが、そこにある僕のカバンの中から虫眼鏡を持って来てください」
頼みながらも、その目は薬きょうから離れない。
「どうぞ…」
加藤から手渡された虫眼鏡で、さらにその作業は続く。田代は、薬きょうの周りに印刷してある細かい文字が読みたかったのだ。回しながら読み終わると、それを左手で持ったまま、右手に小型のデジタルカメラを持って何枚か写真を撮った。撮り終ると、その薬きょうを別のビニール袋へ入れた。
「石塚さん。急いで、鑑識員さん達を呼んでください。全員です」
「わかりました…。加藤、鑑識の皆をここに呼んで来てくれ」
「はい！」
すぐに、加藤に連れられて三人の鑑識員がやってきた。
「ご苦労様です。この散弾銃の指紋の採取はされましたね？」
「はい、済ませました」
そのうちのチーフが答えた。
「では、中に入っている弾(たま)の方はされましたか？」
「弾(たま)…というと、空の薬きょうのことですか？」
「そうです。これです」
田代が、薬きょうを入れたビニール袋を差し出して見せた。

「いえ、それはやっていません。まだ、銃の中に入ったままでしたから…」
チーフが、恐縮するように答えた。彼らもすぐに、田代が発するえも言われぬ緊張感を感じ取っていた。
「では、今から急いで採取してください。大至急です。それを最優先でお願いします。さほどお手間は取らせないと思いますから、結果が分かり次第、すぐに教えてください」
「わ、わかりました！」
ビニール袋を受け取ると、三人は足早に作業用の机の方へ移動した。
「田代室長。何故、あの空の薬きょうの照合確認を急がれるのですか？」
それが気になって仕方がない石塚は、思わずそう訊ねてしまった。
「それは、すぐにわかりますよ」
「すぐに、とは言いましても…。ベテランの鑑識員でも、指紋の照合にはそこそこの時間がかかってしまいますが…？」
「大丈夫ですよ。作業はすぐに終わりますよ」
田代は、あたりまえのようにそう言うと、大きな木製の飾り棚の方へ移動した。もう一度、引き出しの中の箱詰めの散弾銃の弾(たま)を見始めた。デジカメの裏のモニター液晶画面を見ながら、入念に確認する。
「そういえば、鑑識員達が、その棚の鍵を借りるのには相当苦労させられましたよ」
それを一緒に見ていた石塚が、思い出したように言った。
「えっ、何故ですか？」
「それまで協力的だった奥さんが、その飾り棚の鍵を渡す段になって、急に出し渋ったのです。説得を重ねて、やっと貸していただきました」
「ほう、何でだろう？」
「おそらく、その理由はこれだと思います。ちょっと、失礼しますよ」
そう言って、石塚が田代に代わって引き出しの前に立った。
彼は、引き出しの内側の上についているボタンのようなものを押した。すると、飾り棚の中でカチャという何かの金属音がして、側面の後ろの部分の全体が、横にスライドして頭を出した。
「二重構造になっていたんだ…」
「ええ、いわゆる「隠し棚」ってやつです」
説明した石塚が、幅二十センチほどのそれを横に引き出してみると、大きなラックが姿を現した。そこには、様々な「用具」が掛けられていた。
「石塚さん、これは…！」
「ええ。村井氏にとってここは、音楽鑑賞に留まらず、色々な「趣味」を楽しむ部屋だったようですね」
ラックには、様々な革製の拘束具やロープ、手錠や鞭などがぎっしりと掛けられていた。いわゆる、ＳＭプレイに使う用具類だ。
「この手の趣味を楽しむ方が世間には大勢いるとは聞いていましたが、実際にこうして見るのは初めてです」
独り言のように呟きながら田代は、そのひとつひとつを物珍しそうに眺めた。
「それにしても、石塚さん。よく、この存在に気づかれましたね」

「ははは…、あれですよ」
そう言って、石塚が天井の一点を指差した。そこには、ひし形に配置された五つの頑丈そうなフックが取り付けられていた。
「そこにあるチェーンやロープをひっかけて吊るす為のフックですよ」
「ほう…」
田代が、思わず感嘆の声をあげた。
「始めは、映像を映すスクリーンか何かを吊るす為のフックかと思いましたが、それにしては数が多すぎる。しかも、スクリーン用にしては、位置がおかしいですからね。そこへ、奥さんが棚の鍵を急に出し渋ったとの話を聞いて、ピンときたんです…。考えてみれば、村井氏の本業は工務店ですからね。こういった建具の改造はお手の物でしょうからね」
「なるほど。さすがですね、石塚さん」
田代は、感心した。
自分では、おそらくその存在に気づかなかっただろう。多くの現場で場数を踏んできた石塚だからこその見抜く力であった。
「ひょっとして、石塚さんにもこういう趣味がおありなんでは？」
田代が、笑顔に戻っていた。
「えっ？」
「それだから、簡単にこれの存在に気付かれたんではありませんか？」
まちがいなく、からかい半分に訊いていた。
「ま、またまた、ご冗談を。私には、こういうのは…」
「ははは…、念のために伺っただけですよ。勿論、こういう趣味がおありなら、それはそれでかまいませんがね」
「いやいや、本当にありませんよ。まったく、室長も、お人が悪い。ははは…」
石塚は、心底困ったように、スポーツ刈りの頭を何度も掻いて見せた。
そして、長く続いていた緊張感からも、やっと解放された。田代水丸は、「嗅覚の怪物」から、普段の優しい紳士に戻っていた。
「田代室長。そろそろ、奥さんに話を聞かれますか？」
石塚が、安心して訊いた。
「ええ。是非、お願いします。でも、その前に確認しておきたいことがあるので、その後にしましょう」
そこへ、さっきの鑑識員達が戻ってきた。
「あれっ、もう、済んだんですか？」
石塚が、驚いたように訊いた。
「まあ、済んだと言えば、済んだということになりますが…」
鑑識員のチーフが、中途半端な答え方で返してきた。
困ったような顔つきだった。
「よくわかりませんね。どういうことですか？」
石塚が、問いただそうとすると、
「指紋の採取ができなかったんですよね？」
田代が、続けて訊いた。

「は、はい…。まったく、出ませんでした…」
チーフが、申し訳けなさそうに返した。
「それでいいんです。それを確認したかったのです」
田代は、今度は笑顔だった。
「ご苦労様でした。もう、結構ですよ。前の作業に戻って下さい」
田代は、鑑識員達を帰した。
「それで、よろしいんですか…。さきほどは、かなりその弾(たま)のことに固執されていたようですが…？」
「はい、充分です。指紋がないこと、そのこと自体を確認したかったんですから」
「つまり…、室長は、最初から指紋がないだろうと思われていたんですね？」
「はい、そういうことです」
「そうかぁ。だから、室長は彼らの作業はすぐに終わるとおっしゃったわけですか…。指紋が出なければ、時間がかかる照合作業はしなくていいわけですから…」
「ははは…。まあ、そういうことです。…ところで、石塚さんにも、ひとつ頼み事があるんですが…」
田代は、壁から採取した散弾の粒の入ったビニール袋のひとつを、石塚に渡した。
「これの成分を、至急分析してもらってください。おたくの鑑識ではなく、調布の科学捜査研究所の方でお願いします。できるだけ早急に」
「わかりました」
石塚は、もう一度鑑識員のチーフを呼んで、その旨を指示した。
その間に、いったん部屋を出た田代はどこかへ電話をいれた。二、三分で話を終えると、電話を切った。
「石塚さん、二時間ほど外出しますが、一緒にいかがですか？」
田代は、分厚い入り口のドアの隙間から顔を出して、地下室の中にいる石塚を誘った。
「かまいませんが、この捜査に関係のあることですか？」
「おそらく、関係してくると思います。それに、行先はここからさほど離れていませんので、何かあればすぐに戻ってこれます」
「そうですか。では、喜んでご一緒します。昼めしもまだでしたしね」
「そうですね。途中のどこかで、食べましょう」
石塚は部下の加藤にその旨を話すと、車を用意した。

十六．異質の存在

二人を乗せた車は、環状八号線に出ると、そのまま北上していった。
十五分ほど走り、世田谷区から杉並区に入った辺りで田代は車を停めた。洒落た洋風の造りのその店の看板には「島田銃砲店」とあった。
「やあ、田代さん。随分と、早かったですね」
店主の島田が、驚いたように出迎えた。
「割と近くにいたものですから…。ご紹介します。こちらは、成城署の石塚さんです」

「どうも、始めまして」
紹介もほどほどに、田代が相談に入った。
「早速ですが、調べていただきたいのはこの方の販売記録です」
田代が、カバンの中から先ほど預かった銃の免許証を取り出して島田に渡した。
「どれどれ、…ああ、村井さんのですか。でも、何故これを、あなたが…？」
田代は、今度は即答せずに石塚の方を見た。
石塚は、頷いてそれを承諾した。
「実は、村井さんは亡くなられたのです」
「ええっ。い、いつですか？」
その驚きの質問には、石塚が答えた。
「つい、数時間前です。おそらく、昨夜の未明だと思われます」
「また、何で？」
「死亡原因の方も、まだ、わかっておりません。我々も調べ始めたばかりなのです。ただ、かなりやっかいな事案になりそうなのです。プレスへの発表のタイミングも検討しなくてはならないような難しい事案です。ですから、このことは、どうかご内密に願います」
「そういうことなら、承知しました。余計なことは聞かずに、黙ってご協力しましょう」
「ご理解をいただき、感謝します」
「じゃあ、奥で記録簿の方を調べますから、そこに座ってお待ちください」
島田は、ガラスの陳列ケースになっているカウンターの奥で確認の作業を始めた。
田代と石塚の二人は、島田に勧められた店のコーナーにある応接セットに腰かけた。
慣れた様子で座る田代に対して、石塚の方は座ったとたんに店内を物珍しそうにきょろきょろと見回す。車中での説明で、この店に来る理由は聞かされていた。銃の免許証に記録された散弾の購入記録によると、村井はこの三年の間、散弾のすべてをこの店で購入していたのだ。田代は、村井が購入した散弾の種類の確認を急いでする必要があると説明していた。
「石塚さんは、こういう銃の専門店には来たことがないのですか？」
「はい。実は、初めてなんです。銃砲の管理については、刑事課ではなく生活安全課が窓口ですからね…」
言いながら、石塚は見回し続ける。
Ｌの字型に設置された陳列ケースの中には、射撃用の関連グッズが所狭しと並べられている。それは、一般の商品を売る店舗の様子と変わりない。決定的に違うのは、一方の壁のすべてが頑丈そうなシャッターで閉じられていることだ。それが店の外にあるのは普通であるが、店の内部にあるのは異様であった。
「ひょっとして、あのシャッターの中に銃が？」
「ええ、そうです。たくさん並んでいます。防犯上、あのように保護するよう指導しています。鉄格子や強化ガラスにしている店もありますが、やはり、外から銃が丸見えというのは好ましくありませんから」
「なるほど…」
頷きながら、なおも見回す。
そして、壁にかかっている大きな写真パネルに目が止まる。それは、長髪のハンサムな

青年が優勝トロフィを手にしたものだった。
「あれっ、あの写真は、ひょっとして…？」
「ははは…、見つかってしまいましたか。そうです。あれは、僕です」
「今よりも、少しお若いですね」
「ええ。十年ほど前の、選手時代のものです」
「ということは、この店とは…」
「ええ、入庁前からのお付き合いです」
警視庁管轄内の銃の取扱店を指導するのも、今や、田代の業務になっていた。従って、都内の銃砲店の経営者達とは、日頃から面識があった。しかし、この島田とは入庁前の選手時代からの付き合いであった。
そこへ、台帳を抱えた島田がにこにこしながらやって来た。
「今でもよく、覚えていますよ。初めて田代さんがここにみえた時は、まだ学生さんでした」
空いた椅子に座りながら、島田が続ける。
「それが、警視庁に入るなり、あっという間に日本チャンピオンになられたのです。しかも、二年連続ですからね…」
島田は、クレー射撃界のヒーローだった田代と懇意であることを、事あるごとに自慢のネタにしていた。しかも、最近の田代の知名度は例の羽田での活躍以来、更に全国区になっていた。島田は、そのことが嬉しくて仕方がなかったのだ。
「ははは…、島田さん。お褒めの言葉はとてもありがたいのですが、今日は時間に限りがありますので、僕の過去の栄光の話は次回ということにして、そちらの結果の方を教えてください」
「ははは…、そうですか、それでは仕方がないですね…。では、お答えしましょう」
島田が残念そうに、本題に入った。
「村井さんは、この四年の間に五回、ここにいらして散弾を買われています。これが、その五回分の内容を書き出したものです」
テーブルの上に乗せられたメモ紙には五行の文字が書かれていた。買った日付、買った数量、そして散弾の種類。数量はまちまちであったが、買った散弾の種類はすべて同じものだった。
「この「ミノリ・ＢＸ１２」といいうのは、散弾の種類ですね？」
石塚は、呑み込みが早かった。
「はい、そうです。美濃里という製造メーカーのＢＸというシリーズで、１２号とは、その中の大きさの種類を表しています」
「普通、散弾を買う人は、村井さんのように同じメーカーの同じ種類のものしか買わないものなんですか？」
「こだわりや、好みということがありますから、そういう方もいらっしゃるでしょうね。でも、必ずしもそうとは限りませんよ。好みとは関係なく、自分がよく行く射撃場や、猟場に近い所に銃砲店があれば、そこで扱っているメーカーのものを買うということもあるわけです」
「なるほど、そうですね」

「でも、村井さんの場合は、同じ散弾を私の店でずっと買い続けていたちゃんとした理由があったと思いますよ」
「えっ。本当ですか？」
「ええ。想像ですが、おそらくそうだと思います」
「結構です。ぜひ、聞かせてください！」
「村井さんは、射撃競技の方はまったくなさっていないと伺っています」
「つまり？」
「なさっていたのは、狩猟の方だけです。しかも、その猟場もいつも同じ場所だったと思います。そして、その猟場の近く、あるいはその経路には散弾が買えるような銃砲店がなかったんだと思います」
「だから、自宅から一番簡単に買いに来られるこの店だけだった、ということですね？」
「はい、そう考えるのが自然だと思います」
「その…、そこしか行かない猟場とは、どこだったかご存知ですか？」
「詳しくは覚えておりませんが、地元にいい猟場があるとおっしゃっていたと思います」
「地元…。地元となると、福島県のいわき市…、ということになりますが…？」
　石塚の頭には、村井の本籍がしっかりと記憶されていた。
「さあ、いわき市だったかどうかまでは…。ただ、東京からさほど離れたところでないという印象は残っています」
「どうして、そう思えたのですか？」
「車で、その日のうちに往復できるというような話だったからです」
「確かに、いわき市なら、ここから外環に乗って、常磐道を使えば充分に可能ですね」
「そうですね。それに、狩猟をやる方がここに来て自慢気に披露するのは、北海道のような遠方へ行って熊を仕留めたとか、大型の鹿を撃ってきたとかの、そういうスケールの話ばかりです。村井さんから、そういったスケールの大きい冒険談を聞いたことはありません。ですから、あの方はご自分の気に入った比較的近場の猟場で、気に入った小動物のみを撃って楽しんでいたはずです」
「小動物…。撃つ動物まで特定できるんですか？」
　石塚からその質問が出た時、島田は苦笑いをしながら、田代の方を見た。
　田代は、そのまま説明をしてあげて下さい、と言わんばかりに笑顔で頷いて返した。
「それは、村井さんがいつも買っているこれらの同じ散弾の種類が、中型以下の小動物用だからです」
「ええっ。散弾の種類で、動物の種類がわかるんですか？」
「大まかにはわかりますよ。狙う動物の種類によって、使う散弾も違うのです。ひと言でいうと、村井さんが使っている１２号という散弾の種類では、殺傷能力が弱すぎて、熊やイノシシのような大型動物を仕留めることはできないのですよ」
「なるほど…！」
　今度は、石塚が大きく頷いた。
「よくわかりました。…ちなみに、その小動物と言うと、どんなものになるんですか？」
「そうですね。鳥類だと、キジや山鳩。それから、鴨あたりでしょうね。動物だと、兎クラスということになるでしょうか」

「なるほど、兎ですか…」
石塚がもう一度、大きく頷いた。
たった数行しか書かれていない小さなメモ書の中に、様々な可能性を想像させる情報が詰まっていたことに驚かされたのだ。そして、石塚は、田代が現場を中座してまでもここに来た理由がわかったような気がした。
「島田さん。今度は、私が伺いたいのですが」
そう言いながら、田代が自分のカバンからデジカメを取り出した。
「ＳＫＣ社のもののようですが、私は見たことがない弾(たま)なんです…」
中に納まっている写真の一枚を裏の液晶モニターで選び出し、それを島田に見せる。それは、地下室の村井の死体が抱えていた銃の中に入っていた空の散弾の薬きょうを撮ったものだった。
「ああ、これですか。確かに、これはおっしゃる通り、ＳＫＣ社さんの作っている散弾に間違いありませんよ」
「この弾(たま)を、よくご存知ですか？」
「ええ、勿論です。うちでも取り扱っていますから」
「それは、よかった。今すぐに、実物を見せていただけますか？」
「ええ、いいですよ。ちょっと待っていてください」
いったん、奥の部屋に入った島田は、すぐに散弾の箱を手に戻ってきた。
二人の目の前で箱を空け、中の一つを取り出して渡してくれた。
「ああ。確かに、これだ。同じものですね」
カメラのモニターと見比べた石塚が言った。
「はい。ＳＫＣ社が半年くらい前から売り出している、ＦＥシリーズです」
「そうか、新製品だったのか。それで見たことがなかったのか…」
今度は、それを堂々と手に持って回して見ながら、田代が呟いた。
そして、再び島田に訊ねた。
「ひょっとして、これはスチール弾ですか？」
「ははは…、さすがですね。その通りです。でも、どうしてそれがわかりました？」
感心する島田に田代が見せたのは、証拠保全用の小さなビニール袋に入った散弾の粒だった。地下室の壁にめり込んでいたものだ。
「これは、それの中身の一部です。見た目の印象も、おそらく重さの方も、通常の鉛製ではないと感じました」
「見た目はともかく、たったこれだけの量で重さの違いまで感じるとは、まったく、あなたにはいつも驚かされます。ご推察の通り、鉛製との比重で言うと、鉛製が一〇〇に対してそのスチール製は、七〇くらいしかありません。本当に、よくわかりましたね」
島田は、更に感心した。
「いや、たまたまですよ」
対して、田代の方は、特別なことではないという感じで答えていた。
そのやり取りを見ていた石塚も、特別には驚かなかった。田代水丸には、そういう常人にはない特異な何かがあるのだ。それが、田代の「犯罪嗅覚」であり、「嗅覚の怪物」たる所以であった。

「でも、おかしいですね。このＳＫＣ社のは、クレー射撃競技専用の散弾ですよ。それが、何で射撃競技をやらない村井さんのお宅に…？」
島田が、そのことに気づいた。
「おっしゃる通りです。実は、僕もそれが気になって、捜査の途中で急いでここへ来たんです」
田代も同じ考えのようだった。
「えっ…。ということは、田代室長は、あの地下室にいた時点で、そこまでわかっていたんですか？」
結局、石塚も感心させられた。
「ええ。そこまでは、わかっていました。後でランチをしながら、まとめてお話しようと思っていたのですが…」
「とりあえず、そのまとめのさわりだけでも教えてください」
「では、ここでは簡単に説明します。あの地下室にあった三挺の散弾銃は、どれもみな競技用ではなく、狩猟用のものだったのです。そして、保管されていた弾の方もすべて狩猟用のものでした。箱の中の弾の一つ一つを確認しましたから間違いありません」
それを聞いた石塚は、田代が散弾の確認に時間をかけていたことを思い出した。
「このメモ紙にある「ミノリ・ＢＸ１２」ですね？」
「そう言うことです。そうなると、村井氏を死亡させた散弾は「異質の存在」ということになってくるのです」
「異質の存在…？」
「ええ。すべてが狩猟用である中に、ひとつだけ競技用のものが存在していたという意味です」
「それは、さっき、お二人が言っていた鉛製とスチール製の話のことですか？」
「それですよ、石塚さん」
田代が、大きく頷いて言った。
「最近、競技の方では、スチール製の散弾が少しずつ使われるようになってきているんです」
そして、その説明を始めた。
「このところ、各地のクレー射撃場で「ある問題」が起こっています。すべての射撃場ということではなく、近くに飲料用水や農業用水の水源になる湖や川を抱えた所に限った話です。本来、散弾銃の弾は、大半が鉛製です。そして、その鉛というのは水に溶けやすい物質なんです。つまり、撃ち終わって辺りに散乱した鉛弾が雨水に溶けて土壌に浸み込み、いずれ、周辺の湖や川や田畑を汚染するということがわかってきたんです」
「鉛中毒かぁ…」
「ええ、そうなんです。そこで、環境省がその対応策に乗り出したんです。今のところ、強制的な処置までには至っていませんが、ガイドラインを作って、奨励するようになっています。特に、問題のありそうな公共の射撃場については調査の為に、すでに閉鎖されているところも出てきています。関東ですと、神奈川、埼玉、千葉の三つの県営射撃場がそれです」
「そうだったんですか。まったく、知りませんでした。それで、鉛製に代わって、水に溶

けないスチール製の散弾が普及し始めた、というわけですね…」
「その通りです。とは言うものの、スチール製の散弾は鉛製に比べて割高です。一部の地域の環境上の都合の為に日本中の利用者のすべてを巻き込むわけにもいきません。ですから、これは強制的に縛られるものではありません。あくまでも、該当する地域において、任意に協力するという形をとっています。スチール製の弾を使用するのは、ごく限定された場合のみなんです。例えば、件の神奈川、埼玉、千葉で開催されるクレー射撃の公式な競技大会の時など、公共性の強い場合にのみ環境問題に協力するという趣旨で使用しているというわけです」
「そういうことかぁ…」
「ええ。ですから、クレー射撃の競技ではない狩猟の為に、わざわざスチール製の散弾を買うなどということは、およそ考えられないということです」
「な、なるほど。よくわかりました。つまり、村井氏を死亡させたＳＫＣ社のこれは、狩猟しかやらない村井氏が持っているはずのない弾だったということですね？」
「まさしく、その通りです」
石塚がすべてを理解したところで、その場は散会となった。
参考物証として、そのスチール製の散弾をいくつかもらって、二人は島田の店を出た。

十七．消される可能性

環状八号線の内回りを少し走ったところで、二人は道沿いのファミリー・レストランに入った。
遅い昼食の間も、石塚の質問は止まらなかった。
「さっきの、使われた散弾の疑問についてはわかりましたが、他にも何かおかしな点があるんですか？」
「ええ、もうひとつあります。さっきは、隣に島田さんもいらっしゃいましたので、話せませんでした」
「今なら、聞いてもよろしいですか？」
石塚が、恐る恐る訊ねた。
「ええ、勿論です。あの地下室を見て、すぐに気付いた不自然さがありました。…それは、散弾の飛んだ角度です」
「村井氏の頭を撃ち抜いた？」
「ええ…。あのように座った姿勢で自分で撃ったのなら、散弾は後ろの壁ではなく、必ず後ろの天井方向へしか飛ばないはずなんです」
「確かに、弾や肉片は天井ではなく、壁の部分に付着していましたね…。例えば、抱えていた銃が発砲時の反動で動いて、違った角度になったということは？」
「無論、その可能性も考慮しました。しかし、残念ながら、しっかりと体を包み込むようにできているあのリクライニング・シートの構造だと、そうなる可能性はほとんどありません。だから、あれは、自分一人ではあり得ない角度なんです」
「そうか、そうなると…」

石塚は目を閉じて、自問するように続けた。
「その角度の不自然さに、さっきの使われた弾(たま)の疑問、そして、切られた耳の行方…、これらを合わせて考えると…」
石塚が、言葉を詰まらせた。
「石塚さん。申し訳ないのですが、更にもう一点、考慮すべき点があります。その使われた弾(たま)のについてです」
田代は、続けた。
「何故、あの時私が、鑑識の皆さんに無理を言って、指紋採取を急いでお願いしたと思いますか？」
「あ…。そういうことか…」
今の石塚であれば、言わずとも理解ができた。
「そうです。もし、あの弾(たま)に、村井氏ご本人の指紋が付いていれば、まだ他の可能性の余地も残ったんです。しかし、村井氏は手袋はしていませんでした。つまり、あの弾は、手袋をはめた誰か他の人間が、銃に込めたという可能性が高いんです」
「ああ…、そうだ。そうだった…。そうか、それでか…。そうなると、ますます…」
「はい。自殺である可能性は、より低くなりました」
田代が、代わってそれを言葉にした。
「うーん…」
と、一度唸り声を上げてから、石塚はスポーツ刈りの頭を何度も撫でまわした。
自殺ではなく、他殺ということになれば、その犯人探しを始めなければならないからだ。しかも、今回のそれは、異常な猟奇殺人ということになってしまう。今後の、捜査体制からして自殺とは比べ物にならない程の大きな扱いになって来る。
「しかし、ああいうＳＭの世界に傾倒する方は、本当にいるんですね。これから、その奥さんに会うのかと思うとドキドキしてしまいます」
田代がコーヒーを口にしながら、小さな笑みを浮かべて言った。
石塚の落胆ぶりを見かねて、わざと柔らかい話題を振ったのだ。
「また、そんなことを…。私ならともかく、女性の扱いに慣れた田代室長に限っては、そんなことはないでしょう。でも、なかなかの美人ですよ。楽しみにしていてください」
「美人かぁ。ますます、恥ずかしくなってきました」
「ははは…。またまた、そんなことを…。でも、室長。ＳとＭの関係は、必ずしも、男の方が女に、だけとは限らないんですよ」
石塚が、少し真顔に戻った。
「えっ、どういうことですか？」
「反対の場合もあるということです。つまり、村井氏が奥さんにする、とは限らないんですよ。村井氏本人の方が、されて悦ぶというケースもあるんです」
「なるほど、そうか。いわゆるＭ男ってやつか…」
「はい。ですから、もし、村井氏が自分を痛めつけることで快楽を得るという嗜好があるとすれば…。まあ、これは、極論ですが…」
石塚には、そこに何かの考えがあるようだった。
「あるとすれば…？　その先を聞かせてください」

「死を目前にした人間が、人生の最後に、最も究極の部類のM行為に走ることもなくはありません」
「つまり…？」
「つまり、その極致が自分の耳を切り落とすということです。実際、そう言う事例は、洋の東西を問わずに存在します。人生の結末に、そこまで行き着く可能性は少なからず考えられるのです。だとすれば…」
「だとすれば、あれは村井氏が自分でやったという可能性も出てきますね。そういえば、性的な嗜好かどうかは別として、有名な画家が自分の耳を切り落としたという話を聞いたことがあります」
「そういうことです」
「そうなってくると、奥さんには、嫌でもその辺りの話も伺わなければなりませんね」
「ええ、避けては通れませんね…」
「では、意を決して、その奥さんに会いに行くとしましょう」
「はい。行きましょう！」

十八．身体的理由

村井宅に戻った二人が一階の応接間で待っていると、ほどなくして、村井の妻の琴音が二階から降りてきた。
一瞬、田代の目が、その容姿に釘付けになった。
琴音の放つ不思議な色香にだ。
まだ三十歳代のその肌は、透き通るように白かった。雪の様に細やかで真っ白い。そして、女を感じさせる豊かな胸だった。かといって、それを意識的に強調するような服装ではない。むしろ、品のあるきちんとした出で立ちだ。だが、まちがいなく何かの艶めかしい色香を漂わせていた。際立つ肌の白さがそう見せているのだろうか。仮眠していた直後の乱れた髪が、そう見せているのだろうか。あるいは、恐ろしい形で夫に死なれて、心神喪失の状態だからだろうか。
実際、初対面の田代を見つめる彼女の目は、どこか力なく彷徨っていた。
「奥さん、少しは休めましたか？」
「はい、おかげさまで。うつらうつらでしたが…」
「そうですか。もう少し伺いたいことがあるものですから、頑張ってお付き合いください…。こちらは、警視庁の田代さんです」
「警視庁の…？ ご苦労様です。村井の妻の琴音と申します…。このたびは、大変なご迷惑をおかけしまして、申し訳ございません」
「こちらこそ、お疲れのところを申し訳ありません。なるべく、早く終わらせますので」
「あの…。主人は、まだ下に？」
「ええ。状況が状況だけに、通常のようにすぐには…」
「そうですね。あれでは、仕方がありませんね。でも、できるだけ早く楽な状態にしてあげてくださいね。あのままでは、あまりにも可哀想です…」

その悲惨な光景を思い出したのか、彼女は涙を浮かべてそう哀願した。
不謹慎ではあったが、それを見た田代は、この女性は笑顔よりも哀しい顔が似合うタイプだと思った。哀しみの美しさだ。
「ごもっともです。そうできるように努めます。ですから、どうぞ、お気を強くお持ちになってください」
石塚はそうなだめると、困ったように田代の方を見た。
彼女のその様子を見ていると、とても事前に打ち合わせをしたような類の話は切り出せなかった。しかし、聞くべきことは聞かねばならないのだ。田代は目をつぶりながら首を縦に振って、それを石塚に促した。石塚も、渋々と頷いて返した。
「では、奥さん。手短に伺います。ご主人は趣味で狩猟を楽しまれていたようですが、クレー射撃の方もよくなさっていたのですか？」
「クレー射撃って…、あの飛ばした円盤を割る…、あれのことですか？」
「はい、スポーツのクレー射撃競技です」
「いいえ、していなかったと思います。狩猟のみだと思います」
「間違いありませんか？」
「はい、間違いないと思います。鉄砲を使うのは狩猟の時だけだと思います。狩猟の方は、若い時分から大好きで、よくやっていたようですから。でも、そのクレーをやるなんてことは、一度も聞いたことがありませんわ。少なくとも、私の知る限りでは、したこともないし、しに行ったこともないと思います」
「そうですか…。狩猟は、主にどちらへ行かれていましたか？」
「主に、というよりは、いつも決まった所にしか行っていないと思います」
「それは、どこですか？」
「福島県のいわき市です。主人の故郷です」
「そうですか、いわき市ですか…。ところで、奥さん。亡くなられたご主人の足元に落ちていたハサミのことなんですが、あれはこのお宅のものですか？」
「いいえ、違います。この家には、あんなに大きなハサミは置いてありません」
「そうですか…。では、もうひとつ、伺います…」
石塚が、いったん間を置いた。切り出しにくい例の質問だからだ。
「これから伺うことは、非常にプライベートな部分のことです。恥ずかしいかもしれませんが、今回の事件を判断するうえで大事な質問になりますので、どうか勇気を出してご協力ください」
「はい…。いったい、どのようなことでしょうか…？」
「ぶしつけですが、ご主人は自分を痛めつけるような趣向や性癖のようなものはありますか？」
「な、何ですって？」
最初にそれを聞いた時には、さすがに彼女は面食らった感じであった。だが、
「例の、地下室の飾り棚の中の…」
という石塚の次の言葉と、切り出しにくそうな彼の雰囲気を見た琴音は、それを察した。
「飾り棚の中の「あれ」を…、ご覧になったのですね…？」
そう言って、琴音は困ったように目線を落とした。

「はい。拝見しました…。言いにくいことは、重々承知の上です。しかし、この質問は、今回のご主人の死因を判断する上で避けて通れないのです。他殺なのか自殺なのかを左右するものなのです」
「それは、どういう意味なのですか？」
「つまり、あの拘束器具やロープや人を痛めつける色々な器具が、ご主人自身に使われるもので、自分を痛めるのが性癖であれば、その極致が自分の耳を切ることなのではないかと…。人生の結末にそこまで行き着く可能性があったのではないかと、そう考えたわけです。もし、そうであれば、他殺ではなく、自殺であったとも考えられるわけです」
「そういうことですか…」
そう呟いて、彼女はしばらく黙りこんだ。それから、静かに話し始めた。
「主人には、自分を痛めて悦ぶような性癖はありません。あれは…。あれは、主人ではなく、私を縛ったり痛めつけたりする為の器具類です。いわゆる、夫婦の間の秘めごとです…。縛った私を天井から吊るしておいて、あれこれするのが主人の秘めやかな性癖、趣味でした…」
説明する彼女の美しい顔が、真っ白い首筋が、みるみるうちにピンク色に染まっていくのがわかった。
「主人は若い頃から狩猟が好きで、兎を仕留めては、それを木に吊るしてさばいたそうです。そして、その時の興奮が忘れられなかったようです。それが高じて、同じことを私に求めるようになったのです…。勿論、本当に切り刻んだりはしませんが…。でも、そういう風にいたぶることに異常に興奮するようになったのです。吊るされた私の体を、鞭などでしばきながら悦に浸るのです。「この兎めっ」と叫びながら、興奮して何度も私の体を叩くのです！ そして…、そして、わたしの体をむさぼるのですっ！」
琴音は吐き出すように言い切ると、両手で顔を覆って泣きだした。
「刑事さん…、もう…。もう…、これで、よろしいでしょ？」
覆った両手の隙間から、彼女が声を絞り出すように哀願した。
田代も石塚も、もはや、かける言葉を失っていた。
二人は、なかば逃げ出すように建物の外へ出た。
今の二人には何物にも侵されていない新鮮な外の空気が必要だった。いかに職業柄慣れているとはいえ、この建物の中にたち込めている重苦しい空気の中に長く浸かっているのは、さすがに酷だった。残虐と淫楽が混在した異様すぎる空気だ。加藤から、現時点での聞き込み情報などの報告を受けたのち、田代と石塚は惹きつけられるように隣の公園へ向かった。
ベンチに座った二人は、おもわず両手をあげて大きな深呼吸をし、そして、おもいきり体を伸ばしていた。
「残念ながら、あの耳は村井氏が自分で切り落としたのではありませんでした。これで、自殺の可能性がほぼなくなってしまいました…」
「そうですね…。しかも、他殺となると、また新しい疑問点が生まれてしまいますね…」
「犯人は、どうやって、あの建物に侵入したのか…。どうやって、あの地下室に出入りできたのか、ですね…？」
「そういうことです。そうなると、定石通りに考えなければなりませんが…」

「室長がおっしゃりたいのは、第一発見者になった妻の琴音さんのことですね？」
田代のその質問を予想していたように、石塚が自分の手帳を取り出していた。
「本格的な裏取りはこれからになりますので、今、手元にある聞き込みの情報だけですが…」
「ええ、かまいません」
「定石通りに考えると、まずは財産狙いという線ですが、預金や不動産、株式等の村井氏の他の財産関係も、調べはこれからです。今のところ、生命保険については目を引くような高額な物には入っていないようです。もう少し、突っ込んで調べさせますが」
「日頃の夫婦仲についてはどうですが？」
「一人だけ、村井氏の工務店に長く務めている従業員の話がとれています。それによると、人も羨むような仲の良さだそうですよ。まあ、二人が結婚したのはまだ三年ほど前のことだそうですからね。当たり前かもしれませんが…」
「奥さんはともかく、村井氏は随分、晩婚だったんですね」
「ええ。おそらくそれは、村井氏の身体的理由だったと思われます」
「身体的、と、言いますと？」
「村井氏は、重度の性的不能者だったそうです」
石塚から発せられたその理由は、予想外のものだった。
「そうだったんですか…。それで、あのような夜の夫婦生活を…」
「はは…、そうなのかもしれませんね。そう考えると、仲が悪いわけがありませんね…」
「そもそも、二人はどういう馴れ初めで知り合ったんですか？」
「妻の琴音さんは、それまでは新宿などのクラブで働いていたそうです。そこで、村井氏と知り合ったんです」
「クラブか…」
「まあ、あの美貌ですからね。村井氏は彼女に夢中になって、夜な夜な店に通い詰めたそうです。しかし、結婚をしようとまで考える決め手になったのは、琴音さんが村井氏のその欠点を承知で受け入れてくれたからだそうです。セックスだけが夫婦じゃないし、子供もいらないから一緒になりましょう、と言ってくれたそうです。村井氏はその言葉に大いに感激して、結婚に踏み切ったそうです」
「そんな裏話が、あったんですか…」
「ええ。この話だけを聞くと、とても、彼女が村井氏の殺害にかかわったとは思えませんが…」
「確かに、そう思えますね…」
「室長の例の「あれ」にも、何も響いてきたものはありませんでしたか…」
「まあ、今のところは…」
この時、田代は小さな嘘をついていた。
始めて琴音を目にした時に、彼女の中に「何か」を感じていたのだ。一瞬とはいえ、軽いトランス状態に陥ったのは事実だった。だが、それが何からなのかはわからなかった。何らかの罪の意識のようなものが見えたような気がした。しかし、それは彼女の艶めかしい色香によってかき消されてしまっていたのだ。
「そうですか…。私の方も今のところ、彼女はシロのような気がしています。他にもそう

思う理由があります…。さっきの聴取の時に、私は会話の節々にあえて「事件」や、「他殺」という言葉をストレートに使ってみました。しかし、彼女は、ごく自然にそれを受け入れていました。村井氏の死が他殺である可能性を否定しませんでした。仮に、彼女が犯人であれば、自分が疑わるのを嫌って、何らかの反応があったはずです。もしくは、自殺であることに誘導しようと試みたはずです。しかし、それはありませんでしたから」

「なるほど。言われてみれば、確かにそうですね」

「まあ、今のところは…、ですがね。ははは…」

石塚は、なかば自分の言葉に安心したかのように笑った。

それから、しばらくの間、二人は、西の方角をぼんやりと眺めていた。夕陽が沈みかけている。刺激的な、一日が暮れようとしていた。

十九．語りかける現場

翌日。夜八時過ぎ―。

広報室の通常業務を終えた田代水丸は、ひとり村井和滋邸に来ていた。

どうしても、この事案が頭から離れなかったからだ。

門の横に停めている警備のパトカーの中の警察官から鍵を借り受け取ると、インターホンは押さずに、そのまま邸内へ入った。警備の警察官の話によると、妻の村井琴音は外出中とのことだった。

田代は、一階と二階をひと通り見て回った。

最後に地下へ下り、例の頑丈で重い扉をゆっくりと開く。照明をつけると、昨日と同じ凄惨な現場が目の前に広がった。ただひとつ違うのは、中央のリクライニング・シートの上に村井の姿がないことだった。すでに、それは調布の科学捜査研究所の遺体安置室に移送されていた。

田代は部屋の隅にある一人掛け用の椅子に腰かけると、足を組んだ。

そして、カバンの中から大判の写真の束を取り出した。成城署の鑑識によって撮られたこの現場の大判の写真だった。石塚から送ってもらったものだ。彼はその写真を見始めた。一枚一枚を、時間をかけて丹念に見る。完全防音であるこの部屋は、不気味なほどの静寂さだった。田代の人並み外れた嗅覚が、徐々に研ぎ澄まされていく。

カサッ、カサッと、時折、写真をめくる時の音だけが部屋中に響く。

ひと通り写真を見終わると、田代は椅子から立ち上がって部屋の中央へ行く。村井の死体があった場所だ。

田代は、その場所と手にした写真とを同じ角度にして見比べた。

それから、彼は自分の胸の部分に空いている方の手を当てた。シャツの上から胸にかけてあるペンダントに触れる。母の形見の丸いペンダントだ。そして、静かに目を閉じる。じきに、深いトランス状態に入っていく。

今は、片づけられて何もないリクライニング・シートの上に、写真の村井の遺体を重ねて見る。もう一人の田代水丸が、三十数時間前の「時空」と同化していく。

村井和滋が、散弾銃を抱えたままリクライニング・シートの上で絶命していた。耳が切

り落とされた死体だ。大きく見開かれたその目は、部屋の天井を恨めしそうに睨んだままだ。その時、彼は何を思ったのか。

その足元の右側にハサミが落ちている。焼き肉を切る時に使うような大型のハサミだ。

田代は再び椅子に戻ると、持っていた写真の束を隣の子机の上に置いた。それから、部屋の中央の遺体の残像をもう一度見る。田代は、ゆっくりと自分の髪の毛を手で後ろに掻き上げた。そして、自問してみる。犯人は何故、こんなことをしたのだろうか。何故、ここまでする必要があったのだろうか。恨みからなのか。それとも、何かのメッセージなのか。もし、メッセージであれば、それにどんな意味があるのだろうか、と。

長い静寂が続いた。

田代は、おもむろにカバンの中から携帯を取り出すと、電話をかけた。

「夜分に申し訳ありません。田代です…。実は、村井氏の件でひとつだけ、どうしても伺いたいことがありまして…」

電話の相手は、石塚だった。

「ご苦労様です…。どうぞ、おっしゃってください…」

「ありがとうございます。では、遠慮なく…。例の死体の脇に落ちていた大きなハサミのことなんですが、あれについては何かわかりましたか？」

「どこの会社の製品かまでは、わかりました…。しかし、特別なものではなく、ごくありふれた一般的なものでした…」

「そうですか。そうなると、売っている数も多いんですか？」

「はい、残念ながら…。年間に、四千個近い数を販売しているものでした…」

「だとすると、扱う店の量も…？」

「ええ…。都内だけでも、百店以上です。私の方も、それを期待して部下達に当たらせてはいるのですが、流通経路をたどっていっても取扱店があまりにも多すぎて、とても購入先を特定できる状況ではありません…。もし、それが特定できれば、防犯カメラの確認へと移行することができるのですが…」

「そうですか…」

「数少ない物証ですから、それについては引き続き根気よく探していくつもりです…」

「よくわかりました。それが伺えれば、今日はもう充分です…。…はい。本当に、助かりました。夜分に失礼しました…」

石塚に礼を言って電話を切ると、田代はもう一度写真を見た。

置き去りにされたハサミ。犯人は、物証を残していた。それは、慌てていて忘れたから残されていったものなのか。それとも、わざと残していったものなのか。

田代は、もう一度長髪を掻き上げた。

やはり、わざと残していったものなのだろう。犯人は、誰かに何かを訴えようとしている。そして、何かに導こうとしている。田代水丸の犯罪嗅覚は、そう答えていた。

その時、体に悪寒が走った。

正確に言うと、体が嫌がる感覚と悦ぶ感覚がない交ぜになった不思議な感覚だった。いずれにしても、彼の体はそれを受け入れてはならないと警告し、拒絶していた。

部屋の入り口の分厚いドアが、ゆっくりと動いた。

暗い階段室を背にして、透き通るように肌の白い女が立っていた。そこだけは、水墨画

のようなモノトーンの世界だった。
村井琴音だった。
「刑事さん、ご苦労様です」
彼女のそれは、昨日会った時とは比べ物にならないほど、よく通る声だった。
「奥さん、お邪魔しております。ご不在でしたが、勝手にあがらせていただきました」
「勿論、かまいません。何か、お調べに…？」
「特に、何がというわけではないのですが…。昨日は大人数でざわついていましたので、ひとりになって落ち着いて、もう一度この現場を見てみたかったんです」
「そうでしたか。何べんも、ご苦労様です。…あの、夕飯はおすみになりましたか。簡単なものでよろしければ、ご用意しますが？」
「いや、それにはおよびません」
「では、お飲み物だけでも…」
「大丈夫です。そろそろ引き上げようと思っていましたので」
「そうですか…」
言いながら、彼女の視線が吸い寄せられるように天井中央の方へ移っていった。
田代の視線もそれにつられていく。あの菱形に並んだ金具が目に入る。
「昨日のお話の時は、取り乱してしまって、すみませんでした」
琴音は、哀しみと恥ずかしさを混ぜたような表情で言った。
「い、いや、気になさらないでください。あんなことがあれば、誰でも平常心ではいられませんから」
しばらくの間、二人の視線は、その金具から離れることができなかった。
表現のできない不思議な空気が、ざわめきのようにあたり一面に流れはじめていた。重苦しさとは少し違う。しかし、体の性の部分に強く訴えてくる空気だった。それは、男が男であることを、女が女であることを強く自覚させるような、淫靡な空気だった。
「では、今日はこれで、失礼します」
その空気を自らかき消すように、田代が言った。
「奥さん。どうか、お気持ちを強く持って、お体をご自愛ください」
「ありがとうございます。そう努めます」
田代は、昨日の時と同じように、半ば逃げ出すように建物の外へ出ると、大きく空気を吸い込んだ。そして、吐き出した。
それから、村井邸をあとにした。

二十．宝探し競争

三日目の朝、その情報は意外な場所からもたらされた。
田代水丸は、警視庁まで迎えに来た石塚の運転する車に飛び乗った。
車は、首都高から常磐自動車道に乗ると休憩を入れずに北上した。二時間半ほどで、いわき湯本インターに到着し、それを下りてから県道を南下する。ゴルフ場の横を抜けると、辺りは田畑やビニールハウス群が広がる。更に、走ると、細い脇道の入口に県警のパトカ

ーがそれを塞ぐように停まっていた。
目的の現場だ。
石塚が窓越しに警察手帳を提示すると、そのパトカーが道を開けてくれた。
沿道脇にずっと並ぶ警察関係の車両の多さが、その事件の大きさを物語っていた。
現場は、たくさんある大きなビニールハウスの中の一つだった。
「鑑識の方は、あらかた済んでいますが、念の為にこれを着けてください」
案内役の県警職員に言われて、ハウスの入口で、二人はビニール製の保護カバー付きのスリッパに履き替えた。ハウスの中は、全面が柔らかい畑土だからだ。
イチゴの蔦が絡んだ高さ一メートル五十センチほどの柵が、綺麗に五列に渡って通っている。その真ん中の手前側だけが、倒れた大柄な男によってなぎ倒されていた。作業服の胸の辺りが大きく破れて血に染まっている。それを見た田代は、遠目からでもすぐにそれが散弾銃によるものであることを見極めた。
そして、その死体は両耳が切り落とされていた。
しかも、死体の脇に落ちていたのは、三日前の村井の時のと同じ型の大きな肉切りバサミだった。
「田代室長。このハサミは、やはり…！」
それを見るやいなや、石塚が小さく叫んだ。
「ええ、村井氏の所に落ちていたものとそっくりですね」
「ここまで足を運んで来て、大正解でしたね」
「ええ、そのようですね」
だが、村井の時と決定的に違うのは、左右の切られた耳が死体の足元に落ちていたことだった。
「石塚警部殿。遠方から、ご苦労様です！」
現場を切り盛りする地元県警の菅野昭雄がやって来た。
三十代半ばのいかにも素朴で真面目そうな男だった。
「連絡をありがとうございました。こちらは、警視庁の田代室長です。今、東京の方の事案でご協力をいただいています」
石塚が、田代を紹介した。
「あ…、あの有名な田代室長ですか？」
「ええ、あの田代室長です」
本人に代わって、石塚が答えた。
「お目にかかれて、とても光栄です！」
菅野が、まるで映画スターを見ているかのような羨望の眼差しで挨拶をした。
「ははは…、よろしくお願いします」
田代は、苦笑いを交えながら頭を下げた。
自分の知名度が、全国規模的な大きさだということは、こうして、実際に地方に出てみると、つくづく実感させられる。
「さっそくのことで申し訳ありませんが、本件の概要をお聞かせください」
石塚に促されて、菅野が説明を始めた。
「はい…。害者は、寺島清隆さんといいます。年齢は五十八歳。ここでイチゴ栽培をなさ

っています」
「五十八歳…？」
「はい。そうですが、それが何か…？」
「例の村井さんも同じ年齢です」
「そうなんですか」
「このビニールハウスは、寺島さんの？」
「はい、そうです。彼のものです。ですから、発見者は、寺島さんの奥さんです。自由にこのハウスの中に入れるのは奥さんだけですから。今朝の六時過ぎのことです」
「奥さんが、生前の寺島さんを最後に見たのは？」
「昨夜の八時過ぎです」
「最後が八時とは、随分と早い時間ですね？」
「ええ。最近、この界隈でイチゴ泥棒が頻発しているので、その見回りに出て行ったとのことでした」
「なるほど、そういうことですか。で、それから寺島さんは戻ってこなかった…」
「はい。いつものことなので、奥さんはそのまま寝てしまったそうです」
「だとすると、普通なら、犯人の捜査はそのイチゴ泥棒が有力な容疑者になっていたのでしょうね？」
「まあ、そうですね。普通であれば、ですが…。しかし、ご覧のように、これはどう見ても普通の状況ではありません…。しかも、更に、とんでもないことがわかりました」
菅野は、緊張した面持ちで続けた。
「何と、ここに落ちている耳は、寺島さんのものではないようなのです」
それを聞いた石塚と田代が、顔を見合わせた。
「どうして、それがわかったんですか？」
「奥さんの証言です。この耳を見るなり、奥さんが叫びました。「これは、あの人の耳じゃない！」と…」
「奥さんは、どうして、ひと目でそれがわかったんですか？ いくら、長い間連れ添ったご夫婦とは言っても…」
「寺島さんは、耳にはっきりとした特徴を持っていたからです。寺島さんは、若い頃、柔道をやっていたせいで、両耳共に大きな瘤があるのです」
「ああ、レスリングや相撲の選手なんかにもよくできる、例のあの膨らみですね」
「はい、それです」
「それでは、そこに落ちている耳は、いったい、誰の…」
石塚は、キツネにつままれたように言った。
「はい。それで、ご連絡しました。ひょっとして、先日の東京の耳無し事件と何かの関係があるのではないかと思いまして…。でも、まさか、ここまでわざわざ確認のためにいらっしゃるとまでは…」
「ははは…。正直なところ、車で比較的楽に来れる距離でしたので、あれこれ迷わずに来れたのです。同じ福島県でも、ここは一番東京寄りですしね。いずれにしても、連絡をいただいたことには感謝しております」
石塚が改めて礼を言った。

「そうですか、それは良かったです。…実は、寺島さんの奥さんからは、もうひとつ気になる証言をとっています」
「ほう。それは、どんな？」
「まあ、この殺人事件と直接関係があるかどうかはわかりませんが…」
「どんなことでもいいですから、おっしゃってみて下さい」
「一週間ほど前のことですが、寺島さん宛に妙な宅配便が届いたそうです」
「妙な、宅配便…？」
「はい。冷凍宅配便だったのですが、表には「蟹」と記載されたその中身は、切り取られた兎の耳だったのです」
「ええっ、兎の耳…？」
　田代と石塚が、顔を見合わせた。
「耳だけですか…。体の肉とかは…？」
「食用の肉の体裁ではなかったそうです。何の加工もしていない、毛もついたままの、単純に生(なま)の耳だけが梱包されていたそうです」
「生の耳…」
「ええ、そうです」
「だとすれば、確かに、それは気になりますね。今回の事件とは、同じ耳つながりでもありますし…」
「ええ、そうなんですよ」
「で、その送り主は？」
「いわき市水産物協会とか、そんなような名前だったそうですが、寺島さんも奥さんも心当たりがなかったそうです…」
「送り状とか、その現物とかは残っているのですか？」
「いいえ、すぐに処分してしまったそうです。耳だけでは、食べるわけにもいかないし、奥さんとしては、気味が悪いのですぐに捨ててしまったそうです」
「まあ。普通は、そうでしょうねぇ。ただ…、そんなものが送られてきて、気にはならなかったのですかね？」
「はい、そのようです。結局、どこの誰が何の為に送って来たかどうかはわからないままでしたが、亡くなった寺島さんは、誰かの悪戯か手違いだろうと、まったく気にも留めなかったそうです」
「気にも留めなかったのですか…。場合によっては、警察に届けてもおかしくないようなひどい悪戯とも思えますが…？」
「ははは…、石塚警部殿。都会ではそういう風に考えるのが普通もしれませんが、この辺りでは、兎の肉をさばくのはそれほど特別なことではありませんから…」
　菅野が、困ったような面持ちで説明した。
「ええっ、そうなんですか。もしかして、兎は食用として定着しているんですか？」
「はい、そうですよ。僕の世代はそれほどでもありませんが、僕の親の世代までなら、普通に豚や牛と同じように兎の肉も食べますよ。人によっては、豚や牛よりも美味しいというくらいです。煮ても焼いてもいけますよ」
「なるほどねぇ、そうなんだ…。こちらでは、兎の肉は特別なものではないんだ…。室長、

どう思われますか？」
「まあ、地域の食事情や食文化のことは、この際切り離して考えることにしましょう…。寺島氏や村井氏の耳切り殺人との関連性ということだけで考えれば、その不審な宅配物は、時期的にも事件のたった一週間前のことですし、同じように耳を切ってあるということになれば、無視するわけにはいかない話だと思います」
　そう言ってから、田代は少し考えた。
　それから、菅野に言った。
「菅野さん、その件について調べていただきたいことがあるのですが、お願いしてもよろしいですか？」
「勿論です。何でもおっしゃって下さい」
　菅野は、手帳を広げて田代の指示を待った。
「まず、寺島さんの奥さんの所へ人をやって、その時の兎の詳細を聞いてもらってください。どんなことでも構いません。例えば、耳の色合いだとか…。白かったのか、茶色だったのか、です…。それから、もう一点。その時の宅配便の業者名を聞いてください。それがわかったら、それが、どういう経路でここまで来たのかを調べてみてください。つまり、配送のルートです。起点まで辿れるとありがたいのですが…。ひょっとしたら、それは、東京の方からかもしれません。そして、同じような荷物はひとつではなく、二つ以上かもしれません」
「はい。わかりました」
「もうひとつ、調べていただきたいことがあります。もし、起点まで辿れたら、その界隈のペットショップ、できれば飼っている近所の個人宅、それから、近くの幼稚園や小学校などで、一週間から十日前に、兎がいなくなったという届け出がないかどうかも調べてみて下さい」
「了解しました」
「菅野さん、もし、その起点が東京であれば、すぐに私に教えてください。そこから先は、私の方が探しやすいと思いますから」
「はい。ありがとうございます！」
　初めて難解な事件に直面して戸惑っていた菅野にとって、石塚のそういう心遣いは、頼もしく、嬉しかった。
「さてと…、まずは目の前のことから始めましょうか…」
　さっそく田代が訊いた。
「菅野さん。これは、散弾銃によるものですね？」
「はい、その通りです。さすがですね。ご覧になっただけでおわかりになるんですね」
「近づいてよく見たいのですが、もう大丈夫ですか？」
「どうぞ、靴跡などの鑑識はもう完了していますから…」
「ちなみに、容疑者らしき靴跡からは、何か情報が…？」
「２６～２６、５センチのスニーカータイプですから、男性なら、まあ、平均身長か、それよりも少し高いといったくらいでしょうか…。地面のへこみの具合から考えて、体重の方も平均前後でしょう。残念ながら、現時点ではその程度です。あとは、聞き込みと付近の防犯カメラということになりますが、この辺りではなかなかそういったものは…」

「そうですか。参考になります。ありがとうございました」
そう言うと、田代は寺島の血だらけの胸の状態を入念に観察しはじめた。
「ん…？」
胸の被弾部の観察を終えて、寺島の死に顔を見た田代が首をひねった。
「田代室長、どうかされましたか？」
石塚の方は、田代のその態度に関心を持った。
「いや…、この仏さんの口から首にかけてですが…。他の肌の部分と比べて、何かテカテカと光って見えませんか？」
「そうですかねぇ。言われてみればそうにも見えますが。光の加減かなんかではないでしょうか…？」
石塚は、懐疑的であった。
田代は、実際にその辺りを触ってみた。別の肌の部分も触ってみる。それから、また顎や首のあたりを触りなおしてみる。
「やはり、このテカっている部分は、他と比べて少しベトベトしていますよ」
そう言って、石塚にも同じように触ってもらう。
「んん…。言われてみれば、確かにこの辺だけは少しベトついた感じはしますね…」
「いったい、何でしょうかね？」
「さて、何でしょうか…」
石塚の答えを待つまでもなく、田代はバックから綿棒を取り出して、その辺りを擦って採取した。すぐに、それをビニール袋に入れてジッパーを閉める。
それをカバンに入れると、再び、石塚に声をかけた。
「石塚さん。ちょっと、手を貸していただけますか？」
「はい、喜んで。で、今度は何を…？」
田代は間を入れずに、菅野にも声をかけた。
「菅野さんにも、申し訳ありませんが、手の空いている方がいらしたら何人か貸していただきたいのですが…。本件の行く末にかかわる、とても大事な作業です」
「はい、そういうことでしたら。で、何をすれば…？」
「これから、私と一緒に、放たれた散弾を探してください」
「弾(たま)を…。わかりました」
菅野が、手の空いている三人を指名した。
田代の指示に従って、皆が散弾を探し始めた。
田代は、飛び散ったと想定できるおおよその範囲を人数分に割り当てた。それぞれが、自分に与えられた範囲の中にある柵や土の中を探し始めた。
だが、相手は、わずか直径1ミリ程の散弾である。部屋の壁にめり込んでいた村井の時とは違って、ここは空間だらけのだだっ広いビニールハウスの中である。そう簡単に見つかるものではなかった。その難しい状況がわかったのか、途中、二人が加わり、更に、二人が参加してくれた。
結局、その場にいたほとんどの警察官が散弾探しに協力してくれた。
「あったぞっ！」
三十分後。一人が、まるで、ダイヤモンドでも見つけたかのように、それを手にして叫

んだ。
「ありがとうございます！」
田代が、大声で礼を言った。
「よし、俺も負けないぞ！」
皆は、そう口々にしながら、競うように励んだ。
その甲斐あって、二時間後には、六粒の放たれた散弾を回収することができた。六粒目が手に入った時点で田代が終了の号令をかけ、その宝探し競争は打ち切られた。
「県警の皆さん、ご協力ありがとうございました。これだけあれば、充分です」
六粒目を、例のビニール製の小袋に入れると、田代が参加した皆に改めて感謝の意を伝えた。
「さてと…」
それをカバンにしまった田代が、ふと、石塚達の方を見た。
石塚、菅野、そして数人の警察官達の視線は、一様に田代に注がれていた。皆、田代の次の言葉を待っているのだ。たった二時間の間に、不思議な連帯感が生まれていた。そして、皆は、一人の指揮官の次の指示を待っていた。
「田代室長。この次は…？」
石塚が、笑顔で皆を代表して訊いた。
「ははは…、そうですね…」
田代は照れくさそうに、自分の長髪を手で後ろへ掻き上げた。その場の空気感は、彼にも伝わっていた。
「では、休憩にしましょう」
田代は、自分の財布から千円札を数枚取り出すと、それを菅野に手渡した。
「いろいろ頼んで申し訳ありませんが、近くで暖かい缶コーヒーを人数分お願いします」
「了解しました！」
菅野が、笑顔で敬礼を返した。

二十一．結束

皆は、ビニールハウス群から少し離れた所にある平地で労をねぎらった。
十数人の県警員と田代達が車座になって座っていた。
石塚は県警の職員達に、田代の並外れた犯罪嗅覚が発揮された過去の逸話を得意気に披露した。場は、大いに盛り上がった。県警員達にとって、田代水丸のヒーロー像は高まるばかりであった。
いっ時の、両警察の和やかな交流が一段落すると、石塚が改めてそれを訊いた。
「田代室長。そろそろ、現時点での考えをお聞かせ下さい…」
「そうですね。そうしましょう」
田代が、立ちあがった。
「皆さんは、そのままで聞いてください…。これは、あくまでも、私個人の考えではありますが…」

彼は、ぐるりと皆を見渡して、そして、言い放った。
「三日前に東京で起きた耳無し事件と、今回の寺島氏の事件とは、まちがいなく関係があると思います」
やはりそうか、という声が、誰となく出た。
「そう思われた理由は、やはり、耳の切断に使われたあのハサミと、皆で見つけたあの散弾ですか？」
菅野が訊いた。
「はい、そうです。ハサミの方は、目視でも同じものであることが判別できます。ですが、散弾の方は人間の力では判別ができません。科学的な分析が必要です。ですので、これから、あれを東京の科学捜査研究所へ持ち込んで分析してもらうつもりです。正式には、その結果を待ってということになります。そして、あれが東京の事案で使われた散弾と同一のものであると判明すれば、二つの事案は完全に繋がるということになります」
皆が、一様に頷いた。
「しかし、それよりも、二つの事案を繋ぐもっと大きな決め手になるかもしれない物証が他にあります。それは、寺島氏の足元に落ちていた寺島氏のものではない他の誰かの耳のことです。私は、あれが東京で殺された村井氏の耳であると推測しています」
それを聞いた皆が、一斉にざわついた。
「もし、その推測が当たっていれば、今回の一連のそれは、連続する猟奇殺人ということになってしまいます。そうなると、更に、恐ろしいのは、少なくともあともう一回は同じような殺人が繰り返されるかもしれない、ということです。すなわち、消えてしまった本当の寺島氏の耳の、次の行き先です」
ざわつきが治まり、逆に水を打ったように静まり返った。
もはや、田代の説明の一言一句を聞き漏らせなかった。
「今回の二つの事案を通して感じるのは、そこに犯人の強いメッセージが込められている、という点です。犯人は、誰かに何かを訴えようとしている。おそらくそれは、死の警告、殺人予告のメッセージでしょう」
皆の顔が一様に強張った。
田代は更に続けた。
「そして、その誰かとは、次のターゲットのことです。犯人は、次は、お前の番だと暗にその誰かに言っているのです。我々は、それが誰なのかを探し出さなければなりません。でなければ、また犠牲者を出してしまいます。今のところ、両方の事案に共通するのは、この、いわき市という場所です。我々は一致協力して、次の耳の行先を探し出さなければならないのです。しかも、一刻の猶予もありません！」
もはや、辺りは凍りついたようになっていた。
「え、えらいことになってしまった…」
菅野が、やっと口を開いた。
「どうか、菅野さん。この話は、まだ私の推測にすぎませんから…。とにかく、まずは皆さんと探し出した散弾、そして、現場に置かれた耳を科学捜査研究所に持ち込んで分析してみます。正式な結論は、それからです」
「仮に、田代室長の推測通り、使われた散弾が同一であり、更に、あの耳が村井氏のもの

と一致したとなれば、広域の連続事件ということになりますね…」
すでに、石塚は完全に戦う男の顔つきに戻っていた。
「そうなれば、やれ、こっちは警視庁だ、こっちは福島県警だ、などとは言っていられないでしょう。ですから、石塚さんはこちらに残って、県警との合同捜査の立ち上げの準備に入っていてください。東京の科学捜査研究所へは、これから僕が一人で届けに行ってきます」
「わかりました」
返す刀で、石塚が菅野に言った。
「菅野さん。早速ですが、すぐにおたくの署長さんと引き合わせてください」
「了解しました！」
すでに、チームは機能を始めていた。

二十二．「何か」

三十分後―。
田代は、寺島の死体の足元に落ちていた耳の保冷処置を済ますと、現場で採取した他の物証と共に車に積み込んだ。そして、自分も乗り込む。
「では、あとを頼みます」
運転席の窓越しから、田代が挨拶した。
「お任せ下さい。科捜研の方、よろしくお願いします」
石塚が、軽く頭を下げて答えた。
「田代室長、行ってらっしゃい！」
菅野が敬礼した。
すると、その後ろに整列して並ぶ県警の職員達も一斉に敬礼した。
「ははは…、行ってきます！」
照れ笑いをした田代は、皆に敬礼で見送られながら、現場を後にした。
田代が運転する車は、常磐自動車道のインターを目指した。
そこから、科学捜査研究所がある都内の調布インターまで一気に行くつもりだった。
田畑に囲まれた道路を走っていると、西側に樹木に覆われた小山が現れてきた。
道路際に小さな鳥居が立っていて、そのふもとへ参道が続いている。地方でよく見かける、小規模な神社の光景だった。
田代は、鳥居の少し手前の所で一旦車を停めた。
車からは降りなかった。エンジンも回したままだった。
そのまま、彼は、鬱蒼としたその小山をじっと、見た。ふもとから長い石段が、その中へ続いている。
しばらく、じっと、見ていた。
自分でも、そうしている理由はわからない。あえて言うなら、「何か」がそうさせていた。
少なくとも、快い「何か」ではなかった。不吉でおぞましい方の「何か」だった。
それから、彼は車を発車させた。

車は、再びインターへ向かっていった。

二十三．分析結果

翌日の午後―。
連絡を受けた田代水丸は、再び、調布にある科学捜査研究所を訪れた。
昨日の夕方、田代がいわき市から持ち込んだ切り落とされた耳の照合と現地で採取した散弾の分析の結果が出たのだ。
「急がせてすみませんでした。本当に、助かりました」
田代が、分析官の廣瀬基夫に礼を言った。
「どういたしまして…。あなたのような方のお役に立てて、光栄です」
そう言って笑って見せる廣瀬の顔には、疲労感がにじみ出ていた。おそらく、徹夜で調べてくれたのだろう。
「では、始めましょう」
それから始まった廣瀬の説明には、無駄がなく、要領を得たものだった。
田代の推察通り、いわき市での寺島清隆の足元に落ちていた耳は本人のものではなく、村井和滋のものだった。それは、照合したＤＮＡの符合は勿論のこと、実際に研究所の地下の遺体保管室に置かれた村井の遺体ともぴったりと符合した。それをもって、村井の遺体は、葬式の準備をして待つ妻の琴音の元へ戻す手配がなされた。
村井宅の地下室と、寺島のビニールハウスから採取した散弾の方も、田代の推察通りであった。二つは、ものの見事に一致した。それは、島田の店で手に入れたＳＫＣ社製のスチール弾と同一のものだった。
「あと、ハサミについてなんですが…」
ここで、廣瀬が少し間を置いた。
「ハサミの方は、いかがでしたか？」
「まず、寺島氏の方のものに付着していた血痕は、寺島氏ご本人のものでした。しかし、村井氏の方のハサミには、ご本人のもの以外に別の血痕も検出されました」
「他にも…？」
「ええ…。しかも、それは人間のものではありませんでした」
「ひょっとして、それは、兎の血ではありませんか？」
「ほう…、その通りです。よく、おわかりになりましたね。何か、そう思いあたることがあるんですか？」
「はい。心当たりがあります」
田代は、長髪を掻き上げながら、そう答えた。
故意か偶然かは別としても、犯人はまたもや、メッセージを残していた。犯行の一週間前に、寺島宛に送られた兎の耳を切ったのもそのハサミにちがいなかった。
「最近の事案では、同じような大型のハサミで、恋敵のペニスをちょん切った奴がいましたが、今回のホシも、随分と猟奇的な奴ですね」
呆れたように、廣瀬が苦笑いをした。

「おっしゃる通りです。厄介な奴です…」
田代も、苦笑いで返した。
「短時間に、これだけの分析をこなしていただいて、さぞかし大変だったと思います。本当に、助かりました」
田代が、改めて廣瀬に礼を言った。
「礼には及びませんよ。これが、僕の仕事ですから」
廣瀬は、ほとんどひと晩ですべての分析、照合作業を行ってくれた。
くぼんだ彼の目は、明らかに充血し、そして顔全体に無精ひげが伸びていた。それを見た田代は、しかしながら、もうひとつ質問しなければならないことを思い出した。
「そう言えば、廣瀬さん。例の、綿棒の方はいかがでしたか？」
「ああ、あれですか…。あれは、ただの石鹸です。正確に言うと、シェービング・クリームの残りでしたよ」
廣瀬は、あっさりと答えた。
「髭そりの時に使うあの…、ですか？」
「ええ、そうです…。それの乾いた泡の跡です」
「泡…。村井氏と寺島氏の、両方ともですか？」
「はい、そうですよ」
「その両方は、同じものでしたか？」
「いや、同じものかどうかまではわかりませんが、両方とも髭そり用のシェービング・クリームであることにはまちがいがありませんよ。どこにでも売っている一般的なものですよ」
廣瀬が、自信を持って答えた。
だが、それは、田代の満足する答えにはなっていなかった。
「何故、そうわかったのですか？」
「両方とも、石鹸の成分に加えて、ポリビニルピロドリンが使われていましたから」
「ポリ…、その物質は何ですか？」
「髭そりの刃に対して、滑り性を高めるために使われる物質です。洗顔剤や化粧クリームの類はどれも同じような成分を使いますから判別は難しいのですが、このポリビニルピロドリンが入っているのは、刃を使う髭そり用のものだけです。だから、簡単に判別できるというわけですよ」
「なるほど、そういうことですか。しかし、もう一度伺いますが、両方が同じであるということまでは確認されていないのですね？」
「ええ、まあ…」
「では、そのシェービング・クリームのタイプは、ジェル系ですか、それともフォーム系ですか？」
「さ、さすがにそこまでは…。だって、田代室長が採取されたのは、それぞれの害者の口の周りや顎の部分ですよね。その辺りに髭そり用のクリームの跡が残っているのは普通のことではありませんか…？」
その答えを聞いた田代の顔が曇った。
「確かに、おっしゃる通りです。普通のことです。しかし、今回の犯人は、さっきも言っ

たように普通ではないのです！」
「は、はあ…」
廣瀬は、田代の禅問答のような表現に対して、返す言葉に困った。
「で、では、どうしろと…？」
「お疲れのところ、大変申し上げにくいのですが、両方が同じものか違うものか、それから、どんなタイプのものなのかを急いで調べてください」
「今から、ということですよね…？」
田代から帰ってくる答えはわかっていた。
だが、わずかな望みを持って廣瀬が確認した。
「はい。申しわけありませんが、急を要します。できるだけ早くお願いします」
田代は、きっぱりと言い放った。
「…わかりました。すぐにかかります」
「どのくらいかかりますか？」
「そうですね、二、三時間ってところでしょうか…。結果が出次第、また室長の携帯に連絡します」
「無理を言ってすみません。それまで、私は外で待たせていただきます」
研究所のロビーに降りるなり、田代は、一本の電話をかけた。
「お疲れ様です…。お忙しいところ恐縮ですが、急いで調べていただきたいことがあります…」
相手は、いわき南署の菅野であった。
「はい、できるだけ早くでお願いします。…はい、お待ちしています…」
それが済むと、今度は、同じいわき市内に留まっている石塚にかけた。
「ああ、石塚さん…。科学捜査研究所の方ですが、今、結果が出ました…」
分析結果の報告の連絡だった。
連続猟奇殺人の存在が、証明されてしまったことの結果報告であった。これによって、福島県警と警視庁との合同捜査の立ち上げが決まった。

二十四．妻の願い

福島県いわき市、江畑町地内。
寺島清隆宅―。
田代から頼まれた調べ事を済ませた菅野昭雄は、寺島の妻に挨拶をして玄関を出た。
寺島宅の前に停めてある車の中に入ると、さっそく東京で待つ田代の元へ報告の電話を入れた。
「もしもし、福島県警の菅野です。ご苦労様です…。はい、確認できました。…はい、その点は奥さんにもちゃんと伺いました…。はい、まちがいありません…」
まだ、その報告の途中だった。
運転席のドアの窓をコンコンと叩く者がいた。
見ると、寺島の妻だった。何かを伝えようとしている様子だった。

「すみません、田代室長…。すぐに、かけ直します…」
一旦、電話を切ると、窓ガラスを降ろす。
「どうしました、奥さん？」
「お話し中にすみません。ちょっと、よろしいですか？」
「いいですよ」
菅野は、車の外へ出た。
「何か？」
「あの…、単なる思い過ごしかもしれませんが…」
寺島の妻は、言おうか言うまいか、迷っているようだった。
「何か、ご主人のことで、話したいことがあるんですね？」
「ええ、まあ…」
「奥さん。どんなことでも構いませんから、言ってみて下さい」
「は、はい…。では…。あの日の晩、主人におかしな電話がかかってきたことを思い出したんです」
「あの日の晩とは…？」
「宅配便が送られてきた日です」
「ご主人が亡くなる一週間前の、例の兎の耳の…？」
「はい、そうです。夕飯が終わってテレビを見ていた時でした。主人の携帯に電話がかかって来たんです」
「誰からですか？」
「それがわからないんです。かかってきた相手の番号を見るなり、主人は出ずに切ってしまったんです。動揺しているように見えました。その行動自体も、珍しいことなんですが、そのあとがもっと変だったんです」
「続けてください」
「それから主人は、そわそわしていたかと思うと、携帯を持って庭へ出て行ってしまったんです。そして、そこで誰かと話をしていました」
「ご主人が、その誰かにかけ直して、話していた？」
「はい。おそらくそうです。私には話を聞かれたくない相手だったんだと思います」
「そうですか…。まあ、おかしい行動だと言われれば、そうかもしれませんが…。それだけでは…」
菅野が、そう言いかけた時、
「怒鳴っていたんです。何度も、何度もです！」
寺島の妻が、それを遮るように訴えた。
「聞かれてはまずい話のはずだったのに、あの人は、我を忘れて怒鳴っていたんです！」
彼女が、強く訴えた。
「わ、わかりました、奥さん…。そうなると、確かに普通のことではありませんね」
菅野は、圧倒された。
彼女も必死なのだ。やりきれないのだ。あんな殺され方をした夫の無念を、一刻も早く晴らしたいのだ。その真相を自分も知りたいのだ。
「す、すみません。私まで大きな声をあげてしまって…。でも、どう考えても、あの時の

主人は、普通ではありませんでした…」
「気にしないでください。奥さんのお気持ちは充分に理解しています。私達警察も全力で捜査して、必ずや、ご主人の無念を晴らします。ですから、落ち着いて、思い出してください」
　菅野は手帳を取り出して、訊いた。
「その時、ご主人は、何と怒鳴っていたかわかりましたか？」
「申し訳ありませんが、離れていましたし、はっきりとは…。確か、「かず」という言葉が何回か聞こえました…」
「「かず」…ですか？」
「ええ…。怒鳴り声の中に、何回か混じっていたように聞こえました…」
「人の名前のようにも思えますが、奥さんはその「かず」という物か人物に心当たりはありませんか？」
「いいえ。主人がそう呼んでいる知り合いは、いなかったと思います」
　菅野は、手帳に「かず」、「カズ」と書いてから、？マークを書き添えた。
「どんな話をしていたかわかりましたか？」
「いいえ、言っていた内容までは…。ただ、相手の方は、主人と同世代か、年齢の近い方だとは思えました。そんな感じの話し方だったと思います」
「同世代か、年齢が近い…」
「はい、敬語ではありませんでしたから。少なくとも、年上ではないと思います。あの人は、その点はしっかりとしていましたから…。それも、昨日今日の間柄ではない感じでした」
「どうして、そう思われたんですか？」
「それは…」
　寺島の妻が、その時の印象を頭の中で再確認しながら続けた。
「それは、ずっと、地元の言葉で飾らずに話していたからだと思います。とても日常的な感じで…」
「なるほど。つまり、歳の近い、普段地元で親交のある誰かと話していた…」
「そうですね、そんな印象でした」
「よく、わかりました。では、調べてみることにします。今後も、何か思い出したら、遠慮せずに、言って来てください。どんな、些細なことでも結構ですから」
　そう言って、菅野は手帳をパタンと、閉じた。
　三十分ほどのち、南署に戻った菅野は、すぐにその件を調べに入った。すでに、寺島清隆の携帯の通話記録は取り寄せてあった。
　菅野は、犯行があった一週間前の夜の時間帯のそれを探し出した。夜の八時近くに、まず着信が一件。そして、その三分後に発信が一件、同じ相手との通話が記録されていた。その番号の持ち主を確認した菅野は、あわてて東京の田代へ連絡を入れた。

二十五．弔問客

都内、世田谷区。烏山斎場―。
村井和滋の告別式がしめやかに行われていた。
表向きには、彼の猟奇的な死に方は伏せられ、突然死ということで通されていた。幸い、それは警察番の記者達にも知られることなく、敷地内にマスコミ関係者は皆無だった。
成城署の加藤幸博は、設営された受付所に来る弔問客を観察していた。腕に喪章を巻いて関係者を装い、それと悟られないようにテントの後方に陣取り、訪れる者の記帳の様子をじっと伺っていた。
それは、上司の石塚からの指示だった。
情報を聞き出せそうな人物がいたら、それとなく話を聞くようにと言われていた。この葬儀の場で聞き出せなくても、何らかの情報が得られそうな人物には、弔問客名簿に印をつけておいて、後日聞くようにとも言われていた。
大勢の弔問客の大半は、村井が経営していた工務店の仕事関係の人間ばかりであった。友人関係や親戚縁者用の弔問客の記帳簿には、驚くほど名前が少なかった。亡くなった本人がまだ五十八歳と若い割には、そう言った関係の参列者が少ないと、加藤は感じていた。
加藤は、当たりをつけた数名から上手に話を聞くことができた。
しかし、どれもたいした内容ではなく、犯人につながりそうな重要な話は何ひとつ出てこなかった。仕事関係の聞き取り相手が多かった中で、異色だったのは、本多園子という中年女性だった。彼女は、村井が生前よく顔を出していた新宿の「園（その）」という名のクラブの経営者だった。彼女は、唯一、妻の琴音の親族側に座った人物であった。聞けば、身寄りの少ない琴音に頼まれて彼女の親族側に座ったとのことだった。商売柄、話好きな女性ではあったが、いずれにしても、村井の事件には役に立たない話ばかりであった。
法要が終わり、弔問客達が、それぞれに帰り支度を始めた時だった。
加藤は、大勢の客の中に違和感を覚えるひとりの人物を見つけた。
中年以上の年配者が大半を埋める中で、際立って若く見える男だった。二十代から、上に見てもせいぜい三十代前半という年の頃の男だ。その男だけが、若者が好んで着るようなタイトな作りのダークスーツ姿だった。しかも、こういった場には元来、控えるべきはずのサングラスをかけていた。連れはおらず、一人だけのようだった。
加藤は、吸い寄せられるように、その男の方へ近づいて行った。
男の方も、それに気づいたようだった。
「あの…」加藤が声をかけようとした矢先だった。
サングラスの男が、急にその場から逃げるように、会場の外へ向かって足早に歩き出した。
「ちょっと、君。話をっ！」
そう言いながら、加藤が周りの弔問客の人の波をかき分けて男を追おうとすると、男はとたんに猛スピードで走りだした。
「ま、待てっ！」
加藤も、全力で追いかけた。
サングラスの男の足は速かった。加藤はなかなか追いつけなかった。それどころか、その距離は広がるばかりだった。若い男は、持久力もあるようだった。八百メートルほど走ると、その道は甲州街道にぶつかった。前を走る男は、それを左に曲がった。ちょうど、

バス停にバスが停まっていた。新宿方面へ行くバスだ。サングラスの男は、それに飛び乗った。そのバスは、無情にもすぐに発車した。
「糞っ！」
それを見届けた所で、加藤は力尽きた。
走る力は残っていなかった。ハアハアと大きく呼吸を乱しながら、小さくなるバスを恨めしそうに見つめることしかできなかった。
消沈した加藤は、息を整えながら葬儀場の方へ歩いて戻った。
向こうから、数組の喪服姿の人間が歩いてくる。村井の葬儀を終えた弔問客達だ。それを見た加藤は、まだ、自分にはやるべきことが残っているということに気がついた。
加藤は、一番先頭を歩く組から順番に同じ質問をしていった。
「すみません。伺いたいことがあるのですが…。さっきの村井さんの葬儀場で、サングラスをかけた若い男性を見かけませんでしたか？」
葬儀場に戻る道中、すれ違うすべての帰りの弔問客達に、同じその質問をしていった。そうしながら、葬儀場へ戻っていった。残念ながら、路上での聞き込み相手からは何も得られなかった。だが、加藤は諦めなかった。葬儀場へ戻ると、幸いにも、敷地内にはまだかなりの弔問客が残っていた。
「皆さん、ちょっと聞いてください！」
加藤は、ありったけの大声を出して、弔問客達に向かって呼びかけた。
「ついさっきまでここにいた、サングラスをかけた若い男性を見かけた方は、いらっしゃいませんか？」
それを繰り返し連呼ながら、人の輪の間を縫って歩く。
立ち話に花を咲かせていたほとんどの弔問客達がそれに気づいた。すると、その中から「見た」という人間が名乗り出てきた。しかも、驚いたことに、それは四組もいた。すべて皆、年配者だった。
「どうしました。香典泥棒かなんかですか？」
中の一人が、興味深そうに訊いてきた。
腕に喪章をはめた加藤の尋常ではない様子から、何か差し迫ったことなのだということは彼らにも伝わっていた。
「すみません。今、詳しいことはわかりません…。ただ、そのサングラスの若者は、私が話を聞こうとしたとたんに、走って逃げ去ったのです」
「確かに、それはおかしいですね…」
「はい。ですから、どんなことでも構いませんので、何かあれば伺いたいのです」
彼らに村井の事件の詳細は、明かせなかった。
加藤は、ただあった出来事のありのままを訴えた。それで、充分だった。
「私達は、その若者から声をかけられました」
さっそく、一組目が答えてきた。
「ええっ、向こうから声をかけてきたんですか？」
「はい、そうです」
「で、彼は何と…？」
「皆さんは、村井さんのいわき時代のことをご存知ですか？ と、訊ねられました」

「村井さんの出身のいわき時代のことを…？」
「はい、そうです。私達は皆、村井さんが東京に出てきてからの知り合いですから、知らないと、答えました」
「それだけでしたか。他には、何か訊かれませんでしたか？」
「はい、それだけです。知らないと聞くや否や、その若者は礼を言ってすぐに立ち去りました」
そう言って、その組の皆が顔を見合わせて頷き合った。
「私達も、それとまったく同じことを訊かれましたよ」
別の組の一人が言ってきた。
「皆さんにも、同じことを訊いてきたのですか？」
「はい、そうです。まったく、同じ訊き方でした」
「で、何と…？」
「私達も、こちらの方達と同じでした。皆、村井さんが東京に出てきてからの知り合いなので、知らないと答えました。すると、その若者はすぐに立ち去りました」
「やはり、訊かれたのはそれだけでしたか？」
「はい、それだけです」
加藤が三組目に、声をかけようとすると、先に答えが帰ってきた。
「私達も、まったく同じでしたよ」
さらに、四組目も同じ答えだった。
「つまり、あのサングラスの若者は、ここで次々と同じ質問をして回っていたということですか…？」
「どうやら、そのようですね…」
四組の弔問客達が、顔を見合わせて頷き合った。
「皆さん、すみません。申し遅れました…」
加藤は、胸の内ポケットから警察バッジのついた身分証を皆に向かって見せた。
「私は、成城署の加藤と申します。このたびは、皆さんのご協力に心から感謝します」
その場の皆が驚くのも無理はなかった。
「なんだ、警察の方だったんですか。それならそうと、始めから言ってくだされば…」
「申し訳ありません。慌てていて、うっかり、言いそびれてしまいました」
「あのサングラスの若者が、何かやったのですか？」
「いいえ。さっきお話したとおり、何もわからないのです。ただ、いきなり、走って逃げたものですから、職業柄つい…」
そう言って、加藤は笑顔で頭をかいて見せた。
「なんだ、その程度のことでしたか…」
誰かがそう言って笑うと、その場の緊張感が一気に和らいだ。
「いつでもかまいませんから、何か思い出したら、連絡をお願いします」
最後に、加藤は手帳を渡して、順番に皆の名前と連絡先を書いてもらった。

二十六．幽霊の正体

いわき市街。夜―。
その料理処の部屋は、広い日本庭園の中にあった。
全室が独立した棟の個室になっている為に、いわき南署署長の沖永卓司はよくここを利用していた。客をもてなすのにも、密談をするのにも、もってこいの店だからだ。
その一室で、沖永と菅野は石塚の報告を受けていた。東京にいる田代水丸からの最新の情報だった。科学捜査研究所に持ち込んだ耳の照合と、現地で採取した散弾の分析の結果報告であった。それによって連続猟奇殺人の存在が証明され、正式に警視庁と福島県警との合同捜査が決定した。
大まかな打ち合わせを済ますと、とにかく、今夜はいっ時でもそれを忘れて、双方の親睦を深めようということになった。美味い地酒と魚介類に舌鼓をうちながら、石塚は起こっている事件の難解さを忘れ、しばし、いわきの夜を満喫した。
ほどよく酔ったところで、石塚が用足しに立った。
別棟にあるトイレへ行こうと、備え付けのサンダルを履いて庭に降りた。都会の喧騒では味わえない落ち着いた自然の空間があった。少し離れたトイレまでは数メートルおきに小さな灯篭が建てられていて、最低限の足元の明るさが確保されている。
ほろ酔い気分で、静かな庭をひとり歩く。
ふと、何かの気配を感じた石塚は、そちらの暗がりに目をやった。
「うわわっ！」
石塚は、思わず、大声をあげた。
植え込みの陰に幽霊のような姿を見たからだ。
ぞっ、として、体を硬直させながらも、よく見直すと、それは人間だった。
ひとりの老婆が、植え込みの暗がりの中に立っていた。そして、こちらをじっと見ている。しかし、その気配は人のそれには見えなかった。人間の生気がまったく感じられないからだ。
「あ、あなたは…？」
肝をすえて、訊ねてみるが、まったく反応がない。
「ど、どうされました…？」
もう一度聞くと、
「木舟…」
小さな声で、何かを喋った。
「え…、何ですか…？」
もう一度、訊ねてみると、
「木舟様の祟りじゃ…！」
今度は、はっきりとそう言った。
「木舟様…、祟り…？」
石塚が聞き返すと、老婆はそのまま闇の中へ消えていった。
部屋に戻った石塚は、その話をするしかなかった。顔面が蒼白だと、沖永らに心配されたからだ。
「実は、たった今しがたのことなんですが…」

石塚が、庭で遭遇した話をした。
「ははは…。そういうことですか…」
話を聞いた沖永が、意外にも笑い始めた。
「心配ありませんよ、警部殿。それは、幽霊なんかではありませんよ。おそらくそれは、木舟神社の婆さんですよ」
「木舟神社の…？」
「ええ、そうです。この近くにある神社のことです」
「ああ…、そうなんですか…。神社の…」
「まあ、神社の方ではありませんがね。名前は知りませんが、あの界隈に棲んでいる有名な婆さんです。毎日のように、神社の辺りをうろついているのです」
「それにしても、普通ではありませんでしたが…。まるで、生けるしかばねのような…」
「そう見えるでしょうな。かなり、ボケが入っているようですから…。ただ、普通の老人のボケとは違うかもしれません」
「と、いいますと？」
「私も詳しくは知りませんが、昔、自分の身内に哀しいことがあって、それ以来、ああいう風になってしまったようです」
「いったい、彼女に何があったんですか？」
石塚が関心を持つと、
「君は、その話を聞いたことがあるかね？」
沖永が隣の菅野に訊いた。
「いいえ、ありません」
菅野も、始めて聞く話のようだった。
「そうか。君はまだ若いからな…。ここら辺の年配者でも、もう知っている人間はほとんどいないんだろうな…」
そう言うと、沖永は杯の酒を呷った。
そして、話を続けた。
「ずっとずっと、昔の話です。あの辺りには、ある忌まわしい言い伝えがありました…。その木舟神社というのは、もともとは、漁に出る時の海を鎮める為に造られたと言われています。漁のシーズンに入る前には、漁師や家族が大漁と安全の祈願を行いました。そして、無事にシーズンを終えた時には、必ず海で獲れたものの一部を奉納して感謝の意を表していたのです。しかし、一度だけその奉納ができなかった時があったのです。おそらく、大きな災害かなにかが起こって、それどころではなかったのでしょう。すると、不思議なことにその直後に町の男が一人、行方不明になったのです。それから、奉納を忘れたので小舟様がお怒りになったのだ、という話が誰かれとなく囁かれるようになったのです。それ以来、人が行方知らずになると、小舟様の「神隠し」だとか、「祟り」だということが言われるようになったのです…」
「なるほど、そんな言い伝えがあったのですか。でも、そうすると、あの老婆は、何がきっかけであんな風に…？」
「申し訳ないのですが、その辺りの詳しいことになると、私でもよくは知りません。私の上の世代の連中は、そういった話をあまりしてくれなかったのです。ただ、木舟様との何

かの因縁があって、ああいう風になってしまったようなのですよ」
「そうですか…。きっと、老婆の人生を狂わすような哀しい何かがあったのでしょうね…」
そう言って、石塚は自分の杯を呷った。

二十七．喪服の女

同じ頃。都内、西新宿の大型ホテル。スイートルーム―。
ベッドサイドに座った男のその上で、喪服の着物姿の女が揺さぶられていた。
「ああっ、許してっ、許してっ…！」
女は、男にしがみつきながら、許しを請うように悦び泣いていた。
黒い喪服が、真っ白い女の肌を際立たせていた。それが男に、えも言われぬ興奮と力を与えていた。喪服姿のままの女の体を、男はいつにも増して激しく攻めたてた。
何度も体勢を変えて、女の体を堪能した。女の方も、激しい悦びの鳴き声をあげ続けながら、それに応えていた。女の真っ白い足が様々な形で折れ曲がり、男の体に絡んだ。
やがて、感極まった女の体がベッドの上に崩れ落ちた。
ハアハアと肩で大きく息を切りながら、その余韻に動けないでいた。
男は満足気だった。
「ククッ。相変わらず、お前の体は素晴らしいよ」
そう言って、すでに緩んで開きかかった女の襟元に手を差し込んだ。
「何度抱いても、飽きがこんわ」
豊かな乳房の感触を楽しみながら、揉みしだく。
「あああっ…」
女が、それに応えてくる。
眉間にしわを寄せて、切なく吐息を上げるそのさまが、いやがおうにも男を再び掻き立てる。
「あいつは、こんなに素晴らしいおまえの体をろくに抱きもしなかった。ただ、吊るして痛めつけるだけだ。女盛りに差しかかろうとしているおまえのこの素晴らしい体を…。いかにも、もったいない…」
男はそう言うと、女の着物の襟元を、ばっと大きく左右に開いた。
二つの豊かな乳房が躍り出る。
今度は、両手でそれを鷲づかみにして存分に揉みしだく。
「ククッ。これだけの体を持て余して、おまえもさぞかし淋しかっただろう。これからは、俺が満足させてやるよ」
「で、でも、あなたは…」
「何も心配することはない。おまえには、子供もおらんしな。安心しろ。これからは、この俺が、ずっと面倒を見てやる」
喪服の帯をほどいた男が、女をベッドに押し倒し、再び彼女の体を攻め始めた。
足袋を履いたままの真っ白い女の両足が、宙を舞った。

二十八．白秋の詩

翌日―。

東京、駒沢総合運動公園―。

総合体育館では、フェンシングの日本選手権の決勝ラウンドが行われていた。

その観客席に、田代水丸と五十嵐麻美の姿があった。

出場している警視庁の選手の応援の為である。休日であっても、広報室の職員はこういった試合の応援に駆り出されることが多かった。スポーツ競技の大会の決勝ラウンドは、休日に開催されることが多いからだ。

警視庁の武道やスポーツの代表選手は、ほとんどが機動隊に所属している。例えば、今日のフェンシングや野球は警視庁の第四機動隊の所属である。クレー射撃の選手である鈴木翔英が、広報室に所属しているのは例外的なケースであった。だが、選手の所属がどこであれ、大きな大会で決勝ラウンドまで進出していれば、応援に顔を出さなければならないのも、広報室の仕事の一つであった。

しかし、今日の田代は、いっこうに応援に身が入らなかった。

白熱した試合の状況も、上の空だった。

それどころか、田代は苛立っていた。こうしている間にも、あの耳切りの犯人は、次の獲物を狙おうとしているかもしれないのだ。石塚や菅野の合同チーム達は、それを阻止しようと必死になって捜査に励んでいるのだ。もとはと言えば、この自分が彼らを鼓舞したのだ。それなのに、今の自分は彼らの力になってやれない。そのことが、歯がゆくて仕方がなかった。

だが、田代の本分は事件捜査ではない。警視庁の広報活動である。しかも、その長である。いくら警察本部長の宗方の強い後ろ盾があるといっても、それをおざなりにして他の部署の仕事ばかりをするわけにもいかないのだ。

試合の結果は、幸か不幸か、準決勝で敗退だった。選手達に慰労の言葉をかけてから、昼前には会場を出ることができた。

二人は、公園の中を抜けて駐車場へ向かって歩いた。

「田代室長ったら！」

やっとその声に気付いた田代が見た麻美の顔は、少しふくれっ面になっていた。

「もう、三回も声をかけているんですよ…」

「ごめん、ごめん…。ちょっと、考え事をしていたんだ…」

「今だけじゃないでしょ。試合中もずっとでしたよ。今日の室長は少し変ですよ。応援にも全然、熱が入っていないようだったし…」

「本当に、ごめん…。そうだ、ランチ…。どこにしようか？　御馳走するよ…」

「いいえ。ランチをする前に、すっきりさせておきましょう」

麻美に促されて、田代は園路沿いのベンチに腰かけた。

目の前を散歩の犬を連れた女性が通り過ぎていく。ゆったりとしたその空気感が心地よかった。

「仕事のことなんですね？」

「うん、まあ…」
「室長は、私とは違って、広報活動以外の犯罪捜査も兼任されていますから、話せないこともあるのは承知していますけど、よろしかったら話してみて下さい…」
十歳以上年下ではあったが、こういう時の彼女は心強かった。そして、何ものにも増して心が休まった。長い船旅で疲れ切った船乗りを、優しく迎え入れてくれる母なる港であった。
「ありがとう。じゃあ、遠慮なく話させてもらうことにするよ」
田代は、彼女の申し入れを素直に受けることにした。
「今週の始めに、成城署の石塚さんから電話が入ったあの件なんだ…」
田代は、この一週間に起こったすべてを麻美に説明した。
村井の地下室の隠し棚の事も、艶めかしい色香を漂わるその妻のことも、包み隠さずにすべて話した。
麻美は、相槌を交えながら、田代の一言一句を漏らさずに聞いてくれた。
「それは、大変でしたね…。福島の現場で頑張っている石塚さんや県警の皆さん達に申し訳ない気持ちで一杯なんですね。それが、頭から離れずに気になって仕方がなかったんですね…」
「うん。そうなんだ。そして、切り取られた寺島さんの耳の次の行方が気になって仕方がないんだ。こうしている間にもホシの奴はどこかで…」
悔しそうに空を見上げながら、田代は長髪をかき上げた。
「責任感が強い、田代室長らしいです。また、何かの形で、福島県警の皆さんや石塚さんのお力になれるといいですね…」
「ありがとう。君に話して、かなり気が楽になったよ」
「そうだと、嬉しいです…」
麻美が、少しはにかみながら笑顔を返した。
「それにしても、ハサミとか耳とか、兎だなんて…、まるで、白秋の詩(うた)みたいですね…。ほほほ…」
役目を終えて自分もすっきりしたのか、彼女が今度は、大きく晴れやかに笑った。
「えっ…。その…、白秋のって、何のことかな？」
田代が訊き返してきた。
「北原白秋ですよ…。彼の童謡に、そういうのがあったじゃないですか…」
「いや、知らないな…」
「あら、やだ。ごめんなさい。てっきり、室長も御存知かと…。でも、けっこう有名な童謡ですよ。白秋は詩人であり、童謡作家でもあったから…」
「それは、どんな童謡なの？」
「確か…、蟹が床屋さんで、お客さんの兎の耳を切っちゃうって言う…。私も、よくは覚えていないですけど…」
「蟹…、兎…。耳を…切る？」
その言葉のすべてに、田代が過敏に反応した。
「五十嵐君。その童謡のタイトルは？」
「ごめんなさい、それも覚えていないわ…。でも、本当に、知っている人はけっこういる

はずですよ」
「何とか、思い出してくれないかな？」
「気になるんですね？」
「うん…。何だか、とても…」
その時、彼女は警察仲間の話を思い出していた。
田代水丸の特異な能力のことを。犯罪捜査の時に発揮される、彼の人知を超えた嗅覚のことを。そんな彼が、気になることがあるというのであれば、協力しなければならないと彼女は考えた。
「しょうがないですね…。それじゃあ、ランチは広尾にしましょう」
「広尾…。かまわないけど、急にどうして…？」
「行けば、わかりますよ。ふふふ…」
そう笑って言うと、ベンチを立った麻美が、駐車場の方へどんどん歩き始めた。

二十九．蟹と兎

広尾駅にほど近い有栖川記念公園の中に、都立中央図書館があった。
二人は、三階の奥にある文学のコーナーで、それを探した。
「これだわ。有名な作品だから、きっとこの全集の中にありますよ。どこかに、座って探しましょう」
五十嵐麻美が探し出したのは、分厚い北原白秋の「童謡全集」だった。
二人は、それを抱えて五階へ移動した。
「ちょうどいい、あそこで何か食べながら見るとしよう」
その窓際の一角は、有栖川公園を見下ろしながら軽食が食べられるちょっとしたカフェテリアになっていた。
注文を終えると、麻美はさっそく目次を開いて目指す作品を探し始めた。
彼女は、すぐにそれを見つけた。
「あっ…。たぶん、これです！」
そのページを開いてみて、もう一度彼女が声をあげた。
「やっぱり、これだわ。まちがいない…。この歌詞です！」
興奮した面持ちで、そのページを開いたまま田代の方へ差し出す。
「ありがとう…。タイトルは、「あわて床屋」か…」
田代は、声を出してそれを読み始めた。

春は　早うから　川辺の葦(あし)に
カニが店出し　床屋でござる
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
小ガニぶつぶつ　石鹸(シャボン)をとかし
おやじ自慢で　はさみを鳴らす
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ

そこへ兎(うさぎ)が　お客にござる
どうぞ急いで　髪刈っておくれ
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
兎ァ　気がせく　蟹ァ　あわてるし
早く早くと　客ァ　つめこむし
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
じゃまなお耳は　ぴょこぴょこするし
そこであわてて　チョンと切り落とす
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
兎ァ　おこるし　蟹ァ　恥ヲ　かくし
しかた　なくなく　穴へと逃げる
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ
しかた　なくなく　穴へと逃げる
チョッキン　チョッキン　チョッキンナ

「これだ…。犯人は、これを引用したんだ。まちがいない！」
田代の嗅覚は、自らそう直感していた。
「だが…、何故、この童謡なんだ…。蟹は…、犯人は、これを使って何をしようとしているんだ…？」
田代水丸は、窓の外の公園の景色を呆然と見ながら何度も自問していた。

三十．メッセージ

福島県、いわき南署の一室。
田代水丸は、白秋のその童謡のコピーと共に、再びいわき市へ入っていた。石塚達にそれを見てもらう為だ。
「ハサミで、兎の耳が切られたか…。驚いたなぁ、寺島氏の所に送り付けられた「あれ」と同じことが登場していますね。そして、この童謡の歌詞は、今回の一連の事件を暗示しているようにも見えます」
それを読んだ石塚が、大きく頷いた。
「そうなんです…。そして、今回の二つの事件に共通して感じるのは、そこに犯人の強いメッセージが込められている、という点です。そう考えると、村井邸の地下室の時も、寺島氏のビニールハウスの時も共通して気になる点が浮かび上がってくるのです」
「それは、何でしょうか？」
「犯人が、何故、わざわざ現場にハサミを残していったのか、という点です。最初の村井氏の時は、慌てていて持ち帰るのを忘れてしまったとも考えられたでしょう。しかし、それが、寺島氏の時も、つまり、二度目も、ということになれば、忘れたのではなく、わざと置いて行ったということになるんです。そうとでも考えなければ、危険を冒して証拠になるようなものをわざわざ二度も現場に残していかないはずです」

「確かに、そうなれば、わざと残して行ったと考えるべきですね…。それについては、私も同感です」
「ええ。それと、もうひとつ…。石塚さんは、ビニールハウスでの寺島氏の遺体の付着物のことを憶えていらっしゃいますか？」
「付着物…。そんなものがありましたっけ…？」
「口の周りや、顎の辺りの…」
「ああ…、思い出しました。何か、テカっていたような…、あれですか？」
「はい、あれです」
「あれが、何か…？」
「あれは、シェービング・クリームが乾いた痕でした」
「シェービング・クリームって、髭そりの時の…？」
「はい、それです」
「それが、何か…？」
「実は、寺島氏にだけではなく、村井氏の死体にも同じように付着していたのです」
それを聞いた時、石塚は、検分の時にリクライニング・シートの村井の顔の辺りを綿棒で擦っている田代の姿を思い出した。
「そうですか。しかし、男ならシェービング・クリームの痕は、日常的に誰にあっても不思議ではありませんよね…？」
「勿論です。しかし、普通は髭をそり終われば、タオルで拭くか、水で洗い落としますよね？」
「まあ、そのままにしておく人はいないでしょうね…」
「あの多量の付着量は、とてもそうしたようには見えませんでした。しかも、お二人そろってです」
「室長は、いったい…」
石塚が、声を詰まらせた。
田代が何故そこまで、それにこだわっているのかが、まだ彼には理解ができなかった。しかし、田代水丸の「あれ」が、そうさせているのだということは察しがついた。
犯罪嗅覚の覚醒だ。
「回りくどい説明になっていますが、もう少し辛抱して聞いてください」
「勿論です。田代室長、続けて下さい！」
改めて、石塚が頼んだ。
「では…。結論から言うと、二人の顔や喉に付着していたシェービング・クリームはまったく同一のものでした。それについては、科学捜査研究所の廣瀬さんに、随分とご苦労をかけてしまいました。しかし、彼は、両方がまったく同じ成分で、同じ製品だということを裏付けてくれました」
「そうなると、どうなるのですか…？」
「村井氏のお宅の洗面所には、髭そり用のカミソリはありませんでした。従って、カミソリを使う時に必要なシェービング・クリームもありませんでした。あったのは、電動式のシェーバーだけです。彼は、そちらを使うタイプなんです。それについては、先日僕が直接村井氏のお宅へ行って確認してきました。片や、寺島氏についても先日、菅野さんにお

願いして、同じことを調べてきてもらいました。そして、やはり、寺島氏も髭そりはカミソリを使わないシェーバー派だということがわかりました。つまり、二人とも、日常的にはシェービング・クリームとはまったく縁がないはずなんです」
「続けてください…」
まだ、石塚には話の先がまったく予想できていなかった。
「科学捜査研究所の廣瀬さんには、更に、付着していたそのシェービング・クリームのタイプが、ジェル系なのか、それともフォーム系なのかも調べていただきました」
「そんなことまで…、それは必要なことだったんですか…？」
「必要どころか、一番大切なことだったんです。結果から言うと、それはフォーム系のタイプでした」
「フォーム系のタイプというと、シューッと泡の出るあれですよね…？」
そう言いかけて、石塚がハッとした。
「あっ、泡だっ！」
石塚は思わず叫んだ。
「その通りです。それで、この童謡を読んでわかったんです。シェービング・クリーム…、つまり、泡を、犯人がわざわざ村井氏と寺島氏の二人に吹きかけていったのは…。そして、ハサミを犯行現場にわざと残していったのは、何かのメッセージであると…。犯人は、誰かに何かを訴えようとしているんだと。そして、おそらくそれは、「蟹」に関係のあることでしょう」
「わざと現場に残していったのが泡とハサミ…。これは、まさしく蟹ですね…。まちがいなく、蟹のメッセージだ…。そして、送り付けられた、切られた兎の耳…。そうなれば、すべてがこの童謡の歌詞とまったく同じだ。そうかぁ…！」
石塚が、頭をグルグルと掻いた。
「それにしても、よく白秋のこの童謡にたどり着きましたね」
「きっかけは、部下の五十嵐君のひと言からです。彼女から、白秋の童謡の中の「蟹」という言葉を聞いた時に、何か引っかかるものを感じたんです。後で思い出したんですが、それは、寺島氏に送られてきた不審な冷凍宅配便の内容欄に書かれていた「蟹」という言葉だったんです」
「ああ、あれですか。そういえば、あれも蟹でしたね。確かに、蟹だった…。なるほど、そうかぁ。やはりあれも、犯人からのメッセージだったんだ…。そうか、そうだったのかぁ！」
石塚は、感動したようにそう言いながら、何度も何度も頷いていた。
「石塚さん。どうか、遠慮なく言って下さい。これは、僕の考え過ぎでしょうか…。「蟹」というキーワードは、単なる、偶然の積み重ねだったんでしょうか…？」
「いや…、偶然なんかではありませんよ。ここまで、蟹や兎が続けば、もはや、偶然というレベルを完全に超えていますよ。それに、私はいままで室長のその嗅覚で、それこそ何度も救われてきました。あなたが、この童謡から何かを感じ取られたのであれば、仮に違っていたとしても、それだけで、まちがいなく一考に値しますよ！」
石塚は力強く言った。
そして、彼は心底、感激していた。

今回のような、田代水丸の人間離れした犯罪への洞察力、着眼力に対してではない。それにはもう、慣れっこになっていた。「犯罪嗅覚」を持つ彼にとって、それらは特別なことではない。彼の持つその第六感は、普通の人間の五感と同じ機能なのだ。
石塚は、田代の気持ちが嬉しかったのだ。
離れていても、この事件のことを気にしてくれていたこと、そして、実際にたった一人で動いてくれていたこと、そのことに対して感激していたのだ。

三十一・存在する地名

「田代室長！」
そこへ、県警の菅野が入ってきた。
田代が東京から戻って来たと聞いて、駆けつけたのだ。
「やあ、菅野さん。ご苦労様です。この前は、寺島氏の髭そりの確認をありがとうございました」
「とんでもありません。あれで何かのお役にたてたのですか？」
「勿論です。とても、役に立ちましたよ」
田代は石塚と顔を見合わせて微笑んだ。
「それについては、これからまとめてお話しします」
「わかりました。そういえば、室長は、何か事案のヒントになりそうなものを手に入れて、ここへ持ってこられたとか…？」
「いやいや、ヒントというのには、あまりにも唐突の感もありますが。妙に、気になったものですから…。これです…」
そう言って、田代が菅野に例のコピーを手渡した。
「ほう、北原白秋作詞の…」
読んでいくうちに、菅野の顔つきが変わっていった。
「兎の耳が切られる…。ああっ、これはっ…！」
「ええ、そうです。寺島氏のお宅に届いた不審な宅配物と同じことが、その中に登場しているのです」
「それにしても、よく、こんな童謡の存在に気づかれましたね。さすがは、田代室長殿です…」
菅野が、石塚と同じ感想を漏らした。
「ははは…、ありがとうございます。でも、それは、偶然の産物なんですよ。ところで、寺島氏の所へ送られてきたその切られた兎の耳ですが、私はそれと同じものが村井氏の所にも送られていたのではないかと思っています」
「村井氏の所にも？」
石塚と菅野が揃って訊いた。
「ええ…。犯人の今までの行動パターンから察するに、そう考えるのが自然だと思います。今思えば、あれは犯人からの、第一のメッセージだったのでしょう。つまり、犯人は、送り主の欄ではなく、内容欄に書かれた名称で自らを名乗っていたのです。すなわち、「蟹」

です！」
「蟹が、名前かぁ…！」
「ええ…。そして、二つの宅配が同じ日に一緒に配送に出されているとしたら、二人の所へ着いたのも同じ日…。そして、そのメッセージを受け取った村井氏が、慌てて寺島氏に電話をかけたのです」
「あっ…。あの時の電話は…？」
菅野が、寺島の妻の話を思い出した。
「そうです。あの電話です。あなたが、寺島氏の髭そりの確認に行った時に、奥さんから聞いたあの電話のやり取りです」
後に調べた寺島の通話記録によると、あの日の晩、寺島清隆が何度も怒鳴っていた電話の相手は村井和滋だった。
あの時、寺島が何度か言っていた「カズ」とは、村井和滋のことだったのだ。
「だとすれば、寺島氏と村井氏との間にはまちがいなく、共通した「何か」があるということですね？」
「ええ、まちがいなく…。奥さんにも知られてはまずい、そして、我を忘れて怒鳴ってしまうような、ひっ迫した「何か」があるはずです」
「そうなると、まだ、この歌詞の中に、見落としている重要なキーワードが隠れているかもしれませんね…」
菅野は、もう一度真剣に読み返した。そして、
「あれ…？」
再び、菅野の顔つきが変わった。
「確か、どこかで…」
何かを思い出しているような素振りであった。
「菅野さん、その歌詞の中に、まだ何か…？」
「あっ、思い出した！」
菅野が叫んだ。
「何を、思い出したんですか？」
「ちょっと、待っていてください！」
そう言って、いったん席を外した菅野は、すぐに戻ってきた。その手には、クリップでとめられた書類の束が握られていた。
「今回の捜査資料です。この中にある、村井氏と寺島氏の…。ここを見てください」
はたして、その記述の中に、「蟹打」という文字があった。
「蟹打だ…！ 蟹だ、また、蟹が出てきた！」
思わず、石塚が声をあげた。
「蟹打は、実際にいわき市内に存在する地名です。その蟹打は、二人が、若い時から頻繁に狩猟に行っていた場所ですよ。しかも、兎です。兎狩りです。そこには、この童謡の中にあるように、川や沢もあります！」
「そうなると、この歌詞には、今回の一連の事件のキーワードがすべて入っていますね」
「間違いないですよ。ホシは、この歌詞を引用して事に及んでいますよ！」
三人が、顔を合わせて頷いた。

「であれば、ホシは、この童謡で何を訴えようとしていたのか、ということだ…」
「たとえば、この蟹打で、以前、何かがあったのかもしれませんね。村井氏と寺島氏が関係する何かが…。菅野さん、思い当たるようなことはありませんか？」
田代と石塚が問いかけた。
「残念ながら、私には思い浮かびません。ひょっとしたら、私が県警に入るよりも以前に、そこで何かがあったのかもしれません…」
頼りの菅野には、その蟹打という地名に関する心当たりがなかった。だが、
「でも…、あの人なら、何か知っているかもしれません」
菅野は、携帯電話を取り出した。

三十二．防犯カメラ

都内、渋谷。公園通り界隈―。
連絡を受けた加藤幸博は、目指すその店舗へ入った。
そこは、ＤＩＹを専門に扱う大型店舗であった。
成城署の応援の職員から有力な情報が入ったのだ。その職員は、該当するハサミが卸された都内中の取り扱い店に電話をかけて調べてくれていた。村井や寺島の現場に残されたのと同型の大型バサミを扱う店は数多くあった。通常なら、雲をつかむような聞き取り捜査だった。だが、「十日前後前に、三つ以上をまとめて買った一般客」、という条件を田代がつけてくれたおかげで、聴取の範囲を通常よりもずっと絞り込むことができたのだ。
田代水丸の嗅覚のそれは、警察のプロファイリングをも凌駕していた。そして、この渋谷の店舗が、その条件にヒットしたのだ。
加藤は、他の店員に訊きながら、目撃情報を持つ店員を探した。その店員は、五階のアウト・ドア関連のコーナーを担当していた。
「成城署の加藤です。このたびは、ご協力ありがとうございます」
「ああ、例の大型バサミの…」
「はい。さっそくですが、その時のお客さんのことを憶えておいでですか？」
「ええ、はっきりと」
「そうですか。でも、十日ほども前なのに、よく覚えていらっしゃいましたね？」
「正確には、十一日前の午後です。その日の僕は遅番でしたから。おそらく、午後の三時前後だったと思いますよ」
「何故、そこまで覚えていらっしゃるんですか？」
「まず、買ったのが、三つという数だったからですよ。ここへ来るお客さんは、一般の方とお店を経営している方の両方です。一般の方は、普通、こんな特別なハサミは一つしか買いません。家庭に一つあれば、充分ですからね…。逆に、業務用に買う方、例えば焼き肉店の経営をされている方は、こんな少ない数では買われません。十個、二十個という単位です。つまり、三つと言うのは、中途半端すぎるんですよ」
「なるほど。そう考えると、確かに、中途半端な数ですね…。他にもまだ、覚えていた理由があるんですか？」

「はい。そのお客さんは、サングラスをしていましたから…」
「サングラス…？」
加藤は、それに過敏に反応した。
「ええ。店内なのに、ずっと…。だから、印象に残っていたんです」
「さっそくで、申し訳ありません。この階の防犯カメラの記録を拝見したいのですが、その十一日前のものは残っているでしょうか…？」
「ははは…。刑事さん、その点は心配ありませんよ。この店舗では、その防犯カメラそのものも商品として取り扱っていますからね。当然、この建物に設置しているものは最新式のタイプです。十一日どころか、一か月前まで遡れますよ。勿論、普通の店で使っているような不鮮明な記録方法ではなく、ＨＤＤ方式です。はっきりとしたデジタル画像で見ることができますよ」
「そいつは、ありがたい。すぐにでも、見せてください！」
加藤は、顔を紅潮させ、強い口調で頼んだ。
店員は、保安室まで案内してくれた。
室内には、各階ごとのカメラと繋がっている七台のモニターが並んでいた。各階には八台のカメラが設置してあり、四等分されたモニターが交互にそれを映し出していた。その内訳は、商品陳列棚用が六つで、あとはレジ用とトイレ用だった。
店員は、一台のノートパソコンをＨＤＤに繋いで、該当する十一日前の午後の時間帯を調べ始めた。店員が言うように、デジタル画像は各々を鮮明に映し出していた。画面の右下に小さく写る日付や時間の並んだ十桁の数字が、店員の早送りや巻き戻しの操作に合わせて、せわしなく行ったり来たりする。
「あっ…、これだ！」
始めに店員が見つけたのは、ハサミの棚を物色する男の姿だった。それを部分拡大して見せる。
「この男性ですよ」
と、店員が言うものの、天井からのカメラの視線は、その男の頭と背中しか映していない。
「この角度では、顔が映っていませんね…」
加藤がぼやくように言った。
「ははは…。あくまでも、これは、お客さんの行動を監視する為のものですからね。顔は二の次です。カメラの角度の反対側から歩いてくれれば、顔は映りません。でも、大丈夫ですよ。通路や棚のカメラでは映らなくても、レジの方のカメラには、必ずお客さんの顔は映るようにしてありますから…」
そう言って、店員がレジのカメラのモニターを早送りした。
じきに、その男がレジにやって来た。はたして、
「ほら、この男性ですよ。はっきりと、顔が映っているでしょう？」
店員が、誇らしげに言った。
「す、すみません…。もうちょっと、顔の部分を拡大できますか？」
加藤は、それを確実に確認したかった。
「勿論、楽勝ですよ」

この時すでに、加藤には店員のその言葉は耳に入っていなかった。頭の中は、忘れもしないあの男の顔のことで一杯だった。
サングラスをかけたその客の顔が拡大された。
「ああっ、やっぱり！」
加藤は、そう叫ばざるを得なかった。

三十三．元刑事

その人物の自宅は、いわき南署から十五分ほど走った住宅街の中にあった。
「山崎さん。突然で、すみません」
「ひさしぶりだな、菅野君。まあ、入れ」
山崎哲朗は、菅野の先輩格に当たる元刑事で、今は定年して隠居生活を送っていた。
三人は、時間をかけて事件の経過説明をおこなった。山崎の方が、詳細な説明を求めてきたからだ。
「村井、寺島…、それに、蟹打ですか…」
三人の長い説明を聞き終わった山崎は、タバコに火をつけると、深く吸い込み、そして、ゆっくりと吐き出した。
「山崎さん。やはり、何か、ご存じなんですね？」
菅野は、山崎のその態度でそう確信した。
「うん…。ご存知なんていう軽い言葉ではすまないほど、よく知っている…。刑事から足を洗って十年以上経つが、忘れようにも忘れられないさ。私の、長い刑事人生の中で、唯一の汚点だからね…」
「唯一の汚点、ですか…？」
石塚が、聞き直した。
「ええ…。私は以前、あるどうしようもないしがらみの圧力に屈して、捜査に蓋をしてしまったことがあるのです。つまり、闇に葬ってしまったのです」
もう一度、タバコの煙を吐くと、山崎が重い口を開いた。
「村井、寺島の他に、あともう二人、親しい狩猟の仲間がいたんです…」
「それは、誰ですか？」
「一人は、君もよく知っている小宮山蓮作だよ」
「えっ。まさか、あの国会議員の…」
その名前を聞いた菅野が、驚いた。
「そうだ。あの小宮山一族の、小宮山だよ」
「それは、知りませんでした。それほどの大物なのに、今回の捜査線上には、まったく名前が絡んできていませんでした…」
「そうだろうな。そのはずだよ…」
山崎が、意味深な苦笑いをした。
「では…、狩猟仲間の、もう一人の方は…？」
「もう一人は、森川賢治だ…」

「森川…、賢治…。こっちは、始めて聞く名前ですね…」
「そりゃそうだろう。もう、二十年以上も前から消えちまっているからな…」
「消えちまっているって、行方不明ってことですか？」
「ああ、そうだ…」
「でも、それは、変ですね…」
菅野が、首をひねった。
「行方不明者なら、僕が知っていてもおかしくないようなものですが…。それについては、署内では何の引継ぎもなかったと思いますよ…」
「そこなんだよ、菅野君。そこが、問題なんだよ！」
山崎が、強い口調で言った。
「山崎さん。それは、どういう意味ですか？」
そう訊ねる菅野に代わって、田代が山崎に訊きなおした。
「それが、さっき山崎さんがおっしゃった「捜査に蓋をした」ということに何か関係するのですね？」
「その通りです。しかも、それだけではありません。更に、その一年半後に同じように失踪した森川さんの妻の美千代さんの件も、ろくな捜査をしないまま打ち切ってしまったのです。封印してしまったのです…」
「ということは、一年半のうちに、一組の夫婦がたて続けに行方不明になったってことですか？」
「ええ。そういうことです。極めて異常なことです。しかし、それでも、何もせずにそのまま封印してしまったのです」
山崎が、無念の表情を浮かべながらうなだれた。
「いったい、何故、そんなことを…」
田代と石塚が顔を見合わせた。
「これからお話しすることは、都会で捜査にあたるお二人には理解できないことかもしれません。しかし、これは昔、このいわきの地で実際にあったことなのです…」
山崎は、辛そうだった。
だが、自分の気持ちに鞭打つように、話し始めた。
「今から、半世紀ほど前のこのいわきは、仙台に次ぐ東北第二の大きな町として栄えていました。本州で唯一、しかも東京に一番近い石炭産業があったからです。しかし、高度成長の時代に入ると、エネルギーが石炭から石油に代わっていった為に、この町は徐々に活気を失っていきました。そして、昭和五十一年には、ついに最後の炭鉱が閉鎖され、町は見るも無残に衰退の一途をたどっていきました。あれほど繁栄を誇った町が、死ぬ瀬戸際まで追い込まれました。それを救ったのが、当時、地元選出の国会議員だった小宮山蓮造だったのです…」
「その方が、蓮作氏の父親ですね？」
「そうです…。小宮山一族は、代々この地で政治家を生業にする家系でした。中でも、父の蓮造は、とても政治力のある男でした。そして、このいわきの救世主でした。彼は、石炭に代わる新しい産業の育成が急務だった時、いわきの温泉資源に目を付け、南洋リゾート・スパという大型商業施設の建設を中心とした町の観光化に尽力しました。それを実現

させる為に、国の補助金を次から次へと獲得してきたのです。それだけではありません。それが軌道に乗ると、今度は更に東京からの集客力を高める為に、とうとう高速自動車道まで引っ張って来たんです」
「あの常磐道をいわきに通したのは…？」
「そうです。小宮山蓮造の力のおかげです。彼の剛腕ぶりは、それにとどまりませんでした。彼は、大型の箱モノが建設できる補助金を、その後もどんどん町に持って来てくれました。そして、美術館、大型水族館と、次から次へと観光施設を造っては、当てていきました。そんな彼のおかげで、県内県外からの観光客が年々増え続け、町は完全に生き返ったのです。当然のごとく、町の誰もが彼に感謝していました。そういう彼の為なら、どんな協力でも惜しまないという風潮になっていました。そんな最中に、あの事件が起きたのです」
「森川賢治氏の失踪ですね…？」
田代が確認した。
「はい、その通りです。ある日、狩猟に行ってくると言って家を出たきり、二度と戻りませんでした」
「一人で、狩猟に？」
「表向きには、そうなっています…。しかし、それまでに、たった一人で狩猟に出たというようなことは一度もなかったそうです」
「つまり、普通なら、いつもの仲間達と一緒だったはずだ、ということですね？」
「はい…。しかし、そのいつもの仲間達、即ち、村井、寺島、そして、小宮山の三人はそろいもそろって、自分達は一緒ではなかったと言うのです」
「では、森川氏には個人的に失踪するような理由はあったのですか？」
「それが、まったくなかったのです。ですが、他にこれといった手がかりもなく、結局、署内ではしばらく様子を見ようということになったのです。しかし、奥さんの美千代さんはおさまりませんでした。毎日のように署の方へやってきては、捜査の継続を訴えたのです。夫は、絶対に黙って消えるようなことはしない、と。必ず、何かに巻き込まれているのだ、と涙を流して訴えてきたのです。そこで、私はもう一度調べてみることにしたのです。実際に、借金や仕事上のトラブル、悩み、そして、誰かとのいさかい、病歴、等々、漏らさずにすべて調べ尽くしました。が、まったくと言っていいほど失踪をするような理由は見当たりませんでした。かといって、それ以上のこともわかりませんでした。しかし、日が経つにつれ、だんだんとある事に気づいたのです…」
「その、ある事、とは？」
「例の仲間の三人が、あの一件以来、急に付き合いをやめてしまったのです。森川さんの失踪を境に、まったくと言っていいほど顔を合わせなくなったのです。毎週のように会っては、酒を酌み交わしていた幼馴染の三人がです…。私は、そこに、「何か」を感じ取りました。あまりにも、不自然でした…」
「単なる、仲たがいでは？」
「いいえ、その逆だと思いました。何かの「秘密」を共有しているが故に、意識的に疎遠状態にしていた。あるいは、そうせざるを得なかったのだと感じました」
「確かに、そうであれば、寺島氏が村井氏からの電話を奥さんに隠そうとしたことにも合

点がいきますね」
　菅野が納得した。
「その一件以来、意識的に付き合いをやめたということは、つまり、森川氏の失踪に、その三人が関係していたと、おっしゃりたいのですか？」
　田代が、確認するように山崎に訊いた。
「ええ、そう言うことです。関係とまでは行かなくとも、少なくとも、失踪の何かを知っているのではないかと思いました。しかし、そこまででした。思わぬ形で、その先を調べることに幕を引かねばならなくなってしまいました」
「そこまで考えていて、いったいどうしてですか。何があったのですか？」
「美千代さんが…」
　そこで、山崎が一瞬声を詰まらせた。
「奥さんの美千代さんが、もう、調べなくていい、と言って来たのです。あれほど、調べてくれと熱心に頼んできていた奥さんが、急に手のひらを返したようにそう言って来たのです」
「ええっ、何故ですか？」
　聞かされた三人が、一様に驚いた。
「しばらくして、町の噂で、その理由がわかりました。奥さんは、小宮山蓮作の愛人になっていたのです。調べてみると、それは事実でした。私自身も、後日、彼女の自宅に蓮作の車が置いてあるのをこの目で確認しました。この辺りでは珍しい大型の外車でしたから、遠目でもすぐにわかりました…」
「そんな…！」
　一同は、耳を疑った。
　そこで、話はいったん止まってしまった。当時の山崎刑事の落胆ぶりが、手に取るように伝わってきていた。
「奥さんには、まだ幼い子供達がいましたから、生活の為にそうしたのだろうというのが、町の者の大方の見方でした。小宮山蓮作は、そう言う点では申し分がないほど裕福でしたからね。始めは、私もそう思っていました。奥さんは、器量の良い方でしたし…」
「しかし、さっきのお話ですと、その奥さんは一年半後に行方不明になったということですが…」
「はい、そうなのです。やはり、何の前触れもなく、突然のことでした。奥さんは、消えてしまいました。当然、私はそれを調べようとしました。ですが…」
　山崎は、前にも増して無念そうに続けた。
「まさに、取りかかろうとしたその矢先に、署長室に呼び出されました。部屋には、当時の私の上司と、何と現役の市長までがいました。そして、その場で奥さんの件は金輪際、調べないようにと、念を押されました…」
「何と…、そんなことが…」
「続けるなら、警察を辞めろ、という意味でした。それどころか、警察全体を敵に回すことになるぞ、という無言の圧力でした。情けないことに、私は…、私は、抗えませんでした…。以来、このふたつの失踪の件は、誰も口にすることはなくなりました。闇に葬られたのです…」

それを話しきると、山崎が震える手で、新しいタバコに火をつけた。
大きくため息をつくように煙を吐き出す。それを見ていた三人には、その様子が、長年一人で抱えていた大きな苦悩を一気に吐き出したように映った。
「あっ！」
菅野が、急に叫んだ。
「ひょっとして、石塚警部が遭遇したあの老婆が…？」
菅野は、一昨日の夜の料理処のことを思い出した。
「例の、子舟神社の祟りの…？」
石塚も同調する。
「それは、いったい何の話ですか？」
田代だけは、その話を知らなかった。
石塚と菅野が、交互にその夜の出来事を説明した。
田代は、やっと菅野達が言いたいことを理解した。
「そうですか、そんなことが…。つまり、その老婆は、森川夫婦の連続失踪に関係があるかもしれないと思ったんですね？」
「はい、そうです。それこそまさに、言い伝えの、子舟神社の神隠しそのものだと思いますが…」
菅野がそう田代に答えると、
「その通りだよ、菅野君」
黙って聞いていた山崎が、ポツンと言った。
「その婆さんが、森川賢治の実の母親ですよ…」
「は、母親ですか…？」
「そうです。森川佐和江さんです…」
石塚達は、驚きを隠せなかった。
「二十五年前に、何も告げずに自分の前から突然消えてしまった息子の母親です…。彼女も、妻の美千代さん同様に、毎日のように署の方へやってきては、捜査の継続を訴えたのです。親孝行な息子が、絶対に自分に黙って消えるようなことはしない、と…。必ず、何かに巻き込まれているのだ、と…」
「しかし、例の圧力で、警察はろくに相手にしてくれなかった…」
石塚が、山崎に代わってその続きを話した。
「そのうちに、頼りにしていた妻の美千代さんも自分から離れて、小宮山蓮作の元へ走ってしまった。おまけに、一年半後には、その美千代すらも消えてしまった…」
同じように、田代が続けた。
「自分の周りから、頼れる人間が次々に消えていって、とうとう一人きりになってしまった。町の誰もが、あろうことか、警察ですら、その件を取り合わない。町全体が、敵になってしまった。そして、精神を犯されていったのですね…」
最後に、菅野が締めくくった。
「その通りです。森川の母親の佐和江さんは、今の署長の沖永ですら詳しく知らされることのなかった当時の隠ぺい工作の犠牲者だったのですよ」
山崎が、また深くため息をついた。

「確かにそういえば、あの時も沖永署長さんは、その辺りの詳しいことになると自分の上の世代の連中は、そういった話をあまりしてくれなかったと、おっしゃっていました」
石塚は、それを思い出していた。
「そうか…。あの老婆は…。そういうことだったのか…」
事実を知った石塚も、いたたまれない気持ちになった。
そこで、話が完全に止まってしまった。

三十四．三人の秘密

「山崎さん…」
田代が、口を開いた。
「胸中は、お察しします。触れられたくない話だとは思います。知らぬこととはいえ、結果的にあなたに、不快な出来事を思い出させてしまいました。しかし、これは連続殺人にかかわる話です。まだ、解決しておりません。しかも、また誰か、犠牲者が出てしまうかもしれないのです。我々は、何としても、それを阻止しなければなりません。ですから、もう少しお話しをしていただけませんか？」
「お願いします。山崎さん！」
石塚と菅野が、そろって頭を下げた。
山崎は腕を組んで、目を閉じたままだった。それを待つだけの三人には、山崎の心の中に去来するものの大きさはわからない。だが、それが四半世紀にもわたって彼を苦しめ続けてきた大きな苦悩であろうことだけは想像に難くなかった。そのまま、沈黙の時間が続いた。
「わかりました…」
やっと、彼が目を開いた。
「…というよりも、むしろ、私の方からお願いします。自分の為にも、お話しますので、どうか、皆さんの捜査に役立ててください」
そう言った彼の目には、力が戻っていた。
「ありがとうございます。お話し下さい」
再び、山崎が話し始めた。
「奥さんの失踪の隠ぺいを指示した発信源は、ズバリ、蓮造だったと思います」
「小宮山蓮造…？」
「はい。何故なら、市長も、署長も、蓮造の子飼いの手下だったからです。いや、正確に言うと、その二人に限らずこのいわきの主だった会社や役所の立場のある人間は、皆何かの形で蓮造の息のかかった者ばかりと言っていいでしょう。当時のこの町は、文字通り小宮山の王国だったのです。言い代えれば、小宮山蓮造自身が、この町の法律だったのです。かといって、蓮造が、暴君だったのかと言えば、そうではありませんでした。よくいるような町の独裁者ではありませんでした。純粋に町が必要としていた人間だったからこそ、皆、彼に従ってきたのです。先ほども言いましたように、いったん地盤沈下し、生きるか死ぬかの瀬戸際だったこの町にとって、高速道路を持ってこれる、新しい産業、箱モノの

補助金を持ってこれる蓮造のような力のある政治家が、どうしても必要だったのです。だから、彼を守る為に皆は動いたのです。当時のこの町を仕切る連中は、小さな個人の失踪事件の解決より、この町自体の問題の解決を優先させたのです。つまり、彼の存在を守ろうとしたのです。署長も、市長も、そういう判断をしたわけです」
「背景は、よくわかりました。しかし、蓮造氏は何故、そうまでして森川氏の奥さんの失踪を隠す必要があったのですか？」
「はっきりとしたことはわかりません。蓮造も含めて、当時のそういった連中はもうすでに全員が亡くなってしまっていますから…。ですから、これからの話は、完全に私の推測ということになりますが…」
「かまいません。お話し下さい」
「蓮造が動いたのは、息子の蓮作を守る為だったと思います」
「つまり、奥さんの失踪に蓮作氏がかかわっていたと？」
「ええ、おそらく…。失踪直前まで二人が一緒にいたというところまでは、私も突き止めていましたから…」
「あなたが、核心に触れようとしたから、蓮造さん達から圧力がかかった、ということですね？」
「そういうことです…。そこで、思い出していただきたいのが、先ほど私がお話した森川さんが失踪した直後の話です」
「森川氏が失踪した直後から、親しいはずの三人の仲間が急に疎遠になったという…」
「ええ、それです」
「確かに、三人は、表面的には完全に仲間同士の付き合いを断っていたのでしょうね。村井氏の葬式にも、小宮山氏の名前は弔問者の名簿になかったはずです。弔電も、花輪すらもなかった」
　石塚は、部下の加藤幸博に弔問客のチェックをさせていた。
「しかも、生前の村井氏は、狩猟をやりに何度も地元に帰っていたのにもかかわらず、いつも泊まることはせずに、日帰りで東京に戻ってきていました」
　その石塚の説明に、田代が頷いていた。
　島田銃砲店での証言が、それを裏付けていた。
「そのはずです。表面上は、完全に縁を切っていたからですよ。しかし、それは、あまりにも不自然なことです…。いずれにしても、両方の失踪にかかわってくるのが、小宮山蓮作ということになってくるのです」
「そう考えれば、逆に、繋がってきますね…」
「ええ。しかも、ただの繋がりではありません。更に、私の推測ですが…。森川さんの奥さんは、ご主人の森川さんの失踪の真相を探ろうとして、もしくは、その真相を知ってしまったから、口封じをされてしまったのではないでしょうか…」
「口封じ…？」
「はい。殺されてしまったという意味です」
「奥さんが、殺された…？」
「そうです。仲間の三人の共有する秘密を知ってしまったからです。勿論、これは私の出したひとつの仮説にすぎませんが…」

田代と石塚が、顔を見合わせた。
「仮に、もしそうだとしたら、奥さんを手にかけたのは、その三人のうちの誰かということですか…？」
「状況的には、そう考えるのが一番自然です」
「だとすれば、今回の一連の連続殺人の目的は…」
「その当時の、三人の秘密にかかわること。そして、森川夫婦の失踪にかかわること、に間違いないでしょう」
「そうなると、蟹が次に狙うのは…」
いつしか、田代達は犯人のことを「蟹」と仮称していた。
「三人のうちの最後の生存者、小宮山蓮作以外に考えられません」
再び、田代と石塚が顔を見合わせた。
「いずれにしても、そういうことでしたら、とにかく、小宮山蓮作氏ご本人に会ってみましょう…。山崎さん、小宮山氏の普段の住居をご存知ですか？」
「場所はわかりませんが、地元にはほとんど顔を見せません。国会議員ですから、基本的には自宅のある東京都内だと聞いています」
「都内ですか。それは、都合がよかった…。石塚さん、小宮山議員の居所を調べてください。我々も、今からすぐに東京へ戻りましょう」
「わかりました、室長！」
石塚が、携帯を取り出した。
「あ、あの…。相手が現役の国会議員となると、上の許可やら、いろいろと段取りが必要なのでは…」
二人の、素早すぎるやり取りを見ていた山崎が不安そうに訊いた。
対象が、現役の国会議員であることなど、まるで意に介していないような普通すぎる対応だったからだ。
「ははは…、その点なら、ご心配には及びませんよ。対象が、都内であれば大丈夫なんですよ。こちらの田代室長は、東京管内の最高責任者とは車の中からの電話一本で直接許可をいただける間柄ですから」
「えっ、東京管内の最高責任者って…？」
「警視庁の宗方本部長殿ですよ…。おっと、失礼します。成城署からです…」
石塚は、そう答えるやいなや、
「…あっ、もしもし…」
かかってきた電話をとって、話を始めてしまった。
山崎と菅野は呆気にとられて、ただそれを見ているだけだった。
「田代室長。今の石塚部長のおっしゃった話は、本当なんですか…？」
今度は、菅野の方が田代に訊きなおした。
「何がですか？」
「宗方本部長殿と電話一本で、という…」
「ああ…。ええ、まあ。けっこう親しいですよ」
何気なくさらっとそう言って返す田代を見た菅野は、改めて彼の奥深さを思い知った。
「そんなことよりも、菅野さん。あなたには、これから急いで調べていただきたいことが

あるのですが、よろしいですか？」
「はい、何なりと！」
「実は、僕も石塚さんも「蟹」は二匹いると考えているのです」
「ええっ、二匹…！ 単独犯ではないんですか？」
菅野は驚いた。
「はい、おそらく。実行犯の蟹と、それをほう助する蟹がいるはずです。そうでないと、今回の犯行は成り立たないんです」
「その話は、今始めて伺いました。合同捜査の席上では一度も出てきませんでした」
「僕も石塚さんも、先ほどの山崎さんの話を聞いて、確証を持ったのです。それで、急遽あなたに調べていただきたいことができたんです」
「わかりました。おっしゃって下さい」
田代の指示の詳細を聞いた菅野は、急ぎ、町中へ戻った。
目指したのは、市役所だった。
「田代室長、繋がりましたよ。成城署からの新情報です！」
電話の話を終えた石塚が、興奮気味に言ってきた。
「蟹が使った例の兎の耳の冷凍宅配便の起点がわかりました。やはり、東京の集配所でした」
「やはり、いわき市ではなく東京からでしたか」
「はい。しかも、奴が送った相手は二人だけではありませんでした。もう一人いました」
「村井氏と寺島氏と、もう一人は…」
「はい、小宮山蓮作氏です！」
「やはり、そうでしたか。石塚さん、繋がりましたね！」
「はい！」
山崎哲朗の推論は、その場で証明された。

三十五．照合作業

同じ頃。警視庁、広報室―。
五十嵐麻美は、田代に頼まれた書類の確認作業に没頭していた。
この一年間のうちに、ＳＫＣ社製のスチール散弾を購入した者の洗い出し作業であった。作業そのものはさほど難しくなかった。事前に、関東六県と福島県にある散弾の販売店に問い合わせをして、戻ってきたその回答紙に書かれた購入者の名前を、手元にあるクレー射撃協会の選手登録の名簿と照合するだけだった。名簿は、協会の理事長をしているＭＪ社の三上恵造がすぐに手配して送ってくれた。
すでに、依頼したすべての販売店からも回答が戻ってきていた。その回答紙の中には、田代が若い頃から懇意にしている島田銃砲店のものも含まれていた。射撃場自体がない東京都はもとより、散弾を販売する銃砲店の数はさほど多くない。概ね、ひとつの県に五、六ケ所程度だ。
結局、集計された該当者は、全部で１２０人程度だった。

田代の指示は、最終的に、その該当者の中から福島県のいわき市の出身者を探し出せ、ということだった。そして、その最終該当者は、一人だけだった。

「やっぱり…。彼だったのね…」

その名前を見た麻美は、思わず呟いた。

それから、デスクの横に置いてある数枚の拡大写真に目をやった。

それは、つい一時間ほど前に、成城署の石塚の部下からメールで送られてきた写真だった。大型のハサミを購入した時の渋谷のＤＩＹ専門店でのものと、宅配業者の集配所の受付窓口に備え付けられている店内カメラに写ったものだった。十日前に、「蟹」と称した兎の耳が入れられた三つの荷が持ち込まれた時のものだ。村井和滋と寺島清隆、そして、小宮山蓮作宛の荷物だ。双方の拡大写真には、二十代半ばくらいのサングラスをかけた同じ男が写っていた。そして、それは彼女もよく知る人物だった。

その宅配業者の集配所は、世田谷の三軒茶屋にあった。それは、たった今調べた最終該当者の現在の住居からすぐの所にあった。

拡大写真の横には、他にもう一枚の打ち出した別の印刷物がはさんであった。新聞の地方版の小さな記事を拡大したものだった。これも、十日前のものだ。世田谷区立の小学校の飼育小屋から、深夜未明に兎が二羽盗み出された旨の記事が書かれたものだった。そして、その小学校もまた、最終該当者の住むアパートの近くにあった。

石塚の部下がその小学校へ行って、話の裏を取っていた。盗まれた兎は綺麗な白色とのことだった。いわき南署の菅野から入ってきていた情報で、寺島宅に届いた兎の耳も同じ白色だということもすでに確認されていた。

麻美は、田代へ報告の連絡を入れた。

「ご苦労様です、五十嵐です…。例の散弾購入者の照合作業ですが、たった今、終わりました…。はい、メールで室長のタブレットに送信します。…はい、写真と同じ人物でした。…えっ、戸籍謄本もですか？　わかりました…。それも、取り寄せ次第、メールで送ります…。はい、急ぎます…」

田代水丸の嗅覚は、確実に「蟹」の正体に迫っていた。

三十六．行方知らず

常磐自動車道、美野里パーキングエリア―。

辺りは、薄暗くなりかけていた。

田代は、いったん車を停めてタブレットに見入った。

助手席に座る石塚と共に、部下の五十嵐麻美から送られてきたメールの詳細を見る為だ。普段だと、運転するのは石塚で、助手席側が田代だった。だが、今回だけは違っていた。東京へ戻る車中で、石塚は小宮山蓮作に関する情報を集める作業に専念しなければならなかったからだ。

それほど、事態は急を要していた。

小宮山蓮作の所在が確認できなくなっていたからだ。

小宮山は、自宅のマンションにはいなかった。しかも、その所在は、秘書達にも知らさ

れていなかった。滅多にないことだと、秘書達は口をそろえた。そして、頼みの携帯電話も繋がらなかった。
じきに、追加で頼んだ最終該当者の戸籍謄本が、麻美から送られてきた。
「やはり、母方の姓でしたね…」
「田代室長。これで、決まりですね…？」
「ええ。彼が、実行犯の方の蟹と考えて間違いないでしょう…！」
「さっそく、蟹のその住居にうちの職員を向かわせましょう」
「お願いします。それと、小宮山議員の保護の手配の方も引き続きお願いします」
「そうですね。こうなると、一刻も早く小宮山議員を探し出さなくては…！」
石塚がまた、慌ただしく携帯をかけ始めた。
田代が、車を発進させた。

三十七．保管庫の中

同時刻―。
都内、世田谷区。三軒茶屋近郊―。
加藤幸博は、同僚の捜査官と共にそのアパートの入口にいた。
目の前の部屋の鍵の到着を待っていた。
さほど待たされずに、そのアパートの管理会社の人間が到着した。加藤達がここへ向かっていた移動中に、成城署の後方支援の担当者がその管理会社を探し出して、部屋の鍵を持ってくるように頼んでおいてくれたのだ。
「ご協力、感謝します」
マスターキーで、室内に入った加藤達は思わず自分の鼻を抑えた。酷い異臭がたちこめていたからだ。
「な、何だ。この臭いは…？」
何かが腐ったような悪臭であった。
「どうやら、これからですね…」
捜査員の一人が、台所の脇に無造作に置いてあるゴミ袋を指した。悪臭に耐えながら袋を開けてみる。
「うわっ。何だ、これは？」
その捜査官が、思わずそう叫んで後ずさりした。
二匹の動物の死骸だった。
腐った死骸だった。吐き気をもよおすような悪臭を放つほどに、腐敗が進行している。
「モルモットにしては、でかいな…」
正気を取り戻した、捜査官が顔を歪めながら言った。
「いや、違う…。それは、モルモットなんかではありませんよ。それは、兎です。耳を切り取られた兎ですよ」
一連の事件の概要を頭に叩き込んでいる加藤には、すぐにそうだとわかった。
「あいつが、やったんだ…」

加藤には、兎の耳を切り落とした男の顔がはっきりと脳裏に浮かんでいた。
村井和滋の葬儀の時の斎場で、不覚にも取り逃がしたあのサングラスの男だ。渋谷のＤＩＹ専門店で大型バサミを買ったあのサングラスの男だ。
上司の石塚は、その男のことを「蟹」と呼んでいた。
そして、「蟹」は、このアパートからそう遠くないところにある宅配便の集配所にも出没していた。すでに加藤は、サングラスを外した「蟹」の素顔の方も成城署から送られてきた写真で確認していた。自分とほとんど年齢が変わらない二十代半ばの青年だ。
「鑑識の手配をお願いします」
捜査員にそう頼むと、加藤自身は奥の部屋へ進んだ。
最優先で確認することがあった。「蟹」が所有する散弾銃の有無の確認だ。
部屋の隅に縦長の小さな金属製のロッカーがあった。目指す銃の保管用のロッカーだ。鍵はかかっていなかった。
加藤は、その扉を開けてみた。中は、空だった。

三十八．可愛い女

その高級外車は、東富士五湖道路の山中湖インターを降りて国道に入った。
小宮山蓮作は、鼻歌交じりで運転する上半身を軽快に揺らしていた。
ナビは、目的地への到着時間を、あと五分と知らせていた。
蓮作は、湧き上がる期待感に胸を躍らせていた。あと五分で、彼女に会えるからだ。人の目を気にせずに、あの女を、あの素晴しい体を、思いきり抱けるからだ。
不能だった夫と死別し、解放された女は、自分に夢中になっていた。
以前とは、まるで人が変わったように、積極的で開放的な女になった。喪服を着て交わった時の興奮が忘れられないと言ってきた。顔を見られずにお忍びで使える宿泊施設を探してきて、誰にも知られずに思いきり甘えたいと言ってきた。
国会議員である自分のことを案じているからだと言った。でも、それ以上に彼女自身の為だとも言ってくれた。都内のホテルでは、人の目が気になって、落ち着いて愛し合えないからだそうだ。女の希望通り、携帯電話の電源もオフにした。
可愛い女だった。夜を徹して、存分に可愛がってやろうと思った。
アクセルに知らず力が入っていた。

三十九．悪い知らせ

常磐自動車道、守谷サービスエリアー。
夕陽が、完全に落ちようとしていた。
二人は、缶コーヒーを飲みながら、その連絡を今かと待っていた。世田谷の三軒茶屋にある蟹の住居に到着した部下の加藤からの連絡待ちだった。
小宮山蓮作は、依然として行方知らずの状態であった。

「田代室長…、小宮山議員ご本人は、今の自分が置かれている事態をどの程度把握されているのでしょうか？」
「わかりません。ですが、まだ、何もわかっていない可能性が高いですね」
「何故、そう思われるのですか？」
「蟹の予告メッセージを、彼は見ていないと思いますから」
「例の兎の耳の宅配便のことですね。確かに、あの時、村井氏や寺島氏との電話のやり取りがまったくありませんでしたからね」
「おそらく、彼の職業の性質上、毎日のように地元から何らかの贈り物が届いているでしょうから、地元発信の宅配物はいちいち本人が見るということはしないのでしょう」
「そうすると、秘書さんかなんかがチェックをして、その場で処理されていたんでしょうね。そういうことかぁ…」
　しばらくして、石塚の携帯が鳴った。加藤からだった。
「ご苦労さん。どうだった…？ そうか、いないか…。で、ロッカーの中はどうだった…？ 持ち運び用のケースもないのか…」
　石塚の顔が、見る見るうちに曇っていった。
「わかった…。よし、ＧＰＳの足どり捜査も合わせてやってみてくれ…。うん、かまわん。最優先だ…」
　石塚が、残念そうに田代の顔を見た。
「加藤からです。悪い知らせです…。不動産屋さんに頼んで部屋の中に入ることはできましたが、残念ながら奴はいませんでした。しかも、銃の保管ロッカーは空です。持ち運び用の銃ケースも消えています。奴は、銃を持ってどこかへ出かけています…」
「まずいですね…。こんな時間に、クレーを撃ちに行くとは思えませんから…」
「撃つのが、クレーではないとしたら…」
　石塚の顔が強張った。
「石塚さん。小宮山議員の携帯のＧＰＳ情報を急がせてください。繋がったら、すぐに、僕のこのタブレット端末に転送するように手配してください」
「わかりました。議員の携帯はスマートホンタイプではなくガラ携タイプなので少し時間がかかっていますが、もう間もなく位置情報が追えるはずです」
　田代は、ライトをつけて車を出した。

四十．情熱の口づけ

　富士山麓―。
　宿泊施設の広大な敷地内に入った小宮山蓮作は、部屋番号が書かれた木製の案内板を頼りに林の中の小道を進んだ。
　各コテージは、それぞれが完全に独立して離れて建っていた。
　ここならば、彼女が望むように人の目を気にせずに二人だけの時間を過ごすことができると蓮作は思った。じきに、彼女から教えられた番号のコテージの前に着いた。
　入口のドアを開けると、中にいた彼女が待ち兼ねていたように抱き着いてきた。

「会いたかったわ！」
そのまま、蓮作に口づけをせがむ。
二人は、情熱的な接吻を交わした。
「ん？」と、それに気づいた蓮作が一瞬目を開けた。
絡めた彼女の舌が、何かの錠剤のようなものを自分の喉に押し込んできたからだ。彼女は首を横に振りながらなおも接吻を続け、それを蓮作の喉の奥へ押し込んだ。
「い、今のは…？」
やっと、唇を離した蓮作が訊いた。
「殿方の大事なものが、ずっと逞しくいられるあの有名なお薬よ。恥ずかしいから、もう、これ以上は女の私に言わせないで…」
そう言って、彼女は真っ白い頬をピンク色に染めた。
「ククッ。そうか、そうか…。それは、すまなかったな！」
蓮作は、感激しながら、嬉しそうに笑った。
そして、もう一度彼女を抱きにかかった。今度は、押し倒す勢いだった。
「もう、あなたったら…。せっかく、美味しいワインとおつまみを用意したんだから、まずは、くつろいでちょうだい。夜は長いのよ」
彼女は、蓮作の手を振りほどきながら諭すように言った。
「でも、その前に、一度だけ…！」
火がついてしまった蓮作は、おさまりそうにない。
「わ、わかったわ…。じゃあ、せめて、先にシャワーだけでも浴びさせて。ねっ！」
それで、やっと蓮作がおさまった。
「しょうがないなぁ…。そのかわり、早く済ませるんだぞ」
「勿論よ。先にビールを飲んでいてね。冷蔵庫に冷えているから」
彼女が、とろけるような笑顔を残して、浴室へ向かった。
蓮作は、冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、一気に呷った。何度も飲んだことがある普通の缶ビールではあったが、これほど美味しいと感じたことはなかった。
もう一度、呷る。
夢のような心地になってきた。

四十一．急行

首都高速三号線、渋谷界隈―。
小宮山蓮作の所在を模索する中、二人を乗せた車はとりあえず三軒茶屋に向かっていた。
走行中の車内で、石塚の携帯が鳴った。成城署の後方支援の担当者からだった。
「わかった。ちょっと、待ってくれ…」
石塚は、いったん携帯を置くと、田代のタブレットを操作した。
中央に赤い丸印が点滅する地図が現れた。石塚は、再び携帯を手にすると、
「確認した。ありがとう…。すぐに、各員に連絡を取って、この発信源へ急行させてくれ。それから…、全員、拳銃の携帯と防弾ベストの着用を忘れないように指示してくれ…」

「石塚さん、場所は？」
電話が終わるやいなや、すぐに、田代が訊いた。
「このまま東名高速へ乗って、御殿場方面へ向かって下さい…。場所は、山中湖インターから五キロほどの所です」
石塚は、タブレットの地図を拡大しながら、答えた。
「了解！」
田代が赤色の回転灯を車の屋根の上に付け、サイレンのスイッチを入れた。
追い越し車線に入り、スピードを上げる。
「蟹は車を所有していませんから、一人で山の中のこの目的地まで行くのは困難です。祖師谷の自宅の駐車場には、相変わらず彼女の車はありません。昼過ぎに出たきりです。おそらく、どこかで、蟹と合流して乗せたのでしょう。となれば、彼女も一緒に現場にいるでしょうから、気をつけて行動しなければ…」
「そうですね。非常時の時に、彼女を巻き込まないように注意しましょう」
「今思えば、村井氏の所に兎の耳の宅配便が来ていたのを彼女が隠していたことに、もっと早く気付くべきでした」
「ええ、そうですね。しかし、今は、小宮山議員の救出のことだけに集中して、全力を尽くしましょう」
「はい…。間に合えばいいが…！」
そう言うと、石塚は自分の拳銃を取り出し、中の弾の点検をした。

四十二．蟹の正体

「ううう…っ」
小宮山蓮作は、少しずつ意識を取り戻していた。
まだ、意識が朦朧としていた。目の前に、立っている女は村井琴音のようだった。だが、シャワーを浴びに行っていたはずなのに、まだ衣服を着たままだった。
彼女の方に手を伸ばそうとしたが、伸ばせない。何度やろうとしても駄目だった。
そのうちに、自分の両手が座らされている椅子と一緒に後ろ手に縛られていることに気づいた。
「うっ、うっ…！」
蓮作は、必死にほどこうとするが、びくともしない。
その様子を、琴音が笑って見ている。今までに、見せたことがないような冷たくひきつった笑い顔だった。
蓮作は、更に驚いた。
彼女の隣で、もう一人が笑っていた。二十代半ばくらいの若い男だ。
琴音と同じように冷たくひきつった笑い顔だった。ぼやけていた男の顔の輪郭が、少しずつはっきりとしてきた。どこかで、会ったことがある顔だと思った。
「お、おまえは…？」
蓮作が、やっと言葉を口にした。

まだ、意識は半分朦朧としている。
「俺かい？　俺は、蟹だよ…」
「な、何だって…？」
「だから…、おまえの耳をちょん切る蟹だよ」
そう言って、若い男が自分の右手のものを見せた。
それを見た蓮作は、ぎょっとした。その男の手には、大型のハサミが握られていたからだ。
「な、何を、わけのわからないことを言っているんだ…。琴音…。こいつは、いったい誰なんだ。何で、ここにいるんだ？」
「ほほほ…。ご紹介するわ。私の実の弟よ」
「弟…？　弟がいたのか…？　まあ、何でもいいが、これは、いったい何の真似だ。早く、ほどいてくれ！」
「そうはいかないわ。こうする為に、言葉では言えないほど苦労して、やっと、あなたをここまでおびき寄せてきたんですからね」
「おびき寄せて…？」
蓮作の頭の中は、完全に混乱していた。
するなという方が、無理だった。
「い、いったい、何のことなんだ。俺を、どうしようというんだ…？」
「償ってもらうのさ。昔、おまえが犯した二つの大罪を…」
そう言って、若い男が入口の方に視線を送った。
そこには、散弾銃が入ったケースが立てかけられていた。
「た、大罪…？　何のことだ？」
「二十五年前に、おまえが犯した二つの大きな罪のことだよ。忘れたとは言わせないぞ！」
「二十五年前…？」
そう呟いた蓮作の表情が、徐々に強張っていった。そして、
「ああっ。ま、まさかっ！」
蓮作が、大声をあげた。
そして、何かを確かめるかのようにまじまじと若い男の顔を見た。
「どうやら、わかってきたようだな…。俺の顔は、今、おまえが頭の中で描いているその誰かによく似ているだろう？」
「おまえは…、おまえは…！」
「俺の今の名前は、緒方晴彦…。しかし、緒方姓はわけあって使っている母親の方の苗字だよ。父方の苗字は、森川だ。俺の本当の名前は、森川晴彦だよ！」
「ついでに、教えておくわ…。わたしの本当の名前は、森川美晴よ！」
「お、おまえ達はっ？」
「俺達は、森川賢治と森川美千代の子供だよ！」
「な、なんだと！」
蓮作の浅黒い顔が、一気に血の気を失っていった。
「ほ、本当か、琴音…。本当に、おまえは、美晴なのか？　森川美千代の娘の美晴なのか？」
「ええ、そうよ。正真正銘の血のつながった娘よ」

「し、しかし、琴音という名前は…。それに、顔も違うようだし…？」
「その名前は、新宿の店で働いていた時の源氏名をそのまま使い続けていたのよ。村井やあなた達に私の正体を知られないようにね…。顔は、少しだけ整形したのよ」
「あああああっ！」
蓮作が、泣いたような大声をあげた。
「やっと、わかったようだな。これで、自己紹介は終了だ。残るは、裁判と刑罰の執行だな…」
晴彦が、手にしたハサミを一回空に向かって切る動作をしてみせた。
チョキーンという大きな金属音が、部屋中に響いた。
「そ、そのハサミで、何を…」
蓮作が、声を震わせた。
その怯えた姿には、もはや普段の高圧的な代議士の面影は微塵も見られなかった。
「ククク…、決まっているだろう。悪さをした兎の耳を切り落とすんだよ」
そう言いながら、晴彦は開いたハサミの刃で、蓮作の耳を撫で回した。
撫で回しながら、楽しそうにチョッキン、チョッキンナ…と、繰り返し口ずさんだ。
「やっ、やめてくれっ！」
蓮作が、震えたような大声をあげた。
「ヒャッ。ヒャ、ヒャ、ヒャッ！」
その怯えた様子を見た晴彦が、心底楽しそうに笑った。
笑いながら、ハサミを激しく開閉させる。チョキーン、チョキーンという大きな金属音が、部屋中に乱れ響いた。
「た、頼む、琴音。やめさせてくれっ！」
蓮作が、泣き声をあげて、哀願した。
「ほほほ…。そうね…、どうしようかしらね…」
琴音が、捉えた獲物をいたぶるような冷酷な笑顔を浮かべて言った。
「それじゃあ、ちゃんと事実を喋ったら、それだけは許してあげましょうか」
「ククク…、そうだな…。もし、おまえがこれからちゃんと事実だけを喋れば、そんな痛いことはせずに、別の方法にしてやってもいいぜ…」
蓮作の耳から、ハサミが離された。だが、ホッとしたのは束の間だった。
晴彦は、ポケットから何かを取り出すと、それを椅子に固定された蓮作の足元に転がした。その二つの小さな物体は、半分弾んだように転がった。
「忘れるなよ。もし、嘘をつこうとしたら、おまえもこうしてやるからな」
足元の「それ」を見た蓮作の目が大きく見開かれた。
「そ、それは…？」
「見た通りのものだよ。人間の耳だよ…。正確に言うと、おまえのお友達の寺島清隆の耳だよ。ほら、このコブみたいに膨らんだ特徴に、おまえにも覚えがあるだろう？」
「あああっ！」
蓮作が、再び恐怖のどん底へ突き落された。
「いいな、小宮山。正直に事実だけを話すんだぞ。死んだ村井や寺島からも、すでに、同じように話を聞いているんだからな。それと食い違うことを言えば、すぐにバレるからな

…」
「わ、わかった。何でも、正直に話すっ！」
「ほほほ…。それじゃあ…、まずは、父の時のことから聞きましょうか」
蓮作の正面に立った琴音が、見下ろしながら言った。
「わ、わかった…」
腹を決めた小宮山蓮作が、ゆっくりと話し始めた。
「お、俺達四人は、子供の頃から仲が良かった…。小学生の頃から、山へ入っては狩りの真似事をして遊んでいた。大人になると、それぞれが猟銃の免許を取って本格的な狩猟をするようになった…。一番よく行ったのが、蟹打の森だった。あそこは、そばに小さな沢があるから、獲った獲物をさばくのに都合がよかったんだ。あの日も、四人で蟹打の森に入ったんだ…」
「父さんが消えた日も、狩猟をしていた時なのか？」
「そうだ…。あれは、三月の猟期も終盤に入った初春の頃だった…」

四十三．巻狩り

平成二年、初春。
福島県いわき市、蟹打―。
四人が、森の中へ入っていった。
「今日は、誰が一等賞かな？」
村井和滋が、ニヤニヤしながら言った。
「俺と蓮ちゃんと賢ちゃんは、もう二回ずつ獲っているぜ。だけど、おまえはまだ、一回も獲ってないな。このままだと、今シーズンはゼロで終わっちまうかもな。ククッ…」
その言い方には、皮肉がたっぷりに込められていた。
四人の中で寺島清隆だけは、このシーズンに入って、まだ兎を仕留めたことがなかった。
「おまえは、図体だけはデカいが、猟の方はからきしだな…」
「糞っ、見ていろよ、カズ。今日こそはやってやるぞ！」
寺島が、完全にその挑発に乗ってしまっていた。
「おいおい、カズ。からかうのも、その辺にしておけ。寺ちゃんはすぐに頭に血が上っちまうからな」
リーダー格の小宮山蓮作が、笑いながら諌めた。
「ははは…、蓮ちゃんの言う通りだ。森に入ってから、兎の代わりに間違って俺達でも撃たれちまったら大変だからな」
森川賢治も笑った。
「よし。それじゃあ、寺ちゃんの為に、今日は久しぶりに「巻狩り」でいこうぜ。勿論、寺ちゃんは撃ち手の方だ。賢ちゃん、悪いがそういうことだから、今日はカズと一緒に追い立て役の方を頼むよ」
「ああ、いいよ。そうしよう…。わかったな、カズ？」
森川が快諾し、

「ちぇっ、追い立て役の方か…。余計なことを言っちまったぜ」
村井も、渋々引き受けた。
蓮作が提案したのは、獲物を鉄砲の方へ追いたてる役と、それを待ち構えていて撃つ役の二組に分かれて行う猟法だった。蓮作に指名され、村井と森川が追い立て役に回った。蓮作は、寺島を仕留める確率の高い撃つ側の役にすることで、その場を収めようと考えたのだ。
分かれた二組が、それぞれの自分の持ち場の方へと向かった。
だが、寺島の焦りと憤慨はその後も収まらなかった。動くものすべてに発砲してしまいそうな興奮状態にあった。
「寺ちゃん。くれぐれも、慌てずに…」
と、蓮作が注意しようと声をかけた矢先のことだった。
パーンと、寺島の猟銃が火を噴いた。
草木をかき分けてその方向へ向かう蓮作は、嫌な予感がした。そして、その嫌な予感は当たってしまった。

四十四．告白

その時の光景を思い出した蓮作は、うなだれながら言った。
「…あれは、事故だったんだ…。功を焦った寺島のやつが、兎と間違えて賢ちゃんを…、おまえ達のお父さんを撃っちまったんだ。即死だった…。勿論、わざとじゃない。完全に誤射だったんだ…。それ以降、それがトラウマになった寺島だけは、銃を手にすることはなかった…」
姉弟は、顔を見合わせた。
「それから、父さんをどうしたんだ？」
「じ、事故なんだから…、なかったことにしてしまおうと、誰となく、そういう話になった…」
「ちゃんと、話せよ。誰が何を言って、誰が何をしたんだ？」
「死体を隠そうという話の口火を切ったのは、村井だ。俺の親父にうまくもみ消してもらえばいいと、言ってきたんだ」
「なるほどな…。それで、父さんの亡骸をどうしたんだ？」
「そ、それは…」
そこで、始めて蓮作が口ごもった。
「どうした…。早く、言えよ」
晴彦が、催促するように、再びハサミをチョキーンと鳴らして見せた。
「わ、わかった。話す！ 皆で、皆で、バラバラに解体して…、解体して、埋めたんだっ！」
「こ、この野郎っ！」
晴彦が、蓮作の顔を殴った。
「よくも、よくも、そんなことをっ！」
右に、左に、何度も殴る。

「父さんは、父さんは、人間だぞ。それを、兎やイノシシと同じようにっ！」
「すまなかった。ううっ！ 許してくれ、許してくれっ！」
何発目かを殴った時、ついに蓮作が、椅子もろとも床に倒された。
それでも、晴彦は攻撃の手を緩めない。
「この野郎、この野郎っ！」
今度は、倒れた蓮作めがけて蹴りを入れる。
「晴彦、その辺にしておきなさい。気絶でもされたら困るわ。まだ、聞きたい話の続きが残っているのよ」
琴音が、それを諌めた。
そして、床に倒れたまま悶絶の唸りをあげる蓮作の前に屈んだ。
「じゃあ…。今度は、母の時のことを話してもらいましょうか」
彼女は、蓮作の目の前に顔を近づけて言った。ついさっきまで熱い口づけを交わしたはずその唇から発せられた言葉は、その正反対の冷酷さに満ちていた。
「琴音…。もう、やめるんだ…。こんな話は、もうやめるんだ…。知らないでいることの方が、いいこともあるんだ…」
倒れた蓮作が、切れた口から血を流しながらも、諭すように言った。
「ふざけるな、偉そうに。おまえは、自分を何様だと思っているんだ。地元じゃあそれなりの立場だろうが、ここじゃあ、裁きを受ける犯罪者なんだよ！」
興奮の収まらない晴彦が、再び殴りかかろうとした。
「待って…」
手を挙げてそれを制止した琴音が、蓮作の顔を見つめた。この時、彼女踏み込んではいけない「何か」を直感し始めていた。
「いいから、母の時のことを話すのよ」
そう促した琴音のその目には、もはや引き返すことがかなわない何かの強い意志が見て取れた。
「わ、わかった…。そこまでの覚悟があるなら、話そう…」
蓮作も、腹をくくるしかなかった。
「…おまえ達の父親のことがあってから一年ほどたって、おまえ達の母親、美千代と会った時のことだ…。話をしているうちに、どちらからともなく、俺が彼女の面倒を見るということになったんだ。町の噂では、美千代がまだ小さかったおまえ達の生活の為にそういう道を選んだということになっていた。それが、大きな理由だったのは事実だ。だが、それだけではなかったんだ。おまえ達は信じないだろうし、信じたくはないだろうが、以前から俺と美千代は愛情で結ばれていたんだ…」
「な、何だと。母さんとおまえがだと？ 言うに事欠いて、ふざけたことを！ 嘘をついたら、耳を切り取られるってことを忘れたのか！」
晴彦が、怒りに震えた。
「落ち着いて、晴彦…。こいつの話を聞くのよ…」
琴音が、再び晴彦を諌めた。
「嘘ではない。本当の話だ…。俺と美千代は、あいつがおまえの父親と結婚する前から付き合っていたんだ。だが、俺は別の女性と結婚しなければならなくなった。いわきの町の

発展の為にと、親父達が勝手に名門の建設会社の娘との縁談を決めてしまったんだ。俺と彼女は、泣く泣く別れさせられたんだ。だから、再会した美千代は俺の所へ戻ってきたんだ…。俺への愛情が残っていたから、戻ってきてくれたんだ。勿論、あの時はまだ、俺には妻がいたから正式な関係ではなかったが…。俺は、賢治の失踪の真実を隠してでも美千代を受け入れようと思った。助けようと決心した。それは、まだ小さかったおまえ達姉弟のことも考えてのことだ…」

「は…、ははは…。こいつは、お笑いだ。おまえが、俺達のことを考えただと？　いいかげんにしろよ、小宮山！」

晴彦が、怒りと笑いがない交ぜになった怒号を浴びせた。

「じゃあ…」

対照的に、琴音が静かに訊いた。

「じゃあ、なんでその後、母は消えてしまったの？　仮に、あんたと愛し合っていたんだったら、消える必要はなかったでしょ？」

「そうだ。おまえの言う通りだ…。はっきり、言う…。美千代は、消えたのではなく…、こ…、殺されてしまったんだ…」

一瞬、部屋の中が静かになった。

「やっぱりな…」

晴彦が、吐き捨てるように言った。そして、訊いた。

「おまえだろう…。母さんを殺したのは、おまえだろう？」

「ち、違う。それは、違う。天に誓って、俺じゃない！」

「じゃあ、誰なんだよ？」

「…村井と寺島だ。二人が殺ったんだ」

「この期に及んで、まだ、人のせいにしようっていうのか…。　どこまで、おまえは卑怯な嘘つきなんだ！」

「ほ、本当の話だ。聞いてくれ…。俺と美千代は、それなりに幸せにやっていたんだ。おまえ達姉弟のことも、遠巻きに守りながらうまく暮らしていたんだ。だが、ある日、彼女に見つかってしまったんだ…！」

「何が、見つかったんだ？」

「ナイフだ…」

「ナイフ…？」

「おまえの父親の賢治が大切にしていた狩猟用のナイフだ…」

四十五．未練

煮立った鍋の中に、味噌が溶かされ、続いてネギが入れられる。

そして、最後におろしたばかりのぶつ切りにされた兎の肉が放り込まれる。

「さてと、あとは待つだけだ」

鍋の準備を済ませた寺島清隆がそう言うと、皆の視線は、一様に鍋に注がれた。

兎をおろしたナイフを、沢で念入りに洗い終った森川賢治もやって来る。

「おい、賢ちゃん。そのナイフ、よく見せてくれよ」
小宮山蓮作が、森川の真新しい狩猟ナイフに関心を見せた。
「ははは…。ありふれた、ごく普通のナイフだよ」
森川は、謙遜して見せた。
「まあ、そう言わずに、見せてくれよ」
言いながら、蓮作が半ば強引にそのナイフを手に取った。
「ありふれてなんかないじゃないか。こいつは凄くデザインがいい。よく目立つよ」
目の肥えた蓮作が言う通り、鹿の角を加工した柄の部分に独特の特徴があった。
「さっきも見ていたが、切れ味の方も抜群だしな」
「ああ。確かに、切れ味はとてもいいぞ」
「俺も、同じのが欲しいな。どこで買ったんだ？」
「美千代からのもらい物だからわからん。何でも、東京へ行った時に偶然見つけて買って来てくれたんだ」
「なんだ、奥さんからの…。しかも、東京かよ…」
それを聞いた蓮作が、小さく舌打ちをした。
「そんなに気に入ったんなら、東京まで買いに行けばいいじゃないか。常磐道が開通して、ここからずっと近くなったんだから」
村井和滋が、笑いながら言った。
「そうだよ。せっかく、蓮ちゃんの親父が通した高速道路なんだからな。使わない手はないぜ」
寺島も笑った。
「まあ、それはそうだが…」
蓮作が、未練気にナイフを返した。

四十六．捻じれた愛

「俺は、前からそのナイフがとても気に入っていて、どうしても一緒に処分できなかったんだ。そして、ある日、道具箱に隠してあったそれを、美千代が偶然見つけてしまったんだ…。特徴のあるナイフだったから、すぐに自分が賢治にプレゼントしたものだとわかったと思う。おそらく、その時に、彼女は賢治の身に何があったのかを薄々知ってしまったんだろう…。だが、それでも、彼女はそのことを俺に問い詰めることはしなかった。それは、おそらく、おまえ達のことを考えてだろう。いや、まちがいなくそうにちがいない…。すでに終わってしまった真実を暴くことよりも、自分の子供達のこれからのことの方を選んだんだ。おまえ達を守ることの方を優先させたんだ。それが、母親としての選択だったんだ。美千代は、そういう母性愛の深い女だった…」
蓮作は、噛みしめるように言った。
「だが、その後、俺はとんだ見込み違いをしてしまった…。そのことを、村井と寺島に相談してしまったんだ…。美千代に感づかれてしまった以上、賢治にしたことを公にして、罪を償おうと二人に持ちかけたんだ。何よりも、俺自身が、美千代に変に疑われているの

が我慢ならなかったんだ。だが、それは完全に俺の見込み違いだった。後になって考えてみれば、うかつだった。二人と俺とでは、受ける刑罰の大きさが違っていたんだ。俺は、死体遺棄のほう助の程度で済んだが、それを率先した村井の方は重い。寺島に至っては、更にそれに過失とはいえ致死罪が加わる…。そして、その二日後に、美千代の姿が急に消えてしまったんだ。つまり、あの二人が美千代を…」

再び、部屋の中が沈黙に包まれた。

「もう、たくさんだ。そんな戯言は充分だ…！」

「戯言なんかじゃない。全部、真実だ！」

蓮作の声を無視するように、晴彦は背を向けると、入口の方に向かった。

「面倒くさい儀式は省いて、一気に片を付けてやる」

そう言って、銃ケースを開けると、散弾銃を組み立て始めた。

「ちょ、ちょっと、晴彦。あんた、いったいどうしようと？」

「決まってるだろう。そいつを、あの世に送ってやるんだよ！」

組み立て終わった晴彦が、銃に弾を込めようとしていた。

「待ちなさい。まだ、聞きたいことがあるわ！」

「もう、充分だろう。こいつは、自分が助かろうとして、すべてあの二人のせいにして、嘘の上塗りばかりを繰り返していやがる。もう、これ以上、何を聞いても無駄だよ。もう、うんざりだっ！」

晴彦が、発射可能になった散弾銃を蓮作に向けた。

「やめるのよ、晴彦！」

琴音が、今度は両手を広げ、身を挺してそれを制止した。

「この人の言っていることは、おそらく全部本当よ。真実を言わなかったのは、前の二人よ。この人の話には、真実ならではの説得力がある。前の二人の時とは全然違うわ。おそらく、この人は、父さんや母さんの死と直接の関係はないわ！」

「きゅ、急に、どうしちまったんだよ、姉さん…。この男のおかげで、俺達姉弟がこの二十年間、どれほどの苦労をしてきたと思ってるんだ。親戚中をたらい回しにされて…。それでも、俺なんかは、まだましな方さ。俺の為に、姉さんは、姉さんは…」

銃口が、小刻みに震えていた。

「それに、どうしても…、どうしても聞きたいことが残っているのよ！」

「何なんだよ、それは？」

「そ、それは…」

琴音が、口ごもった。

「何なんだよ。どうしちまったんだよ、姉さん…。村井や寺島の時は、あんなに鬼みたいになっていたのに。むしろ、姉さんの方が気おくれしていた俺に命令していたくらいなのに…。今回は、全然、違うじゃないか…」

晴彦は、混乱していた。

「何で、今回に限って止めるんだよ。ま、まさか、姉さん…。本気で、こいつのことを好きになっちまったとかじゃないだろうな？」

「ち、違う！ そっちの方の好きじゃない！」

「じゃあ、何なんだよ。姉さん！ そっちとか、あっちとか…。いったい、何を言ってるん

だよ？」
琴音の心は、そうわめき散らす晴彦以上に混乱していた。
頭の中がグルグルと回り始めていた。
彼女は数分前から、少しずつ「何か」に気づき始めていた。蓮作と母親が愛し合っていたのが事実だとしたら…。二人が小さな子供の自分達を守る為に、世間体もはばからずに力を合わせようとしていたという話も事実だとしたら…。
「わ、私は…」
琴音が、急にガタガタと震えだした。
「私は…、私は…！」
その「何か」が、大きな渦になって彼女の頭の中を駆け巡っていた。
「こ、琴音…。いや、美晴…」
その様子を見ていた蓮作が、何かを言いかけた。
「やめて！ その名前で呼ばないでっ！」
琴音の震えが、激しさを増していった。
「み、美晴…。すまなかった！」
「やめて。嫌、嫌―っ！」
琴音は、ついに、その「何か」の確信を得てしまった。
そして、彼女は絶望的なうめき声をあげながら、その場に崩れ落ちた。
「だ、大丈夫か、姉さん？」
晴彦が、更に混乱した。
琴音は、崩れ落ちたまま、おおおっ、と嗚咽を吐いている。
「ど、どうしたっていうんだよ…？」
片や、椅子と共に床に倒れたままの蓮作は、「糞っ、糞っ！」と繰り返しわめきながら、床にガンガンと激しく頭を打ちつけ始めた。
「お、おまえまで…。何をやってるんだよ…？」
晴彦は呆然とした。
蓮作は、狂ったように、床に激しく頭を打ちつけていた。
「は、晴彦…」
打ちつけていた蓮作が、急にそれを止めたかとおもうと、晴彦を呼んで自分の方に振り向かせた。
その額には、うっすらと血が滲じんでいる。そして、鬼気迫る、恐ろしい表情になっている。
「な、何だ…？」
「俺を…、撃て…！」
「えっ…？」
晴彦は、思わず耳を疑った。
「いいから、俺を撃つんだ…！」
蓮作が、声を振り絞って、もう一度言った。
「きゅ、急に、おまえまで、どうしちまったんだよ…？」
「いいから、早く、撃て！」

蓮作の顔が引きつっていた。
だが、それまでの恐怖に支配されたそれとは異質のものだった。その眼光には、ある種の覚悟が見て取れた。
「ダ、ダメよ…、晴彦…。その人は撃たないで…。私を、撃って…」
床に顔を伏せたまま、今度は琴音の方が、そう哀願した。
「わ、わからねえよ。二人とも、いったい、どうしちまったんだよ…？」
晴彦が、ガクッと床に膝をついて頭を抱えた。
その時を待っていたように、バーンと、勢いよく入口の扉が開いた。
部屋の中に真っ先に走り込んだ加藤幸博が、晴彦の両手を後ろにひねりあげ、素早く手錠をかけた。呆然自失状態だった晴彦からは、抵抗はなかった。
続いて入った石塚が、蓮作を保護した。
田代は、晴彦の脇の散弾銃を確保した。手際よく銃を開放して、中に装填されていた二発の散弾を抜き取る。抜き取ったその弾は、ＳＫＣ社製のスチール弾だった。
「小宮山議員、警察の者です。大丈夫ですか？」
椅子ごと縛られたロープを外しながら、石塚が確認した。
だが、蓮作は何も答えなかった。それが、耳に入っていなかったからだ。すべての神経が自分以外のものに集中していたからだ。それは、およそギリギリのところで、自分の命が助かった者の反応ではなかった。それよりも大切なものに心を奪われている者の反応であった。ロープを外してもらっている間中も、彼の目線は、ずっと琴音から離れなかった。
体が自由になるや否や、蓮作は床に座り込んだまま体を震わせている琴音の元へ走り寄った。
「み、美晴…。すまなかった…。本当に…、本当に、知らなかったんだ…！」
抜け殻のように両手をだらんとさせたままの琴音の体を抱き寄せて、蓮作は懸命に詫び続けた。
「わあああああ…！」
抱きしめられたまま、琴音が泣きだした。
大きな声で、泣きだした。

四十七．駆り立てたもの

三十分もたたないうちに、現場のコテージの前は警察関係の車両で埋め尽くされていた。大型車両の投光器やたくさんのヘッドライトで、あたりは別世界のように明るくなっていた。遅れて到着した救急車が、その車両を縫うように通され、やがて、小宮山蓮作がその中へ運び込まれた。そのまま、救急車はあわただしく来た道を引き返した。
しばらくして、加藤に連行されて晴彦がコテージから出てきた。
先に出ていた田代と目が合った。一度目を伏せた晴彦が、まさかという感じでもう一度顔を上げた。
「あ、あんただったのか…」
晴彦は、そこで始めて田代水丸を認識したようだった。

「普段顔を合わすのは、射撃場だからね。まさか、こんな場所で、ということだね…。実は、君にひとつ聞きたいことがあってここで待っていたんだ」
「な、なんだ？」
「君は、何故、一連のすべての犯行にわざわざスチール弾を使ったんだい？　多くの人が使っている普通の鉛製のものを使えば、もっと捜査をかく乱できたはずなのに…？」
「さあね。手元にスチール弾しかなかったからだろう」
それを聞いた田代が、晴彦の手錠のロープを掴んでいる加藤の方に目線をやった。
加藤は、首を横に振って返した。
「それは違うようだね。三軒茶屋の君のアパートには、普通の鉛製の弾がいっぱい置いてあったそうだからね。やはり、君は意図的にスチール弾を使ったんだ」
「だとしたら、何なんだ。何が言いたいんだ？」
「君は、わざと犯人を特定しやすいスチール弾を使ったんだと僕は考えている。つまり、君は心のどこかで自分のことを見つけて欲しい、犯行を止めて欲しい、と願っていたんだと思う。犯行現場では、それが随所にうかがえた」
「ククク…。何を言い出すのかと思えば…。そんなわけないだろう。俺は、あいつらに復習したくて仕方がなかったんだからな」
そううそぶく晴彦に、田代が言った。
「確かに、君の気持の大部分は、そうだったのだろう。今思えば、それは、射撃にも表れていた。君の射撃は、競技会の会場で何度か拝見したが、その都度、何か引っかかるものを感じていた。この間の千葉の市原の時でもそうだった。君の射撃は、怒りと哀しみに満ちていた。得体のしれぬ憤懣と、嘆きだった。それは、殺気ともとれるものだった。そして、今回のことで、その理由がわかった…」
田代は続ける。
「あるクレー射撃の達人が言った言葉がある。射撃の上達の秘訣は、銃と会話をすることだと。つまり、銃に対して、愛情と信頼を持つということだ。だが、君のそれはその正反対だ。憎しみに支配されていた。だから、君はライバルの鈴木君にはなかなか勝てなかったんだよ」
「な、何だと…。元日本チャンピオン様だか何だか知らねえが、おまえに俺の何がわかるんだ。運が悪かっただけだよ。あんな鈴木みたいな温い人生しか知らない甘っちょろい奴に、この俺が負けるわけがないんだ！」
「甘っちょろいのは、君の方だよ。鈴木君が歩んできた人生は、決して君が言うような温いものではなかった。だが、彼は努力してそれを克服したんだ。僕から言わせれば、甘いのは、むしろ君の方なんだよ」
「ふん、好き勝手を言いやがって。今に見ていろよ。次は、必ず鈴木に勝ってやる！」
「いや。残念ながら、もう次はないよ。君には、二度とクレー射撃はさせない。たとえできたとしても、この僕が許さない！」
そう言い切ると、田代は加藤に向かって頷いて合図した。
頷き返した加藤が、晴彦を引っ張って護送用の車両に押し込んだ。
「田代室長…」
そのやり取りを見ていた石塚が声をかけた。

「あなたのおかげで、三人目の犠牲者を出さずにすみました」
心底、ほっとした表情だった。
「まあ、何とか間に合ってよかったですね」
「ええ。もう少し我々の到着が遅ければ…。実に、危ないところでした」
二人が胸をなでおろしていた時、今度は、婦警に連行された琴音がコテージの中から現れた。
晴彦が乗せられたのとは別の車の後部座席に入れられようとしていた。
彼女の足元はふらついている。抜け殻のような状態はまだ続いていた。だが、車に入る直前に彼女は田代の方に振り向いた。
そして、あの哀しい目で見つめてきた。わずかだが、唇が開いたのが見えた。何かを言いたげだった。だが、結局、何も言わずに目を伏せて、そのまま車に乗り込んだ。
「石塚さん…」
田代が、呟くように声をかけた。
「はい、何ですか？」
「確かに、我々はギリギリのところで小宮山議員の命を救うことができました。しかし、あの二人の姉弟が今まで歩んできた悲惨な人生を考えると、とても素直には喜べません…。そして、どうしてもわからないのです。あの姉弟をここまで復讐に駆り立てた力の源が何だったのかが…」
「さっそく、明朝からでも、あの姉弟の尋問を始めるつもりです。その過程で新しくわかったことが出てくれば、勿論、いの一番に室長にご報告しますよ」
「よろしくお願いします」
「では、お先に失礼します」
石塚は、晴彦の方の車の助手席に乗り込んだ。
先導するパトカーに続いて二台の車が走り去っていった。
田代水丸は、携帯を取り出して、まず宗方へ報告を入れた。それから、福島県警の菅野へ、科学捜査研究所の廣瀬へ、そして、鈴木翔英へ入れた。
最後に、五十嵐麻美へ入れた。

四十八．ただ一人の存命者

福島県、いわき市常盤白鳥町―。
木舟神社―。
山崎哲朗は、鳥居をくぐって参道をしばらく走ったところで車を停めた。
車を降りて、境内へ続く長い階段を上っていく。
半分を過ぎたあたりで足腰が悲鳴をあげはじめた。長い刑事時代に誇った体力も筋力も、今は昔であった。一段一段を噛みしめて上りながら、山崎は思った。彼女は、本当に毎日のようにこの階段を上り下りしていたのだろうか。初めて、身を持って知った驚きだった。彼女は、自分よりは十歳以上年上のはずである。しかも、女性である。
人知を超えた「何かの力」が、彼女を突き動かしていたのかもしれなかった。それは、

執念の力なのだろうか。あるいは、それは、怨念なのかもしれない。突然、我が子を奪われた母親の強い怨念だったのかもしれない。そうに違いない。
そうこう考えているうちに、階段を上りきった。
山崎は呼吸を整えながら、前方を見た。
広がる境内の敷地の向こうに拝殿が見える。そして、そこに彼女がいた。
森川佐和江だ。
拝殿に向かって正座をし、手を合わせて拝んでいる。
「佐和江さん…」
山崎は、後ろから声をかけた。
だが、反応はない。
「やはり、ここにいらしたんですね」
かまわずに話しかけた。
「お宅に伺ったのですが、ご不在なので、きっとここに来ているのだと思いました。今日は、あなたにご挨拶とご報告があって参りました…。不作法ではありますが、このまま話をさせていただきます」
山崎は、無心で拝み続ける彼女の小さな背中に向かって話を続けた。
「結果はどうあれ、やっと、ひとつの節目を迎えることができましたね…。やっと、です…。長いことかかりました…」
山崎は、感慨無量の面持ちで続けた。
「二十五年前のあの時は、本当に申し訳ありませんでした…。信じていただけないかもしれませんが、私自身も、あなたや美千代さんのお力になれなかったことを、今日までずっと悔やんで生きてきました…。口では言い表せないほど、大変な重荷でした…」
そこで山崎は、思わず目頭を押さえた。
それから、再び顔を上げた。
「でも、正直に言いますが、今の私は、長年苦しめられてきた呪縛からようやく解放された気分です。あなたからすれば、虫のいい話に聞こえるかもしれませんが、今の私は、長い間背負ってきた重い荷を降ろして、新しい気持ちで残りの人生を歩んでいけそうな気がしています。また、そう考えていかなければいけないとも思っています…。そして、できれば、あなたにもそういう風に思っていただきたいと心から願っております」
山崎は、話しを続けた。
「二年ほど前に、この神社の前であなたとすれ違いましたね。あの直前に、あなたがこの境内でこっそり会っていたのは、森川美晴さんと晴彦さん…、つまり、あなたのお孫さん達ですよね？」
その時、始めて佐和江に何かの反応があった。
わずかではあるが、一瞬だけ彼女の背中がびくっと動いたように見えたのだ。山崎は、かまわずに続けた。
「あの時、走り去った小型車を調べてみてわかったのです。あの車は、美晴さんのものでした。調べた当時は、村井琴音というまったく違う名前だったので、あなたとの関連性に気づかなかったのです。しかし、今回の一件で、今まで見えていなかったものが、すべて見えるようになったのです…」

山崎は、重大な何かを語ろうとしていた。
「あの時、あなたとお孫さん達との間で、どのような会話のやり取りが交わされたかは知るよしもありません。うがった見方をすれば、本当のあなたは、実は、普通に人と会話ができる正常な状態で、しょっちゅうお孫さん達と連絡を取り合っていたのかもしれません。あるいは、ここで、周到な復讐の計画が話し合われていたのかもしれません…」
山崎は、更に続けた。
「今回のことを通して、私は、ある疑問を持ちました…。二十五年前に連続して失踪が起こったあの時、二人は…、森川美晴さんと晴彦さんは、まだ幼い子供でした。そんな彼らが、親がいなくなった本当の理由などわかるはずがないのです。何故なら、小宮山蓮造らによって、すべての真相に完全に蓋がされていたからです。誰も、その真相に近づけなかったのです。唯一、真相に近づいたのがこの私です。しかし、私はその話は、いっさい子供達には話していません。私以外の誰かが、幼い二人に失踪の可能性を話したのです。そうとしか、考えられません。そして、その誰かは、情報を与えながら両親の復讐を子供達に炊きつけたのかもしれません。それができた人間は、たった一人しかいません…。それは、私からその真相を聞いていた、ただ一人の存命の人間です…」
恐るべき山崎の推論が語られた。
だが、今度は、彼女の背中に反応は見られなかった。
「しかし、今となっては、それもどうでもよくなりました。先ほども言いましたが、私はもう、この一件から完全に身を引こうと思っているからです。今お話しした私の推論も、あなたがそれに絡んでいたことも、もう、誰にも話そうとも思いません…。私は、すべてを忘れて、新しい人生をやり直そうと決意したからです」
そう言い切ると、山崎は背中をぴんと伸ばして、直立不動の姿勢をとった。
「では、佐和江さん。お達者で。これで、失礼します！」
山崎は、深々と頭を下げた。
そして、その場を後にした。
歩き始めた時、背中越しに佐和江の方から声のようなものが聞こえた。山崎はいったんその場に立ち止った。佐和江のそれは、嗚咽のようにも、泣き声のようにも聞こえた。だが、山崎は振り返らなかった。そのまま、また前に向かって歩き始めた。
階段を降りて、自分の車に乗り込むや否や、山崎はタバコを手にした。箱の中から一本取り出そうとした手が止まった。彼は、しばらく、じっとそれを見ていた。それから、無造作にタバコの箱を握りつぶした。そして、それを助手席に放り投げた。
山崎は、運転席の窓を全開させた。外に向かって大きく深呼吸をした。それから、車を発車させた。

四十九．同じ疑念

山崎の運転する車は、鳥居の参道を抜けて市道に出ると、市街の方へ走り去った。
田代水丸は、停車させた車のバックミラー越しにそれを確認していた。やがて、山崎の車はミラーから消えていった。

田代は、視線を木舟神社のある小山の方へ戻した。
ここに車を停めて、それを眺めるのは二度目だった。あの時は、おぞましい「何か」を感じていた。だが、今はそれを感じなくなっていた。不思議なくらいに、平穏になっていた。彼はシャツの上から胸にかけてあるペンダントに手を当ててみた。彼をトランス状態へ引き込んでいくような「何か」は感じ取れなかった。
参道の奥に境内へ続く階段が小さく見える。その先で、長年にわたって、人知れず「何か」が行われてきたはずであった。前回の彼の嗅覚は、それを感じ取っていた。だが、今回はそれがきれいに消え去っていた。
田代は、東京からひとりでここに来ていた。
どうしても、「ある疑念」が頭から離れなかったからだ。
森川美晴と晴彦は、何故あれほどの復讐劇に駆り立てられたのか、ということだ。両親の死が、彼らの目の前で起こったわけではない。自分達の脳裏に形として刻まれていたわけではないのだ。なのに、彼らはある意味その復讐のために自分達の人生のすべてを捧げて生きてきた。あらゆる犠牲をはらって、親の復讐のために生きてきたのだ。長年に渡ってあそこまで姉弟を突き動かしてきたのは、いったい何だったのだろうか。あるいは、そうさせた者がいるとしたら、それは誰だったのだろうか。
田代は森川佐和江に会って、それを確かめようと思ったのだ。
しかし、先客がいた。山崎哲朗だ。彼にも、もう一度会って話を聞こうと思っていた。だが、もう、その必要はないのかもしれなかった。おそらく、山崎は自分と同じ疑念を持っていたに違いない。そして、今、彼はその決着を自分なりにつけてきたのだろう。
田代水丸は考えた。
じっと、考えた。
五分ほど考えてから、車のスターターを押した。
発進した車は、そのままどこにも曲がらずに、常磐自動車道のインターへ向かった。そして、東京方面の入口に入っていった。

五十．裸身

一週間後。
新橋駅南口界隈―。
事件解決の内輪の慰労会は、いつもの和牛専門店で行われていた。
ホスト役である宗方俊夫に田代水丸、そして、鈴木翔英という常連組の三人に加えて、今回は石塚茂文が久しぶりに参加し、更に、それに五十嵐麻美が花を添えていた。
「五十嵐君は、今回も田代君のいいサポートをしてくれましたね」
彼女の参加のおかげで、宗方は、いつにも増して嬉しそうだった。
「ふふふ…。サポートだなんて、そんな…。あれは室長とのたわいない話の中で偶然に出たものですから…」
「確かにそうだったようだが、結果的にはその白秋の歌詞の内容が、封印されていた蟹打

での事件の存在を解くきっかけになったわけだからね」
「ええ、そうですね。結果的にはそうなりました。でも、田代室長なら、あの白秋の童謡のヒントに出会わなくても、最後はきっと解決されていたと思いますわ」
「ははは…。まあ、そうだろうね…。しかし、田代君。森川姉弟たちは、どうしてあの童謡を犯行のメッセージに利用しようと思いついたのかね？」
「あの作品は、姉弟達には特別な思い入れがあったようです。二人が、母方の親戚中をたらい回しにされていた時、まだ幼児だった晴彦に、美晴…、つまり琴音がよく童話集を読んでやったり、歌ってやったりして慰めていたのです。その中で、晴彦が一番好きだったのが、あの白秋の「あわて床屋」だったそうです」
「そうだったのか。あの童謡は、二人の姉弟達にとっては、辛い思い出の象徴だったのかもしれないな」
「ええ、そうだと思います。そして、両親の失踪の情報を集めていくうちに蟹打の地名にたどり着き、やがて蟹という言葉が、復讐と同義語になっていったのでしょう」
田代が続けた。
「ところが、二人が集めた情報には一番基本的なところに穴があいていたのです。琴音自身の出生の真実です。そこが抜けていた為に、今回の復讐劇は更なる悲劇を生むことになってしまったのです」
「琴音の実の父親が、小宮山蓮作だったということだね？」
「そういうことです…。復讐するつもりで近づき、関係を持ってしまった男が、自分と血がつながった父親だったのです…。琴音は生きていく為に、そして、両親の失踪の情報を得る為に、若いうちから「女の武器」を使わざるを得なかったのでしょう。幸か不幸か、彼女は、男性から見て魅力的な容姿を持っていました。おそらく、弟の晴彦も彼女のその身を切るような行動には薄々気づいていたことでしょう。やがて、琴音は核心に迫り、村井に近づいた。結婚までして情報を積みあげ、復讐の準備をしていった。そして、何も知らずに、最後のターゲットである小宮山と「関係」を持つことになってしまった、ということです…」
田代の的確で無駄のない説明は、時に冷酷さすら感じさせるものであった。
だが、田代本人が好んでそうしているのではないということは宗方も皆も理解していた。
「琴音は、結果的に両親の復讐は果たせたものの、それと引き換えに、大きな代償を払うことになってしまった、というわけだね…」
「ええ。取り返しのつかない重い罰を自ら受けることになってしまったのです…」
「あまりにも、残酷な結末だったな…」
部屋が、沈黙に包まれた。
「同情してはいけないのはわかっていますが…」
最初に口を開いたのは、麻美だった。
「…私が女だからというわけではありませんが、私は琴音を擁護してあげたいという気持ちもあります。見ようによっては、これは両親の敵討ちでもあるわけですから」
「うん、そうだな。同情心は禁物とはいえ、刑については、多少の考慮の余地はあるだろう。その辺りはどうだね？」
宗方が、石塚に訊いた。

「まあ、晴彦と違って、直接的な実行犯ではありませんから、その余地はあります。今のところ、琴音に該当するのは、三件の殺人の計画、晴彦を自宅の地下室に手引きしたという森川氏の殺人のほう助と教唆、それから、小宮山氏への監禁・暴行のほう助、といったところです。計画性はありますが、計画に至った動機から考えると抒情面はかなり考慮されるでしょう。しかも、被害者の小宮山自身が嘆願書を出しましたから」
「嘆願書…。そうか…。父親としての娘への愛情だな…」
「はい…」
「でも…。それでも、僕は、許してはいけないと思います」
翔英が、割って入った。
「特に、緒方君…、その、晴彦の方は…。あいつには、銃を持つ資格はありません！」
「君とは、クレー射撃の方で、いいライバル関係だったらしいね？」
「はい、とてもいいライバルでした。彼の存在があったおかげで、僕も日々の練習に励むことができたと言ってもいいくらいでした。そういう点では、とても残念です…」
翔英が、唇をかみしめて続けた。
「それだけに、裏切られたという強い思いもあります。僕の父も、僕が小さい頃に殺されてしまいました。だからといって、僕はその犯人に復讐をしようとまでは考えませんでした」
田代が、下を向いて小さく頷いていた。
翔英が、更に続けた。
「ある意味、僕は運がよかったのかもしれません。僕には、田代室長やＭＪの三上さんという正しく導いてくれる人が常にそばにいてくれたからです。そのおかげで、歪んだ復讐心を持たずに成長できたのかもしれません。そう考えれば、不遇な少年期を送った晴彦には、復讐という強い生きる目的が必要だったのかもしれません。百歩譲って、それは、わからなくもない…。しかし、本部長…。銃を持つ人間が、それを人に向けるようなことは絶対にあってはならないのです。僕は、田代室長に憧れて銃の道に入りました。純粋に、スポーツとして銃をやりたかったのです。だが、彼は違う。人を殺める為に銃の道に入ったんです。だから、彼には絶対に同情してはいけないのです。違いますか、本部長…？」
翔英は、目を赤くして力説した。
自分に、そう言い聞かせるように力説した。
「そうだ、翔英君。それでいいんだ…。それが正しい考えだ。警察官である以上、それでなくてはならない」
宗方は、父親が息子を諭すように優しく答えた。
翔英だけでなく、その場の皆もそれに深く頷いた。
「五十嵐君…、翔英君…。僕は、君達のように人の心のある部下を持って幸せ者です。君達のそれぞれの考え方は、人としてなくてはならないものだと思います。しかし、その最終的な判断をするのは、司法の役目です。裁判員と裁判官達です。我々警察官の役割は、そこへありのままの事実を渡すのみです。それ以上でも、それ以下でもない。そこへ、同情心のような自分の主観を入れることは決してあってはならないのです。その点は、どうか理解してくださいね」
「はい！」

二人が、声をそろえて答えた。
宗方は、笑みを浮かべて頷いて返すと、石塚の方に向いた。
「ところで、君達は晴彦だけでなく、琴音も関与していることに、いつごろ気づいたのかね？」
「それも、やはり、田代室長の例の力のおかげです。村井の死が、自殺ではなく他殺であると確定した時点で、犯人を手引きした人間の可能性が出てきました。つまり、もう一匹の蟹の存在です。通常なら、妻の琴音を疑うわけです。しかし、当時の私にはとてもそうは思えませんでした」
「君は、いつも女性の涙に弱いからなぁ。特に、琴音のような美人には…。ははは…」
宗方が、からかうように言った。
「ほ、本部長、また、そんなことを…。いや、でも、確かに図星です。ご指摘の通りです。わははは…」
石塚が、例の調子で頭をグルグルと掻いた。
「ははは…、話の腰を折って、すまん。続けたまえ…」
「はい。…しかし、田代室長は、違いました。彼女の身上を徹底的に洗わせました。新宿のクラブ時代はもとより、その前の埼玉の時代、更にその前と、残らず遡りました…。そして、ついに、福島のいわき市の時代にたどり着いたのです」
「うん、その流れはだいたいはわかっている。現地の職員を動員する為に、僕の所に田代君から応援要請の依頼があったからね。最速で、という彼の依頼だったんで、埼玉県警や茨城県警、それから福島県警には、僕が直接連絡を入れたんだ。先方は、ただの一般の女性の身上調査の為に、僕から直接連絡が入ってきたんで、わけもわからず右往左往していたがね」
「そうだったのですか。本部長殿がそんなことでわざわざ連絡を入れてくれれば、所轄の方々はさぞかし驚かれたでしょうね…。しかし、そのおかげで、異例のスピードで調査を進めることができました。そして、ついに、琴音の元々の本名が森川美晴であることを突き止めたのです。彼女は、森川賢治の失踪宣言の法律を利用して、自分の名前を緒方琴音に変えていました。つまり、母方を正式な苗字にしたのです。そして、更に村井と結婚して、村井琴音という、まったく別人の名前を手に入れたのです」
「そうなってしまうと、さすがに小宮山蓮作も、自分の実の娘だとは、気づかないな…」
宗方が、頷きながらワインを口に運んだ。
「はい、そういうことです。彼女の正体を知ることができたのは、ひとえに田代室長の判断と執念の賜物でした。私からすると、犯罪捜査に携わる者として、外面の素振りに左右されない田代室長の徹底した非情さが実に羨ましい限りです」
「たとえ、相手が、か弱き美しい女性であったとしても、「嗅覚の怪物」は容赦をしない、というわけだね。ははは…」
宗方が、また楽しそうに笑った。
「まさに、本部長のおっしゃる通りです。室長は、相手が女性であっても、常に非情さを持って接しておられます」
石塚も、それに便乗して楽しそうに言った。
「本当ですよ…。田代室長は、女性に関心がなさすぎます！」

それには、麻美も違った意味で乗ってきた。
「二人とも、ひどいな…。僕だって、人並みに女性には関心があるさ」
「本当かしら…？」
ワインのアルコールが、麻美を普段よりも強気にさせていた。
「ほ、本当だよ…」
事実、田代は夢の中で琴音の裸身を思い浮かべたことがあった。
自由を奪われた彼女が、ロープで天井から吊るされていた。豊かな白い肌にロープが食い込んでいた。綺麗な体の曲線が、有無を言わせずにロープでがんじがらめにされていた。そうされながら、あの美しくも哀しい顔で田代の方を見つめてきていた。不謹慎にも、この場でまた、その光景が浮かんできてしまう。
田代は、それを打ち消すかのように、あわてて半分以上入った残りのワインを一気にゴクゴクと飲み干した。
「おいおい、田代君。ゴクゴクと、随分もったいない飲み方だな。それは、けっこういい値段のワインなんだぞ」
普段は冷静沈着を絵にかいたような男が、見せたことのないような慌てた態度をとったことに、宗方は笑わずにはいられなかった。
「さすがの「嗅覚の怪物」も、そのワインの香りだけはわからなかったというわけですね。わはははは…」
石塚も、おもしろがって大笑いし、部屋は完全に明るさを取り戻した。
田代だけは苦笑いをして、空になったワイングラスを見つめた。
始めて会ったあの時、田代は琴音の哀しみの表情の奥に、更に深いもう一つの哀しみを感じていた。その時は、それが何かまではわからなかった。だが、その後もずっとそれが気にかかっていたのだ。
田代水丸は、思った。
あの時、琴音は村井の死に他殺の可能性があることを否定しなかった。
彼女は、自分の抱えている罪の意識から解放されたかったのだ。心のもう一方で、これから更に起こそうとしている罪を、誰かに止めてもらいたいと、必死になって訴えていたのだ。弟の晴彦と同じだった。彼女達もある意味では、犠牲者なのだ。
彼女はどうしているのだろう。新たに犯してしまった罪の意識に身もだえしながら、またあの美しい顔に哀しみをたたえているのだろうか。

五十一．協力依頼

千代田区、日本武道館―。
剣道日本選手権の決勝は佳境を迎えていた。
警視庁の代表チームが、まもなく開始される団体の決勝戦に臨もうとしているところであった。
今日も観客席には、田代水丸と五十嵐麻美の姿があった。
「五十嵐君には、今回の事案でも助けてもらったね」

「今回のって、例の耳切り事件ですか？」
「うん。そうだ」
「助けてもらった、だなんて…。あの駒沢公園のフェンシング大会の時の室長は、かなり落ち込んでいらっしゃるようでしたから…」
「あの時、もし君が強引に僕をベンチに座らせて話を聞いてくれなければ、解決にはもっと時間がかかってしまっていただろう。あの姉弟達が起こそうとしていた第三の殺人には間に合わなかったはずだよ」
「確かに、それは、そうかもしれませんね…」
「うん、まちがいなくそうだと思う。だから…」
「だから…？」
「だから、これからも、僕のサポートを頼む」
田代水丸が、はにかんだ笑顔で言った。
「はい！」
麻美も、優しい笑顔で返した。

了